札幌市文化財調査報告書
XI

1975

札幌市教育委員会

札幌市文化財調査報告書 XI

S 256 遺　跡
S 257 遺　跡
S 253 遺　跡

1975・7

札幌市教育委員会

例　言

1　本書は，札幌市白石区厚別町上野幌の丸紅株式会社宅地造成予定地内に所在するS256遺跡，S257遺跡およびS253遺跡の発掘調査報告書である。地番は各々815-5番地，919-1番地，1012-1番地である。

2　上記の三遺跡の調査は，札幌市教育委員会上野秀一が担当したが，現場の仕事は，S256遺跡を上野が，S257遺跡を羽賀憲二が，S253遺跡を高橋和樹がそれぞれ分掌した。

3　調査期間は，S256遺跡およびS257遺跡は昭和49年9月10日から10月24日まで，S253遺跡は同年10月25日から11月20日までである。

4　本書の編集は上野が担当したが，執筆は，Ⅰと Ⅱを上野が，Ⅱの土器の項とⅢを羽賀が，Ⅳを高橋がそれぞれ分担した。

5　発掘調査・整理において，下記の人々より協力と助言を賜った。

北海道大学文学部教授
札幌市文化財保護委員　大　場　利　夫

札幌大学助教授　　石　附　喜三男

北海道教育委員会振興部文化課

北海道開拓記念館　松下亘，野村崇

北海道大学文学部助教授　　岡　田　宏　明

北海道大学文学部付属北方文化研究施設

6　発掘調査には，下記の人々が従事した。内山真澄，長谷川克浩，山下芳教，笠井衛二，中津欣也，市瀬知子，和田ひとみ，北海道大学，北海道工業大学学生。

7　挿図浄書は，小尾栄子（トレース），佐々木裕美子（遺物実測），市瀬知子，長谷川克浩，山下芳教，藤井則明（拓本）らが主にあたった。

8　S256遺跡の遺構から出土した植物遺体の鑑定は，北海道開拓記念館矢野牧夫氏にお願いした。

9　炭素による年代測定は，学習院大学木越邦彦研究室に依頼中である。

10　石質の肉眼鑑定は，北海道開拓記念館赤松守雄氏にお願いした。

11　発掘期間中，整理，報告書出版まで，丸紅株式会社札幌一苫小牧開発室には，たえざるご協力とご理解を賜ったことを記し，感謝の意を表する次第である。

凡 例

① 挿図の住居址および住居址状遺構実測図縮尺40分の1，ピット実測図縮尺20分の1，S253遺跡の遺構実測図縮尺80分の1。

② S256遺跡出土土器拓影図縮尺3分の1，土器および土製品実測図縮尺2分の1，S257遺跡出土土器拓影図縮尺2分の1，S256，S257，S253遺跡出土石器実測図縮尺2分の1，4分の1。

③ 写真は，土器縮尺3分の1，S256遺跡遺構出土石器縮尺2分の1，同発掘区出土石器縮尺2分の1（図版16B），3分の1（図版17A，B），植物遺存体の縮尺は原寸，S257，S253遺跡出土石器縮尺原寸。S253遺跡陶磁器縮尺3分の1，銅・鉄製品縮尺2分の1，銅銭縮尺原寸。

④ 石器説明中a面とは，背面ないし実測図中の左側正面図をさし，b面とは，腹面ないし右側正面図をいう。

目次

Ⅰ　はじめに …… 1

第1章　発掘までの経過 …… 3

第2章　遺跡の位置と環境 …… 4

第3章　発掘調査の方法と層準 …… 7

第1節　調査の方法 …… 7

第2節　層　　準 …… 7

Ⅱ　S256遺跡 …… 13

第1章　遺構および出土遺物 …… 18

第1節　竪穴住居址および竪穴住居址状遺構 …… 18

第2節　ピ　ッ　ト …… 38

第3節　植物遺存体について …… 39

第4節　ま　と　め …… 43

第2章　発掘区出土遺物 …… 48

第1節　土　　器 …… 48

第2節　石　　器 …… 56

（石器一覧表）

（引用・参考文献）

Ⅲ　S257遺跡 …… 71

第1章　遺　　構 …… 75

第2章　発掘区出土遺物 …… 76

（引用・参考文献）

Ⅳ　S253遺跡 …… 79

第1章　遺構および出土遺物 …… 83

第1節　遺　　構 …… 83

第2節　いわゆる「風倒木痕」について …… 87

第2章　発掘区出土遺物 …… 90

第3章　小　　括 …… 91

（註）

結　　語 …… 97

挿　図　目　次

巻首図版

第1図　S256, S257, S253遺跡付近地形図（1：1000）

第2図　S257遺跡セクション図(point A-E)

第3図　S256遺跡セクション図

第4図　S256遺跡発掘区配置図および遺構関連図（1：200）

第5図　S256遺跡微地形図（ローム面）（1：200）

第6図　S256遺跡第1号竪穴住居址実測図

第7図　第1号竪穴住居址炉址実測図

第8図　S256遺跡第1号竪穴住居址出土土器拓影図

第9図　S256遺跡第1号竪穴住居址出土石器実測図

第10図　S256遺跡第1号竪穴住居址状遺構実測図

第11図　S256遺跡第1号竪穴住居址状遺構出土土器実測図

第12図　S256遺跡第1号竪穴住居址状遺構出土土器拓影図

第13図　S256遺跡第2号竪穴住居址状遺構実測図

第14図　S256遺跡第2号竪穴住居址状遺構出土土器実測図

第15図　第2号竪穴住居址状遺構出土土器拓影図

第16図　S256遺跡第2号竪穴住居址状遺構出土石器実測図

第17図　S256遺跡第2号竪穴住居址状遺構出土石器実測図

第18図　S256遺跡第1号ピット実測図

第19図　発掘区出土土器実測図

第20図　S256遺跡発掘区出土土器拓影図(1)

第21図　S256遺跡発掘区出土土器拓影図(2)

第22図　S256遺跡発掘区出土土器拓影図(3)

第23図　S256遺跡発掘区出土土器拓影図(4)

第24図　S256遺跡発掘区出土土器拓影図(5)

第25図　有孔土製円盤拓影図

第26図　S256遺跡発掘区出土石器実測図

第27図　S256遺跡E-3区出土石器実測図(1)

第28図　S256遺跡E-3区出土石器実測図(2)

第29図　S256遺跡発掘区出土石器実測図

第30図　S257遺跡発掘区配置図および遺構位置図（1：200）

第31図　S257遺跡第1号ピット実測図

第32図　S257遺跡発掘区出土土器拓影図

第33図　S257遺跡発掘区出土石器実測図

第34図　S253遺跡発掘区配置図および遺構関連図

第35図　S253遺跡第1号および第2号掘り込み図

第36図　S253遺跡におけるいわゆる風倒木痕

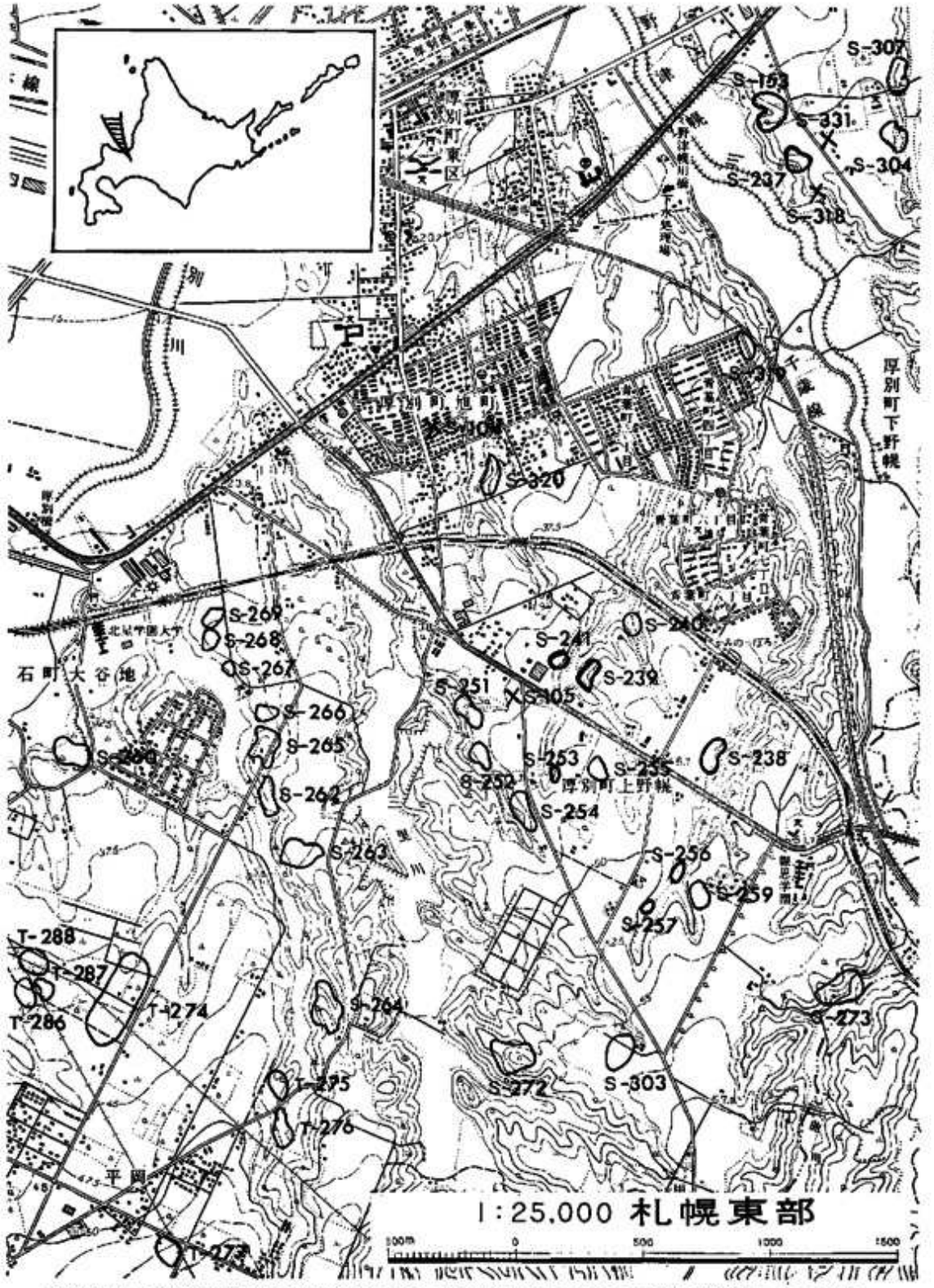
第37図　S253遺跡発掘区出土石器実測図

図 版 目 次

1A　S256遺跡遠景（南東より）
B　S256遺跡発掘区遠景（南西より）
2A　S256遺跡E-5区南東壁セクション
B　遺構近景（北西より）
3A　第1号竪穴住居址（南より）
B　第1号竪穴住居址（東より）
4A　第1号竪穴住居址炉址（北より）
B　第1号竪穴住居址出土土器
5A　第1号竪穴住居址出土石器
B　第1号竪穴住居址状遺構（F1面）(1)（北西より）
6A　第1号竪穴住居址状遺構（F1面）(2)（北西より）
B　第1号竪穴住居址状遺構炭層・土器出土状態（F1面）（北東より）
7A　第1号竪穴住居址状遺構（F2面）（南東より）
B　第1号竪穴住居址状遺構（F2面）土器出土状態（南西より）
8A　第1号（1，2），第2号（3～7）竪穴住居址状遺構出土土器
9A　第1号竪穴住居址状遺構出土土器
B　第2号竪穴住居址状遺構（南西より）
10A　第2号竪穴住居址状遺構遺物出土状態（南西より）
B　第2号竪穴住居址状遺構出土土器（1）
11A　第2号竪穴住居址状遺構出土土器（2）
B　第2号竪穴住居址状遺構出土石器（1）
12A　第2号竪穴住居址状遺構出土石器（2）
B　S256遺跡発掘区出土土器（1）
13A　S256遺跡発掘区出土土器（2）
B　S256遺跡発掘区出土土器（3）
14A　S256遺跡発掘区出土土器（4）
B　S256遺跡発掘区出土土器（5）
15A　S256遺跡発掘区出土土器（6）
B　S256遺跡発掘区出土土器（7）
16A　S256遺跡発掘区出土土器（8）
B　S256遺跡発掘区出土石器（1）
17A　S256遺跡発掘区出土石器（2）
B　S256遺跡発掘区出土石器（3）
18A　S256遺跡遺構出土植物遺存体(1)
B　S256遺跡遺構出土植物遺存体(2)
19A　S257遺跡遠景（北より）
B　S257遺跡第1号ピット（北より）
20A　S257遺跡発掘区出土土器
B　S257遺跡（上段），S253遺跡（下段）発掘区出土石器
21A　S253遺跡遠景（北より）
B　S253遺跡発掘区遠景(1)（北東より）
22A　S253遺跡発掘区遠景(2)（北東より）
B　遺構近景（南西より）
23A　1号掘り込み（南西より）
B　いわゆる風倒木痕の断面（FT_1）（北西より）
24A　いわゆる風倒木痕上面観（FT_1）（東より）
B　いわゆる風倒木痕上面観（FT_2）（東より）
25　S253遺跡遺構上層出土品

表　目　次

第１表　第１号竪穴住居址小ピット一覧表
第２表　第10号竪穴住居址状遺構小ピット一覧表
第３表　第２号竪穴住居址状遺構小ピット一覧表
第４表　遺構出土石器一覧表
第５表　発掘区出土石器一覧表



この地図は，建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の2.5万分の1地形図を複製したものである。
（承認番号）昭50道複，第64号

I　はじめに

I はじめに

第1章 発掘までの経過

札幌市は，現在人口120万人を超え，北海道の行政・経済・文化の中心都市として著るしい膨張をみせている。しかし，人口が急増するにしたがい，商業，業務機能が都心に集中しすぎ，住宅地はより周辺部へと広く拡散してゆく傾向にある。この事態は，交通の混雑を招き，未成熟な住宅地域の広がりにより，生活のうえで大きな不便を強いられる結果をもたらしているにすぎない。

そこで，札幌市では，一つの核を中心に拡がりを見せている都市の構造を改め，多核心の都市形成に誘導をはかる政策の一環として，厚別地域と石狩湾新港の後背地に副都心的な機能をもった商業・業務地区を設ける計画を樹てた。

このうち，厚別副都心構想は，札幌市の東部地域と，これに隣接する江別市，広島町を背景にショッピングセンター，業務施設，公共公益施設などを副都市団地を中心に設け，今までの都心にはみられない新しい副都心地域センターを育成しようとする計画である。

しかしながら，このような大規模な地域開発は，必然的に自然の大きな改変を伴なうものである。特に，この地域一帯は，野幌丘陵の一端に位置し，多くの遺跡が存在することが古くから知られていた。そこで教育委員会としては，これらの多くの遺跡がいたづらに破壊されることのないように，各種開発行為に際しては，十分なる事前協議を実施するよう広く関係方面に協力方を要請した。幸いにしてこの協力要請に対して，副都心計画に参画している多くの関係機関の理解を得ることができ，昭和48年度3件，49年度4件の発掘調査を実施した。

本書に報告する遺跡は，同じく副都心計画に参画している丸紅株式会社所有地内に存在するものであり，同社も早くから教育委員会の協力要請に基づいて，積極的な協力を申し出られていた。同社の実際の開発計画着手の時期は，昭和50年後半，あるいは51年度になるとのことであったが，現在教育委員会の係が発掘調査あるいは保護行政に忙殺されている事情を推察され，教育委員会の最も都合のよい時期に事前調査を実施するよう依頼を受けた。これに対して，教育委員会と同社の間で数回に及ぶ会合を重ねた結果，遺跡を現状保存することは，一人丸紅株式会社にかかる開発区域内の計画変更に止まらず，大きく副都心計画そのものの幹線道路，街路などの変更にかかる問題であり，その及ぼす影響の大きいところから事前調査を実施することとなった。調査にあたっては，前述の如く好意ある申し出のもとに，我々は十分な計画，予算，日程などを盛り込むことができ，一般に言われる行政調査の枠を超えた調査を実施することができた。本調査に遺漏があるとすれば，それはすべて調査に携わった者一同の力不足にあると言えよう。

（加藤　邦雄）

第2章　遺跡の位置と環境（第1図）

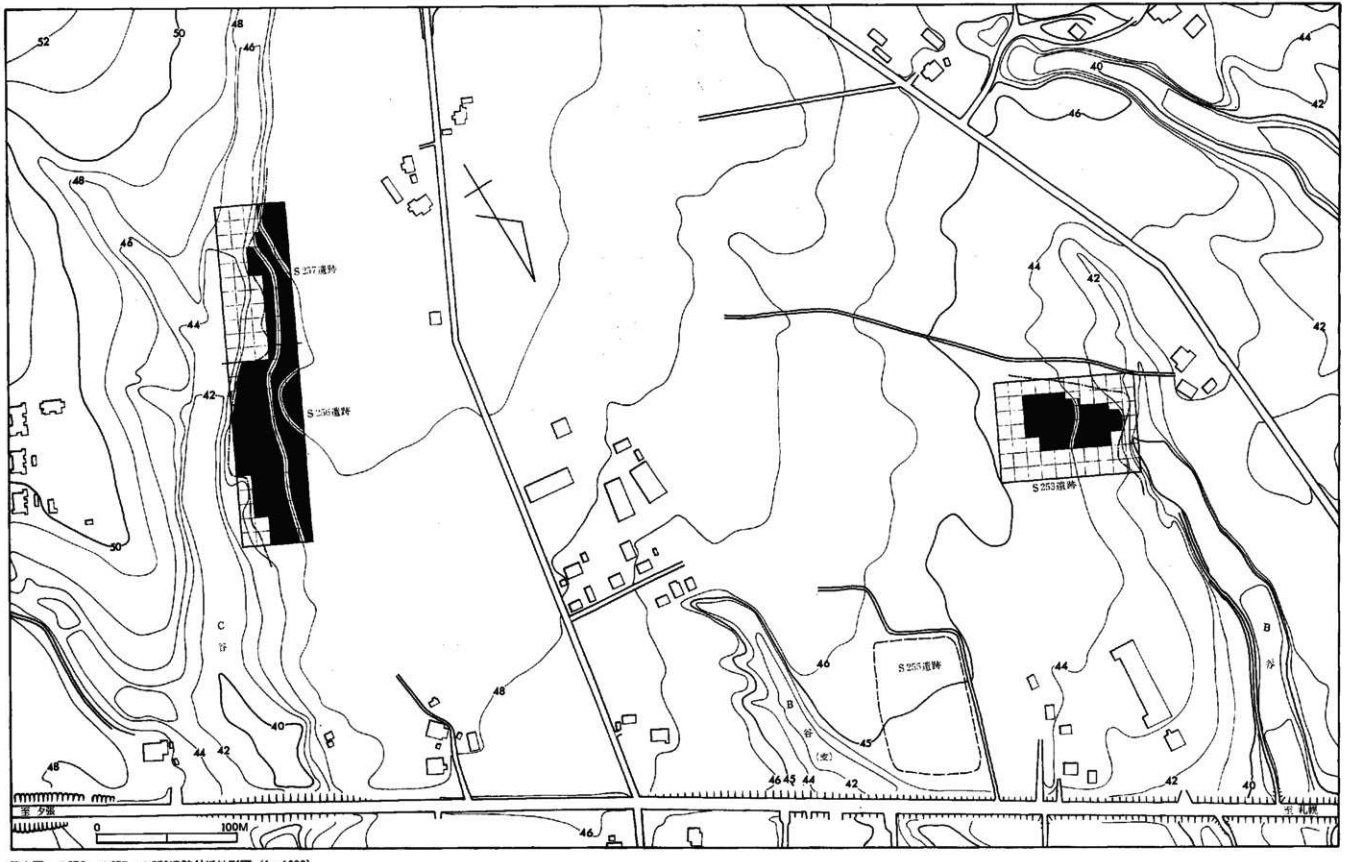
S256，S257，S253遺跡は，札幌市白石区厚別町上野幌に所在し，国道274号線（札夕線）の南西側300m程の所にある。本遺跡をのせる台地は，いわゆる「野幌丘陵」といわれるものに相当する。この野幌丘陵は，札幌市の東方に位置し，南端の広島町竹山付近から北へ延び，半島状に平野部へ突出している丘陵地である。高度も南で高く（約100m），北へ向って漸減し，江別市街地の背後では約60mとなっている。ほぼ南北に走る稜線上の平坦面を境に，地形は東西にゆるく傾斜し，多くの小河谷が形成されている。そして，この野幌丘陵は，地質学的にも，文化史的にも重要な地帯である「札幌—苫小牧低地帯」のほぼ中央の西縁部にあたり，東は夕張山系の前縁部を形成する馬追丘陵，北は樺戸山系南縁の石狩段丘地帯と相対しているのである（北川・中村・矢野ほか1974）。

上野幌地帯は，この野幌丘陵の西側部分の中央にあたっており，野津幌川と厚別川によって大きく解析された台地上で，標高は40～60mである。里塚，厚別町旭町，同町東区などがのっている。

この低い台地は，更に厚別川の支流——三里川など2本の川で解析されており，この三里川と野津幌川に挟まれた丘陵には，北側から流入する3本の大きな谷がある。西側から，A谷，B谷，C谷とする。

S256，S257遺跡は，この内C谷の東側台地上にあり，標高は49～46mである（図版1A）。S253遺跡は，B谷の西側に当り，標高45～43mである（図版21A）。共に谷が終焉する近くである。この3つの谷には，これ以外にもそれぞれ多くの遺跡がある。A谷にはS320遺跡が東側丘陵に，S104遺跡が西側丘陵にあり，B谷にはS255，S239，S240の諸遺跡が西側丘陵上に，S241遺跡が東側丘陵にある。C谷には，S238遺跡が東側に，S259遺跡が西側丘陵上にある。時期は，おおむね縄文中期後半期および晩期頃が多く，いずれも遺物の出土量が僅少な小遺跡ばかりである。

（上野　秀一）



第1図　S256, S257, S253遺跡付近地形図（1：1000）

第3章　発掘調査の方法と層準

第1節　発掘調査の方法（第4,5,30,34図，図版1B，19A，21B，22A）

今回の調査は，札幌市東部地区開発の一環である丸紅株式会社の宅地造成工事にともなう事前調査で，分布調査および予備調査の結果，遺跡が開発区域内には，4カ所認められた。S256，S257，S253，S259の諸遺跡である。この内，S259遺跡は，開発予定が大幅に遅れるとのことで，今回の調査では除外した。

調査対象面積は，S256遺跡が6,070m²，S257遺跡は2,460m²，S253遺跡は2,410m²であった。

発掘区は，3遺跡共N56°50′Wに基線をおいてグリッドを組んでいる。S256，S257の両遺跡は，10×10mのグリッドを組み，北と東に2mのブリッヂを残し発掘を進めた。S253遺跡は，基本大グリッドを10×10mにして，これを更に2×2mの小グリッドに分割した。グリッドの呼び方は，各々第4，29，33図に示した通りである。なお，S256，S257遺跡は，一連の遺跡の可能性もあったため，グリッドを連続して発掘している。

発掘総面積は，S256遺跡が約5,800m²，S257遺跡が約2,400m²で，略々全面発掘している。S253遺跡は，約1,060m²を調査した。

第2節　層　　準（第2,3図，図版2A）

上記3遺跡は，かつて畑地であったため，谷におち込む部分を除いては，包含層は，耕作による攪乱が地山まで入っている。

S256遺跡では，E列東壁を48m (point A-F line)，5列北壁を8m (point D-H line) にわたってセクションをとっているので，以下に説明する（第3，4図，図版2A）。

第Ⅰ層：耕作土

第Ⅱ層：黒色土

第Ⅲ層：焼土層

第Ⅳ層：漸移層（黄褐色火山灰質土層）

第Ⅴ層：地山の月寒火山灰層〔Tk〕

このセクションでは，台地が谷におち込む所で，厚く黒色土層が堆積している。この黒色土の中に所々焼土をかんでいる。縄文早期末の遺物は，この内第Ⅱ層の黒色土層の下部ないしは第Ⅳ層の漸移層中から検出されている。

第Ⅲ層の焼土は，S253遺跡でみとめられたものと同じもので，その成因および時代は明確にはできなかった。

S 257遺跡は，－6列北東壁 (point A-E line) を28mにわたってセクションをとっている（第2，30図）。

第Ⅰ層：耕作土

第Ⅱ層：茶褐色土層

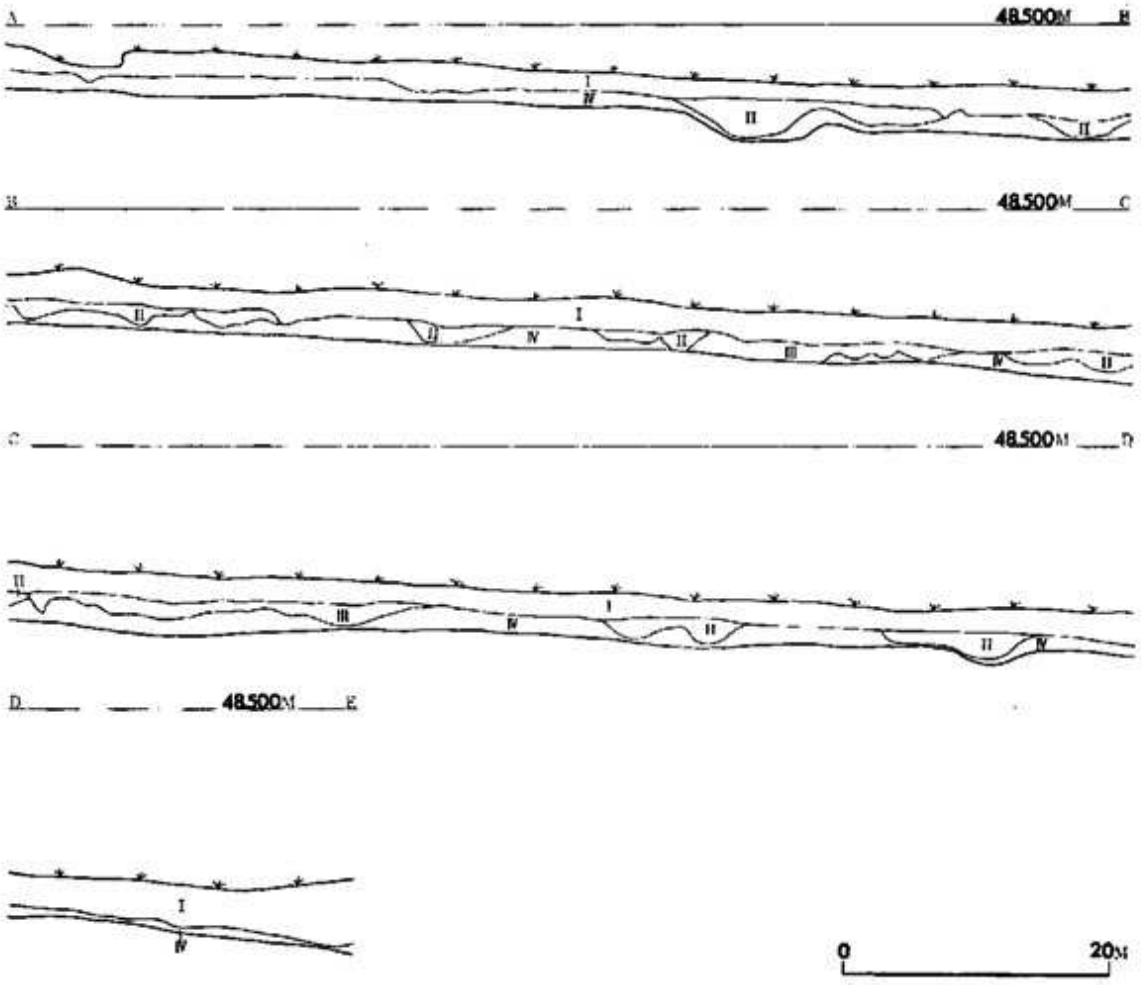
第Ⅲ層：黒色土混入の茶褐色土

第Ⅳ層：漸移層（黄褐色火山灰質土層）

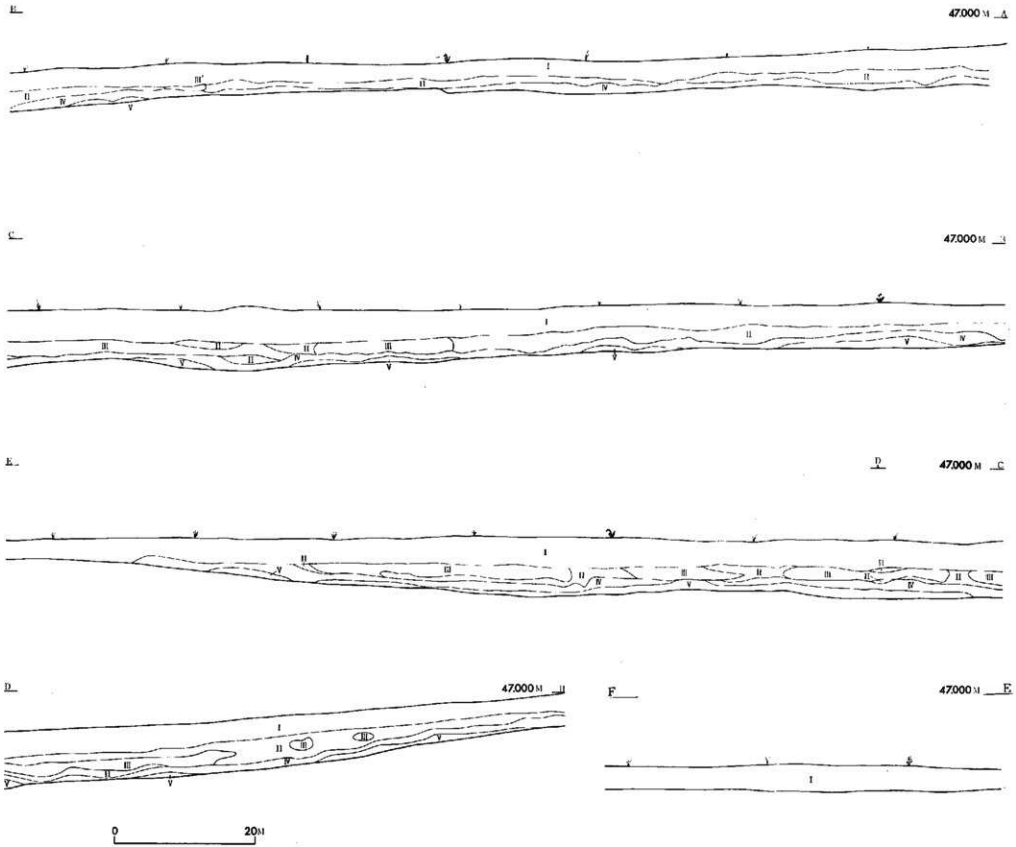
第Ⅴ層：地山の月寒火山灰層

ここでは，S 256遺跡でみとめられたような黒色土および焼土はなかった。遺物は，第Ⅰ層，耕作土中から検出されたのみである。

S 253遺跡では，耕作がほとんど地山まで及んでおり，Ⅰ-8区西端のグリッドにおいてのみ黒褐色の粘質に富む土層が，谷にむかって次第に厚く堆積してゆく状態が認められた。また，C-7区あたりには焼土をのせる黒色の粘質に富む土層のひろがりが存在した。この層は，谷のはじまりに近いC-8区あたりで，さまざまに錯綜する不整に幅の変化する溝状の窪みに流れ込み，堆積したもの



第2図　S257遺跡セクション図 (point A-E line)



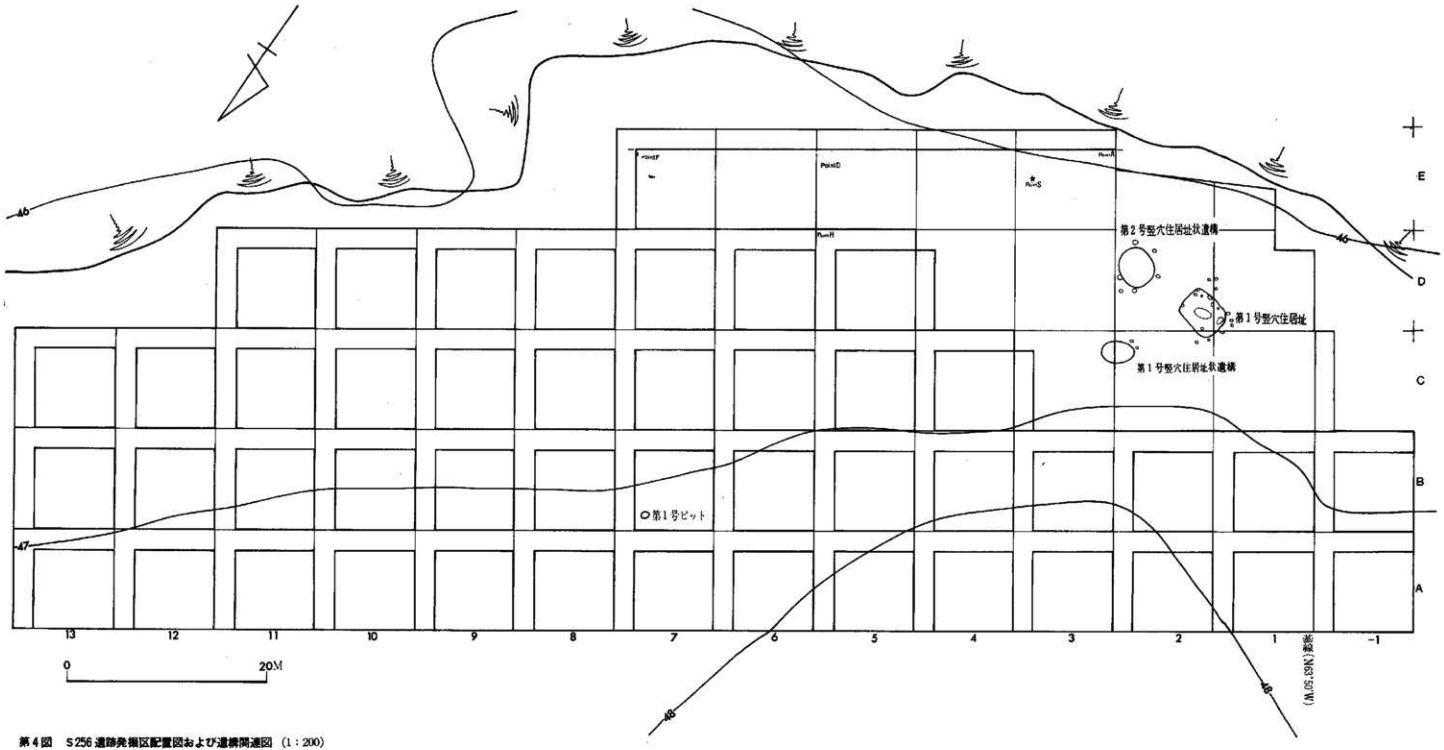
第3図　S256遺跡セクション図（point A-F Line および Point D-H Line）

と思われるが，遺憾ながらその実態を明確に理解することはできなかった。遺物が検出されたのは，耕作土中である。

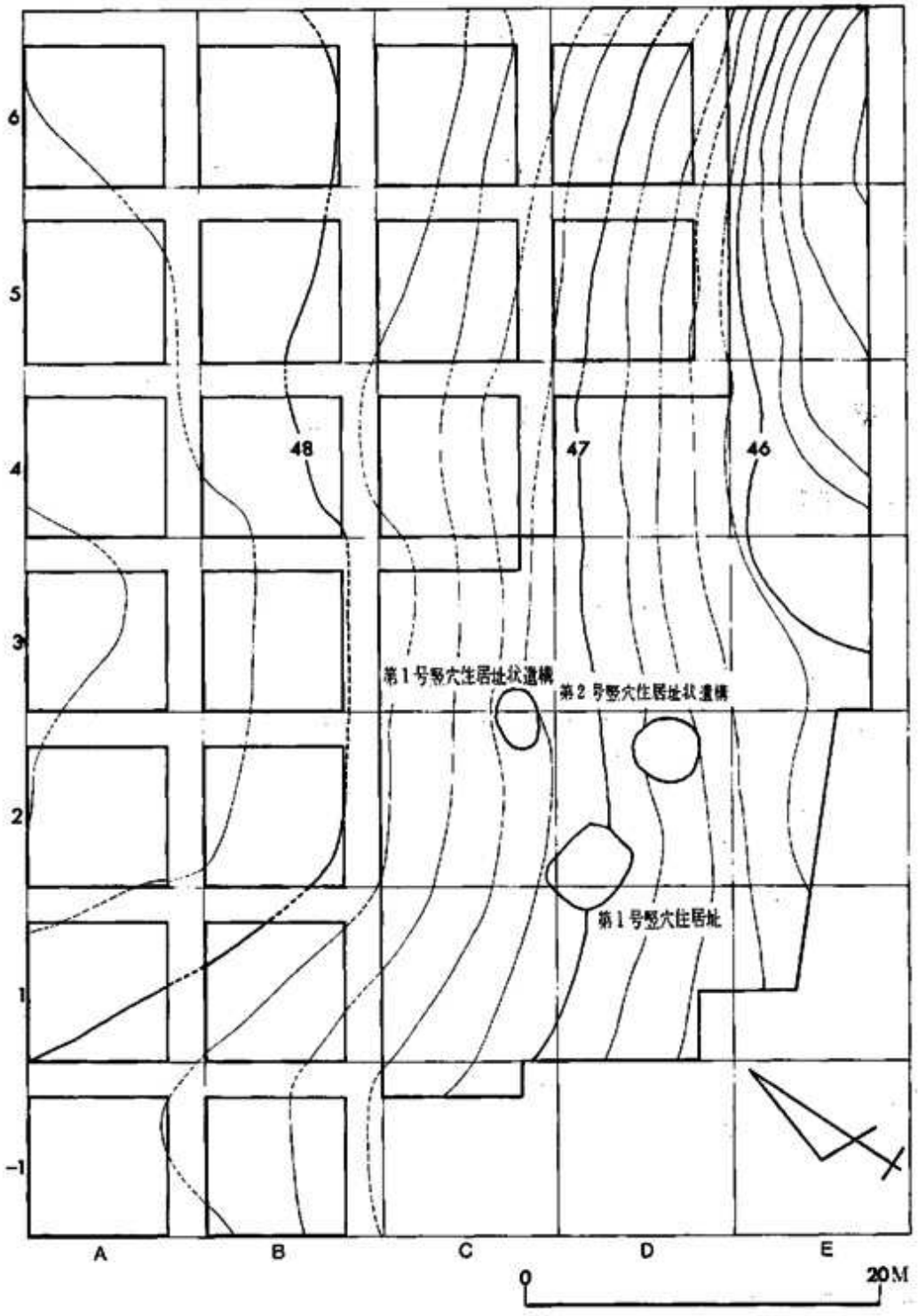
本遺跡付近の地山である月寒火山灰層〔Tk〕は，火山灰起源で，空中から飛来して堆積したものである。堆積時期は，低位段丘面が段化する途中で，冲積面形成以前である。この層の下に，厚別砂礫層，豊平浮石層，野幌層があり，これらを不整合におおっている。この層は，現地形面に平行に堆積し，層厚は２ｍをこえることはないといわれる（小山内・杉本・北川1956）。

（上野　秀一）

I　S256 遺跡



第4図　S256遺跡発掘区配置図および遺構関連図（1：200）



第5図　S256遺跡微地形図（ローム面）（1：200）

Ⅰ S256 遺 跡

第1章 遺構および出土遺物

本遺跡からは，C～D—1～3区にかけて1軒の竪穴住居址と2軒の竪穴住居址状遺構がみつかっており，またB—7区より1個のピットが検出されている（第4，5図，図版2B）。

第1節 竪穴住居址および竪穴住居址状遺構

第1号竪穴住居址（第6～9図，図版3，4，5A）

C，D—1，2区にかけてある緩傾斜面に立地し，地山面での標高は47.20～46.80mである。

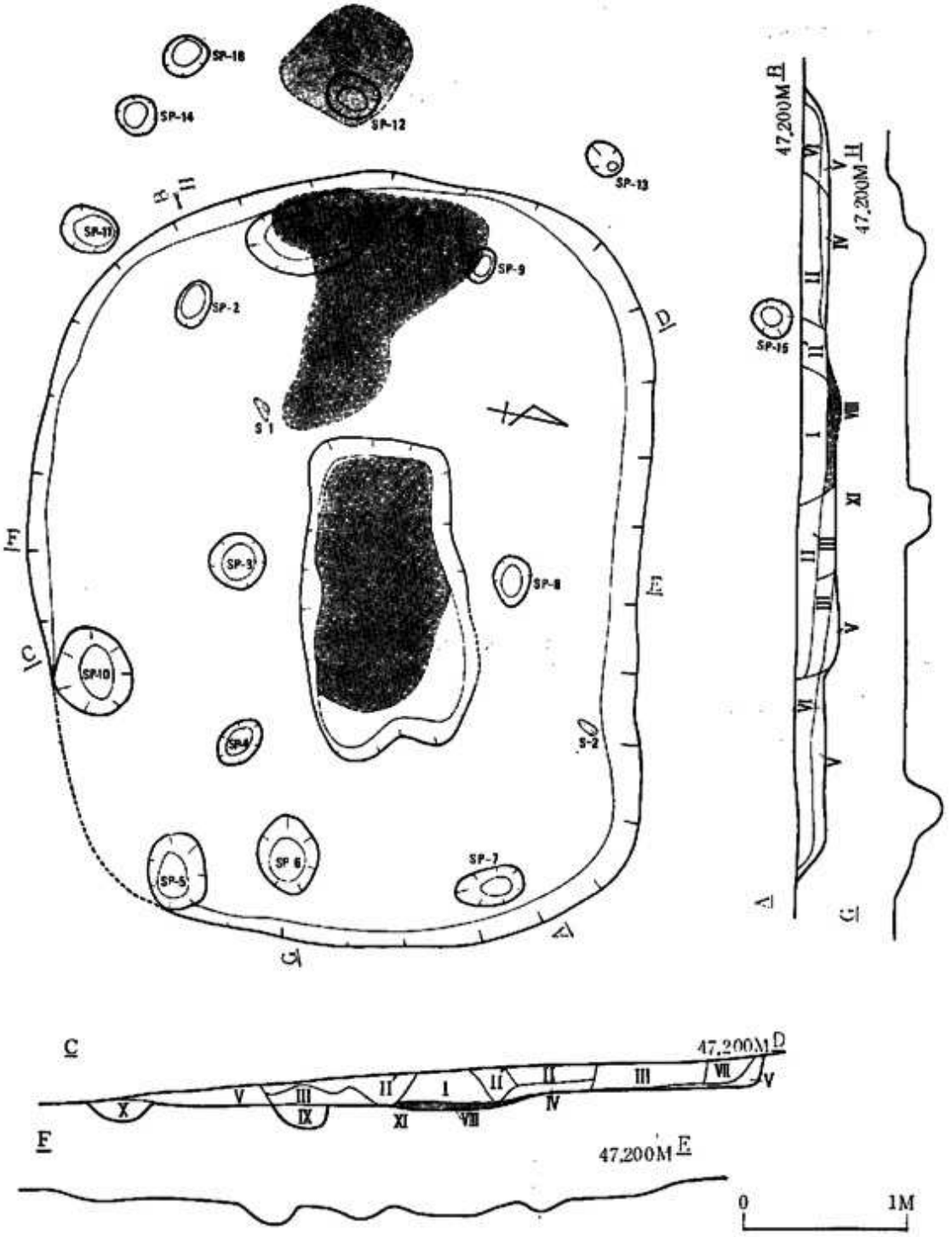
大きさは，長軸4.73m，短軸3.73mの隅丸長方形を呈する。長軸は，略々東－西方向であるがE14°N程ずれている。

立ち上りは，立地している場所が緩傾斜面であったため，斜面下方に当る南東部は，立上りは明確ではなく，また南壁中央部1.5m程は壁はやわらかい。それ以外は，略々45°の角度で立上っている。壁高は，高い所で18cm程である。

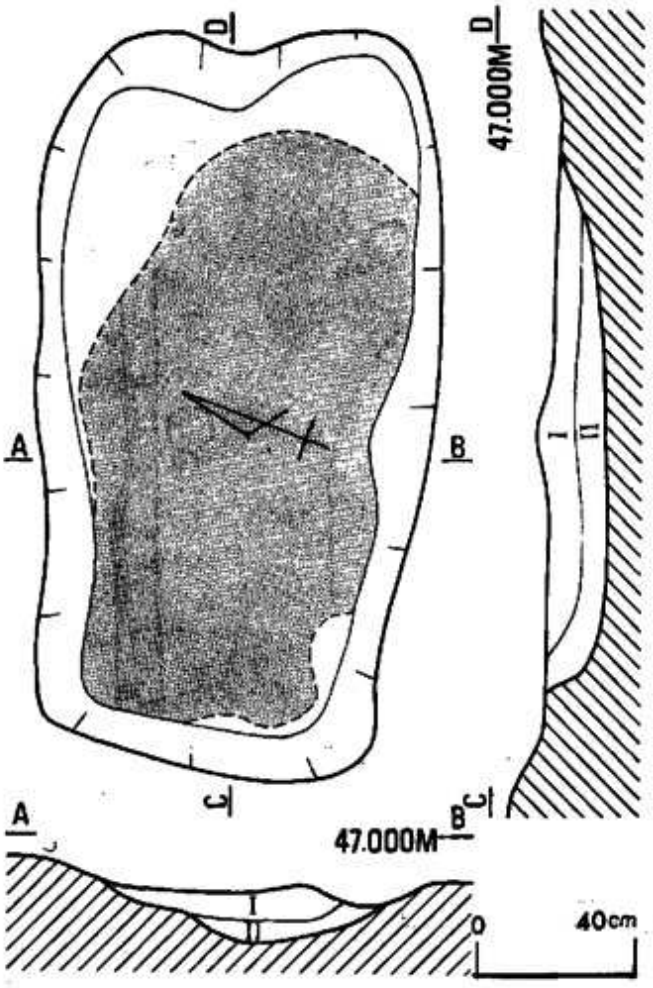
中央部には，住居址の長軸に沿って198×106cmの不整長方形の炉址がある。5cm程掘りくぼめてあるが，石組みは認められなかった。この中を，更に第6，7図で網をかぶせた部分を7cm程掘り下げている。上の掘り込みには，第6図のセクションで示したように，第Ⅷ層焼土，第Ⅲ'層焼土混黒褐色土および第Ⅴ層灰褐色土で充塡されている。下の掘り込みには，第7図のセクションで示したが，第Ⅰ層暗赤褐色焼土，第Ⅱ層赤褐色焼土で，第Ⅱ層には黒曜石の細片を含んでいた。また，両層にわたって，微細な木炭とオニグルミが検出されている。なお，炉址周辺の地山も少し焼けていた（図版4A）。

柱穴状の小ピットは，住居址内に10個，住居址の外縁部に6個検出された。内訳は，第1表に示した。小ピット内の覆土の土壌内容物の検討から，SP—1，6，10が，黒色土が充塡されており同時期，同性格の小ピットであることが判る。次に，黒褐色土のつまったSP—3，4，5，8，暗茶褐色土のつまったSP—2，7，9を，各々グループ分けできる。さらに，茶褐色土のつまったSP—11，12，13および茶色土のつまったSP—14，15，16の各々にグルーピングできる。この内，黒色土，黒褐色土，暗茶褐色土のつまったグループは，住居址内の小ピットであり，茶褐色土，茶色土のつまったグループは，住居址外縁にある小ピットである。

SP—1とSP—6は，住居址の長軸方向の両端にあり，SP—10は，住居址南東壁に接してある。規模は共に大きく，特にSP—1とSP—6は，皿状を呈するピットで，柱穴とは性格の異なるピ



第6図　S256遺跡第1号竪穴住居址実測図（炉址部分以外で，網をかぶせた部分は，床面ないし地山面が焼けていた範囲を示している）



第7図　第1号竪穴住居址炉址実測図

ットと思われ，貯蔵穴の可能性がある。

SP—1～5およびSP—7～9は，住居址長軸に沿って，炉址の両側に，ほぼ一列に並んでいる。とりわけ，SP—2と9，SP—3と8，SP—5と7は対応する。恐らく，この7本は柱穴であったろうと思われる。

住居址外にあるグループの内，茶褐色土のつまったグループは，長軸の一端——西南西壁に接して，中央とその両端にある。この内SP—12は，小ピット内外が焼けていた。従って，この住居址と関係あるピットの可能性が高い。一方，茶色土のつまったグループは，配列が不規則で，壁ないし底が軟弱であったり，皿状を呈する例もあり，本来この住居址に伴うものとは思われない。なお，SP—13は，南側に少し傾いて穿たれていた。

SP—2～5，7～9およびSP—11～13は柱穴と思われるが，内容物が著しく違うため同時期性に問題は残るかもしれない。

大きさは，21×7～44×31cmの範囲であり，深さは，平均16～12cmである。SP—7は，7cmで浅いが，これは，北側が木の根による攪乱が入っているためであろうか。形は，楕円形を呈する例が多い。

なお，SP—5とSP—7の小ピット内覆土中に炭化物とオニグルミの破片が含まれており，SP—5とSP—6には，黒曜石の剥片および剝片を含んでいた。さらに，SP—13では，若干の炭化物を検出できた。

床面は，地形に沿って心持ち傾斜しているが，その面はほぼ平坦である。ただ，炉址の西側部分の床面は，不定形に焼けており，またさらに，西側SP—12の回りも地山は焼けている。このことは，炉址においても，西側に片寄って利用されていた事実と相まって，炉から，灰・木炭などを西側の方にはき出した際，焼けたものとも考えられる。従って，本住居址の入口も西南西の方向にあった可能性が高いように思われる。

本住居址覆土の堆積状態は，分層が難しく不明瞭な点が多いが，説明すれば以下の如くである。

第Ⅰ層：暗黒褐色土層（Ⅰ）
第Ⅱ層：黒褐色土層
第Ⅱ′層：茶褐色土層（Ⅱ層より明るい）
第Ⅲ層：暗黒褐色土層（Ⅲ）（粒状に固い土粒を含み，Ⅰ層より全体に暗い）
第Ⅲ′層：黒褐色土層（焼土を含む）
第Ⅳ層：暗灰褐色土層（大粒の粘土粒を含む）
第Ⅴ層：灰褐色土層
第Ⅵ層：黒褐色土層（Ⅱ層より全体に明るい）
第Ⅶ層：暗茶褐色土層
第Ⅷ層：焼土層
第Ⅸ層：黒褐色土層（SP—3の内容物）
第Ⅹ層：黒色土層（SP—10の内容物）
第Ⅺ層：地山（褐色粘土層）

これらの層の堆積状態は，通有の住居址覆土の堆積に比べて著しく異質であるが，大略第Ⅰ，Ⅱ，Ⅱ′，Ⅲ，Ⅲ′，Ⅵ層の黒色腐植土層と第Ⅳ，Ⅴ，Ⅶ層の地山の土を多く含む層とに大別出来るであろう。炉址内上面には，前述した通り焼土（第Ⅷ層）と焼土混りの黒褐色土（第Ⅲ′層）および炉址東側の焼けていない部分は，灰褐色土（第Ⅴ層）が堆積している。なお，A—Bセクションの炉址部分の下場で破線で示した例は，焼土層がまだつづいていることを示している。（上野　秀一）

第1表　第1号竪穴住居址小ピット一覧表

SP番号		平面形	規模	深さ	内容物	備考
			cm	cm		
1	住居址内	楕円形	80×49	20	黒色土	焼けている
2		楕円形	31×20	16	暗茶褐色土	西側一部攪乱
3		円形	35×32.5	16	黒褐色土	
4		不整円形	28×23	12.5	黒褐色土	西側攪乱
5		楕円形	44×31	13	黒褐色土	
6		楕円形	45×39	20	黒色土	
7		楕円形	40×30	16.5	暗茶褐色土	
8		楕円形	27×22	8.5	黒褐色土	
9		楕円形	21×17	7	暗茶褐色土	北側攪乱
10		不整四角形	53×43	11	黒色土	浅い皿状ピット
11	住居址外	不整円形	35×31	11	茶褐色土	
12		楕円形	30×28	14	茶褐色土	底皿状，焼けている
13		楕円形	23×21	28	茶褐色土	先細り，北側攪乱
14		不整円形	25×23	10.5	茶色土	底軟弱
15		不整円形	27×25	13.5	茶色土	底皿状
16		不整四角形	28×23	13.5	茶色土	

遺　　物

土　　器（第8図，図版4B）

1～3，6，8，9は，絡縄体圧痕文[1]が地文として，口縁部と平行および口縁に直交するように数十段つけられる。口縁には，口縁と平行な一本の細い粘土紐を貼り付け，口唇からこの貼付紐上にかけて絡縄体を90°～180°回転させて施文したと思われる短縄文[2]がみられる。また口縁部より胴部にかけては，細い粘土紐の貼付がなされ，これによってはしご段のような方形を基礎とした文様が構成される。胴部下半に至っては，絡縄体圧痕文の地文から，絡縄体を回転させて施文したと考えられる撚糸文[3]へと変化していく。

4は，絡縄体圧痕文が，縦に数段，横に数段施文されるものである。11は，絡縄体圧痕文[4]が横位に4段みられる。

7，12は，粘土紐の貼付が横位につけられその上にへらなどによるきざみがつけられる。地文として，単節斜行縄文がつけられる。

10は，2種類の撚りの方向がちがう原体を使用して羽状縄文を施文している。13は斜行縄文，14は結節のある羽状縄文である。

器形は，1は小形の深鉢形であるが，他は小破片のため不明である。器厚は，13が1.0cm他は0.5～0.8cmの間にある。胎土は，1は砂粒を含み焼成は不良であるが，他例（2～14）は，良好である。色調は茶褐色が主体をなし，炭化物が付着して黒色を部分的に呈する破片もみられる。

（註）

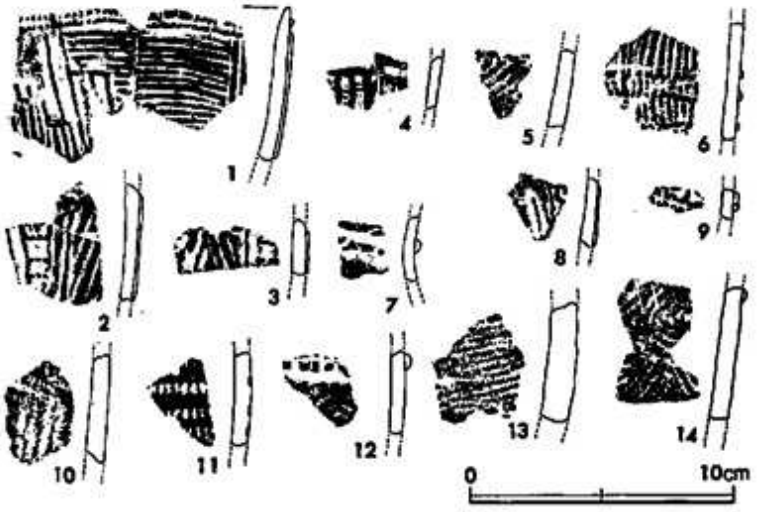
1　絡縄体の原体は，lに撚った撚糸を右巻に軸に巻きつけたもので軸の断面は三角形ないしは方形をなしている。

2　0段rを2本L方向に1段撚り，さらにR方向に2段撚ったLRの縄文原体が使用される。記号にて表わすと

$$\left.\begin{matrix}r\\r\\r\\r\end{matrix}\right\rangle \begin{matrix}L\\L\end{matrix}\Big\rangle R$$ となる。

この原体を棒状の軸に右まきしたものが絡縄体となる。これをさらに，口縁と平行に押しあて下方へ90°～180°回転させるとこの文様が数mm間隔につけられる。

3　註2で説明したものと同一の絡縄体を使用し，器面に回転させ



第8図　S256遺跡第1号竪穴住居址出土土器拓影図

て施文する。

4　註1と同一方向，同種の原体を使用している。

5　0段 l を2本R方向に1段撚り，さらにL方向に2段撚ったRLの縄文原体が使用されている。

記号にて表わすと

$$\left.\begin{matrix} l \\ l \\ l \\ l \end{matrix}\right\rangle \begin{matrix} \mathrm{R} \\ \mathrm{R} \end{matrix} \Big\rangle \mathrm{L}$$

となる。これを棒状工具に右巻きしたものが原体である。

（羽賀　憲二）

石　器（第9図，図版5A）

石器の出土は，少なかったが，黒曜石，硬質頁岩の剥片・削片類が他の遺構に比べ多く出土している。この内，第9図1，2は住居址床面から出土したものであり，3，4は炉址内覆土から出土したものである。あとは，住居址内覆土であるが，比較的床面に近い所で多く検出できた。

擦　石（1，2）

1は，断面三角形を呈し，その長軸の一つの稜を擦り面として作業行為を行なった石器である。擦り面の幅は22～17mmで，長さは約122mmである。擦痕の方向は，石質が粗なため明確ではないが，斜め方向のものが若干確認される（第6図S—1）。

2は，断面四角形の石器で，4面にわたって擦り痕が観察される。図示した上面左側面が最もよく擦痕が判り，あとの2面は擦痕は不明瞭である（第6図S—2）。

削　器（3）

硬質頁岩の縦長剥片を素材にして，その全側縁に比較的背の高く短かい二次加工を加え，尖頭部を作出している。小形品である。

両面体石器の破片（4，7～9）

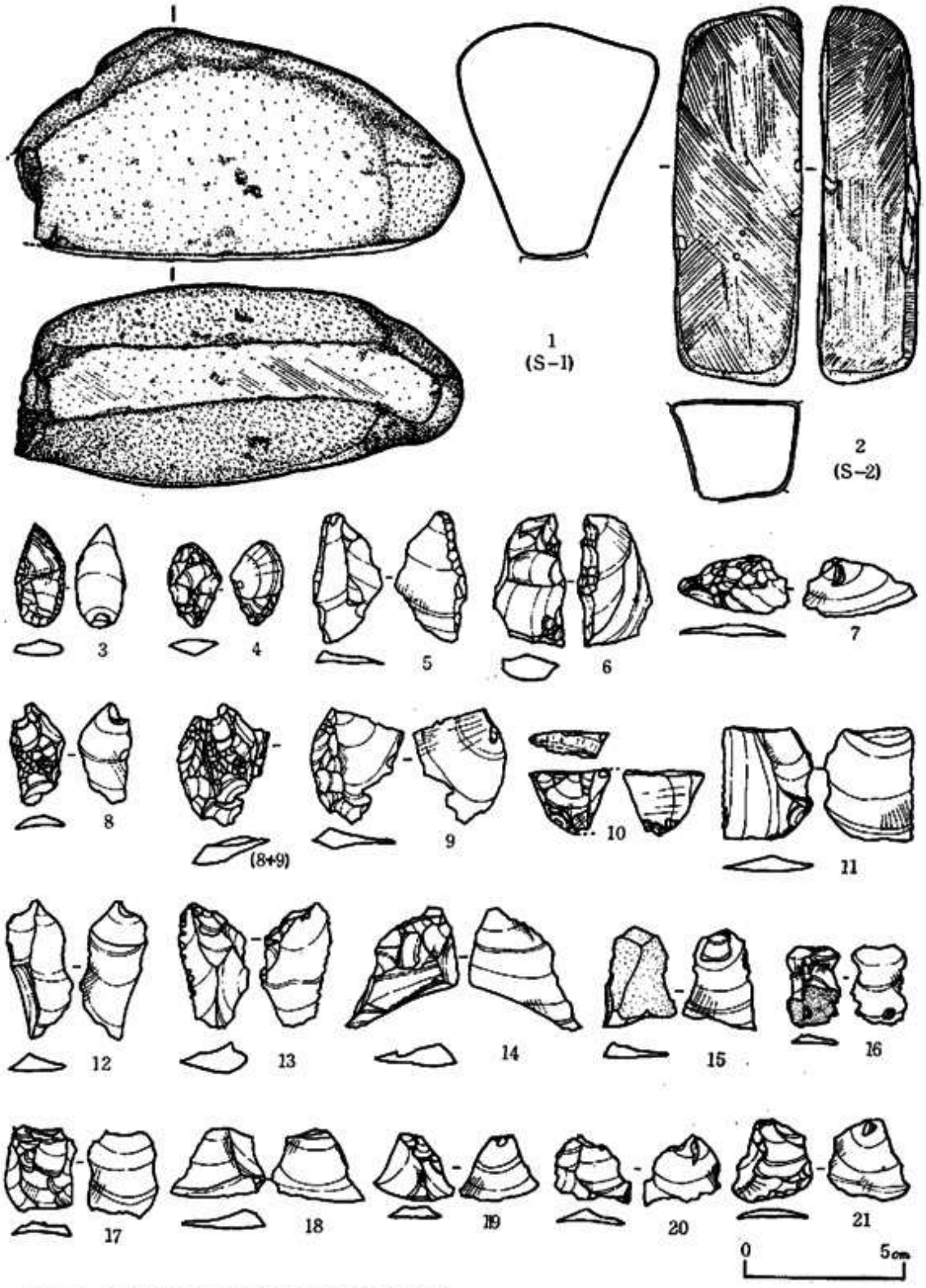
4は，比較的大形の両面体石器の基部を横からの一撃で剥がした剥片である。7も，a面に元の両面体石器の細かな剥離が残っており，少し焼けている。8と9も，7と同様の例である。8と9は接合した。7～9は，剥片の大きさおよびカーブからいっても，かなり大形の両面体石器であったと思われる。ただ，かなり細かな剥離痕が観察されることから，単に両面体石器を作成する際に生産されたと考えることには若干疑問もある。特に，8はa面の左側縁に細かな剥離が加えられており，石器の素材として生産された可能性も考えられる。

その他の削器（5，6）

5は，やや形の不定な縦長剥片のb面右側縁に一列二次加工を加えた例である。a面左中央側縁にも少し細かい剥離がある。6は，扁平石核から生産された，やや部厚い縦長剥片のb面左側縁に一列二次加工がある例である。a面に残された剥離痕からは，小形の縦長ないし矩形剥片を生産していたように思われる。

扁平石核？（10）

10は，性格のつかみかねる石器であるが，上面に横からの剥離によって得られた平坦面を有し，a面全面とb面下部に剥離を入れた例である。a面右は欠損しているものと思われる。また，a面



第9図　S256遺跡第1号竪穴住居址出土石器実測図

左には細長い剝片（ないし削片）を1本とった跡がある。明確ではないが，打面と思われる面を有することから石核の可能性が考えられる。ただどのような剝片を生産したかは不明である。a面中央に認められる矩形剝片なのか，狭長の縦長剝片を生産したのかは断定しかねる。彫刻刀的石器（graving tool）の可能性も考えられる。

剝片類（11～21）

本住居址で検出された剝片類は，大きく2つに分けることができる。1つは，石器の素材となる縦長の剝片であり，もう1つは石器製作の際生産される扇状の剝片――いわゆる「削片(chip)」である。

11～17に示した例は，縦長剝片の例に入るものである。ただし，14は剝片としては大形であるが，a面の剝離が色々な角度で入っており，形も不定で，石器製作に際して生産された可能性もある。また17は，矩形剝片に近い。

図示しなかった中に，黒曜石製の小さな扇状剝片（ないし削片）は11点（内2点焼けている），硬質頁岩製の小さな扇状剝片が13点，住居址内覆土から出土している。また，炉址内覆土から，黒曜石の小さな削片ないし両面体石器から生産された剝片が6点採集しているが，内5点は程度の差はあるが焼けていた。また，SP—6の覆土中より1点の縦長剝片が出土している。

以上，本住居址の石器・剝片の様相は，定形的な石器が少なく，わずか3点であり，その内2点は河原石を利用した擦石類であること，それに比べ，剝片を素材にした石器は1点のみで少ない。しかし，両面体石器から明らかに生産された剝片が4点あることからも，石鏃・石槍といった両面体石器が全く無かったとは考えられず，住居廃棄の際持去られた可能性もある。

しかも，剝片類（縦長および扇状剝片）の出土は，他の2つの遺構に比べて多く，本住居址内で石器製作が行なわれたことも考えられる。（上野　秀一）

第1号竪穴住居址状遺構（第10～12図，図版5B～9A）

C—2，3区にかけてある。地山面での標高は，47.4～47.2mである。

本遺構においては，床面が2枚認められた。下の床面をF_1面，上の床面をF_2面として話をすすめる。

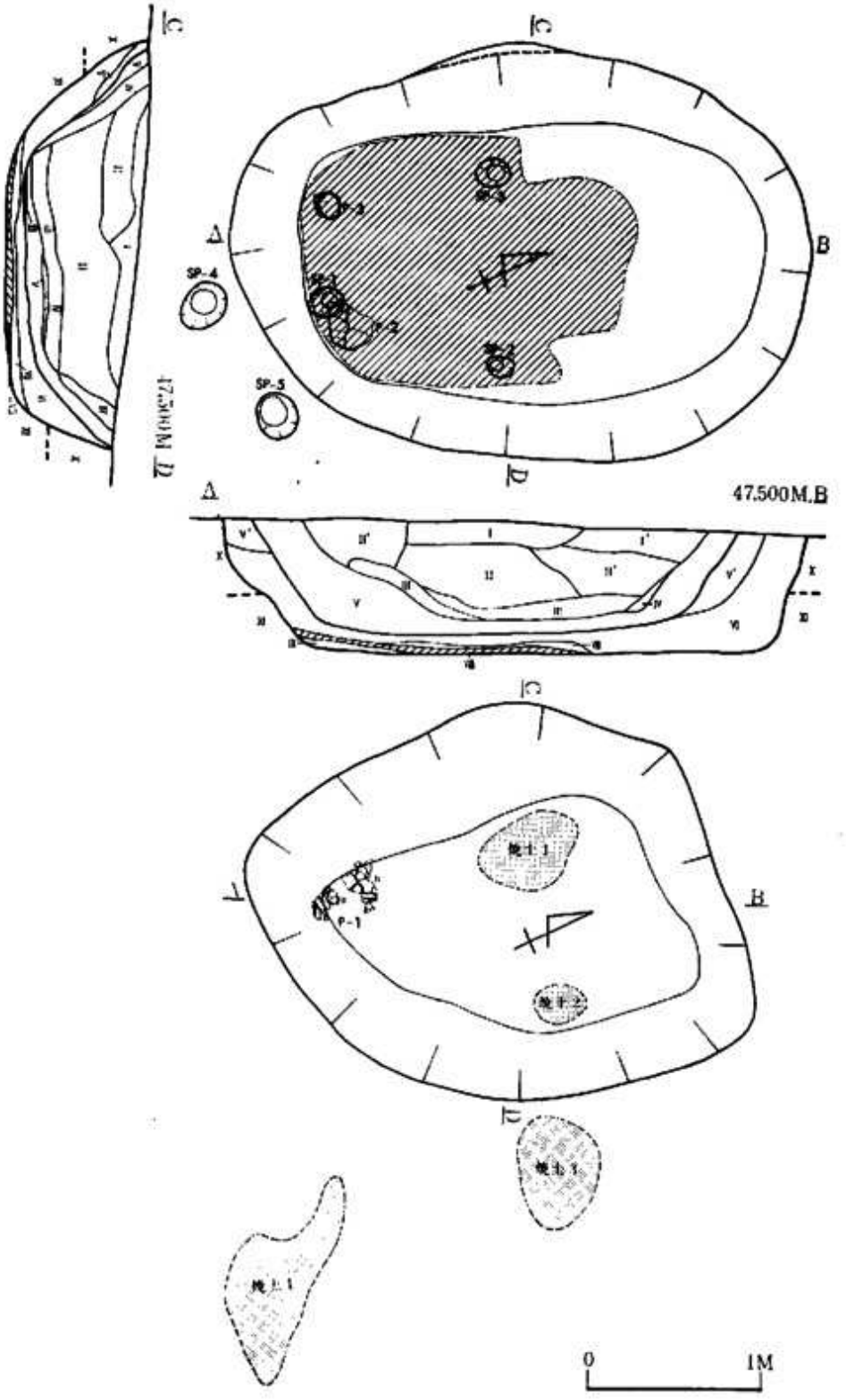
〈F_1面〉（図版5B，6A，6B）

大きさは，長軸3.35m，短軸2.36mの隅丸長方形（楕円形）を呈する。長軸は，北北東—南南西の方向である。

立ち上りは，かなり急傾斜で，深く約77cmを数える。北西側壁は，壁が崩れたと思われ少し拡がっている。壁は，四周共硬くしまっている。

炉址は認められなかったが，F_1の床面に接して南側半分に厚さ2～4cm程の炭層が分布している。この中からは，木炭のほか，オニグルミ・ドングリなどの植物遺存体も検出されている（図版6B）。

柱穴状の小ピットは，遺構内から3個，遺構外縁から2個みつかっている。遺構内にある3個は，共に7～4cmで浅く，規模は，21×18～16×3cmで，SP—1が長軸の一端に，2個が中央部壁寄りに1個づつある。小ピット覆土内容物は，褐色土と茶色土で若干異なるが，配列からいって同



第10図　S 256 遺跡 第 I 号竪穴住居址状遺構実測図　（▨ の部分は第Ⅷ層の分布範囲）

時期のものであろうと思われる。遺構外縁にある2個は，内容物の検討から，SP—5は遺構内にある例と同様であるが，配列からいっても本遺構に伴うものかどうかは判然としない。床面は，平らで硬く，南側の長軸の一端壁寄りには，P—2，P—3の半完形土器がみつかっている。

〈F_2面〉（図版7A，7B）

大きさは，長軸3.04m，短軸2.30mの不整五角形を呈する。しかし，平面プラン，立上りおよび床面は必ずしも明確ではない。立上りは，F_1面と同様に急傾斜で，深さは約65cmである。

前述した通り，床面・壁などは，明確にはつかまれなかったが，焼けた面が2カ所（焼土1・2）あった事実から一つの面の存在を推定しうる（図版7B）。なお，この面からP—1（a，b）の半完形土器がみつかっているが，各々F_1面のP—3，P—2と接合した。

炉址・柱穴などは検出されていない。なお，遺構の外にも焼土が2カ所認められている（焼土3・4）。遺構内にある焼土1・2と同時期のものであろうか。

本遺構の層堆積状態は，以下の如くである。

第Ⅰ層：黒色土層（Ⅰ）（Ⅱ層より，やわらかく，かたい土粒はない）

第Ⅰ'層：暗茶褐色土層（Ⅰ）（平均して，粘土粒子を含む）

第Ⅱ層：黒色土層（Ⅱ）（粒状のかたい土粒を含み，粘土粒も若干含む）

第Ⅱ'層：暗黒褐色土層（粘土粒をかなり含む）

第Ⅲ層：真黒色土層（粘土粒を全く含まず）

第Ⅲ'層：黒色土層（Ⅲ）（かたい土粒は含まないが，若干粘土粒を含み，Ⅱ層より暗い）

第Ⅳ層：暗灰褐色土層（かなり粘土粒を含んでいる）

第Ⅴ層：灰褐色（火山灰質）土層

第Ⅴ'層：灰褐色土層（硬くしまっている）

第Ⅵ層：淡灰褐色土層

第Ⅶ層：灰色火山灰質土層

第Ⅷ層：炭層

第Ⅸ層：炭化物混暗褐色（粘質）土層

以上であるが，地山は，第Ⅹ層：褐色粘土層，第Ⅺ層：淡灰色火山灰層に分けられた。なお，第Ⅻ層は，F_2面でみとめられた焼土層である。

結局，第Ⅴ層下面が，F_2面の底面に相当する。（上野　秀一）

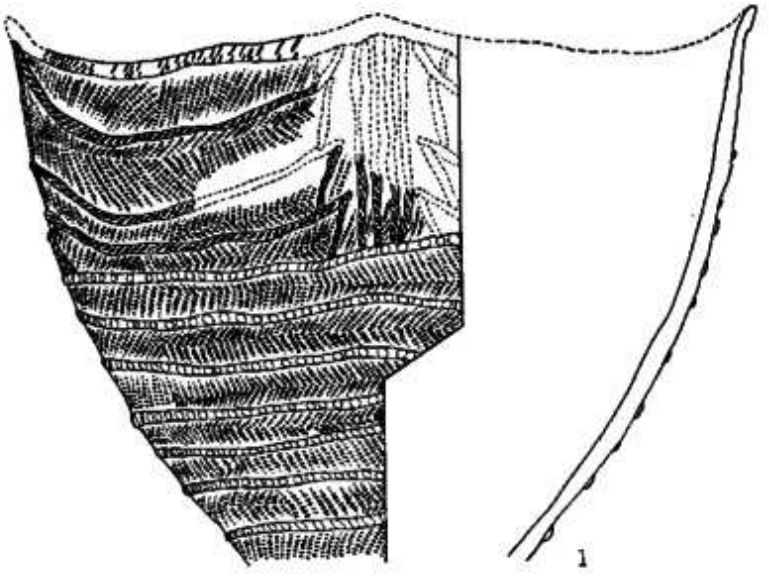
第2表　第1号竪穴住居址状遺構小ピット一覧表

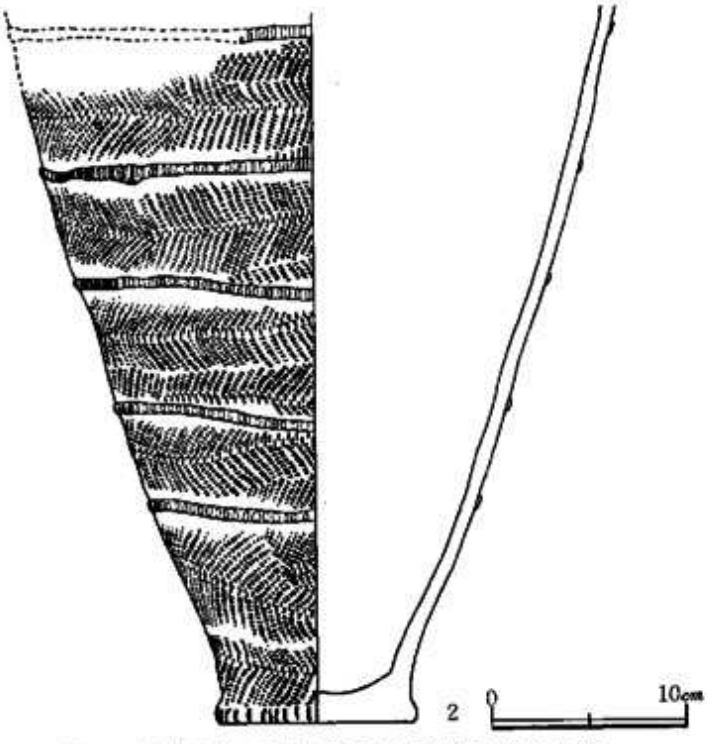
No.		平面形	規模	深さ	内容物	備考
1	遺構内	不整円形	21×18 cm	4 cm	褐色土層	ほぼ内容物同じ
2		不整円形	16×13	3.3	褐色土層	
3		不整円形	20×16	7	茶色土層	
4	遺構外	不整円形	30×25	11	暗茶褐色土層	
5		不整円形	28×25	29	褐色土層	

遺　　物

土　　器（第11，12図，図版8，9）

第11図1，2は半完形土器である。各々第10図に示した，P—1 bとP—2，P—1 aとP—3に相当する。





第11図　S256遺跡第1号竪穴住居址状遺構出土土器実測図

1は，口径38.5cm，現存部高さ28cmを数える。口縁はゆるやかな波状をなし，4つの突起がある。器形は胴部でかなりの張らみをみせ底部近くに至って急にすぼまる大形の深鉢形土器である。

口縁は，折り返しにより若干肥厚しており，その上面に絡縄体を90°～180°回転させた短縄文[6]がつけられる。撚りの方向のちがう2種の縄原体を交互に施文した羽状縄文が地文として施され，口縁より胴部にかけては，比較的太い粘土紐を使用した貼付帯によって文様が構成される。この貼付帯の内，胴上部の例は，突起部分より，4本の貼付帯が垂下し，舟形を呈する文様の積み重ねがみられる。これらの貼付帯上には，単節斜行縄文が施されている。胴部下半に至っては樽の「たが」のような，横位の，比較的太い貼付帯が数段めぐっている。その上には，篦状工具を使用してつけられたきざみが約5mm間隔につけられている。

器厚は，8mm内外，胎土に

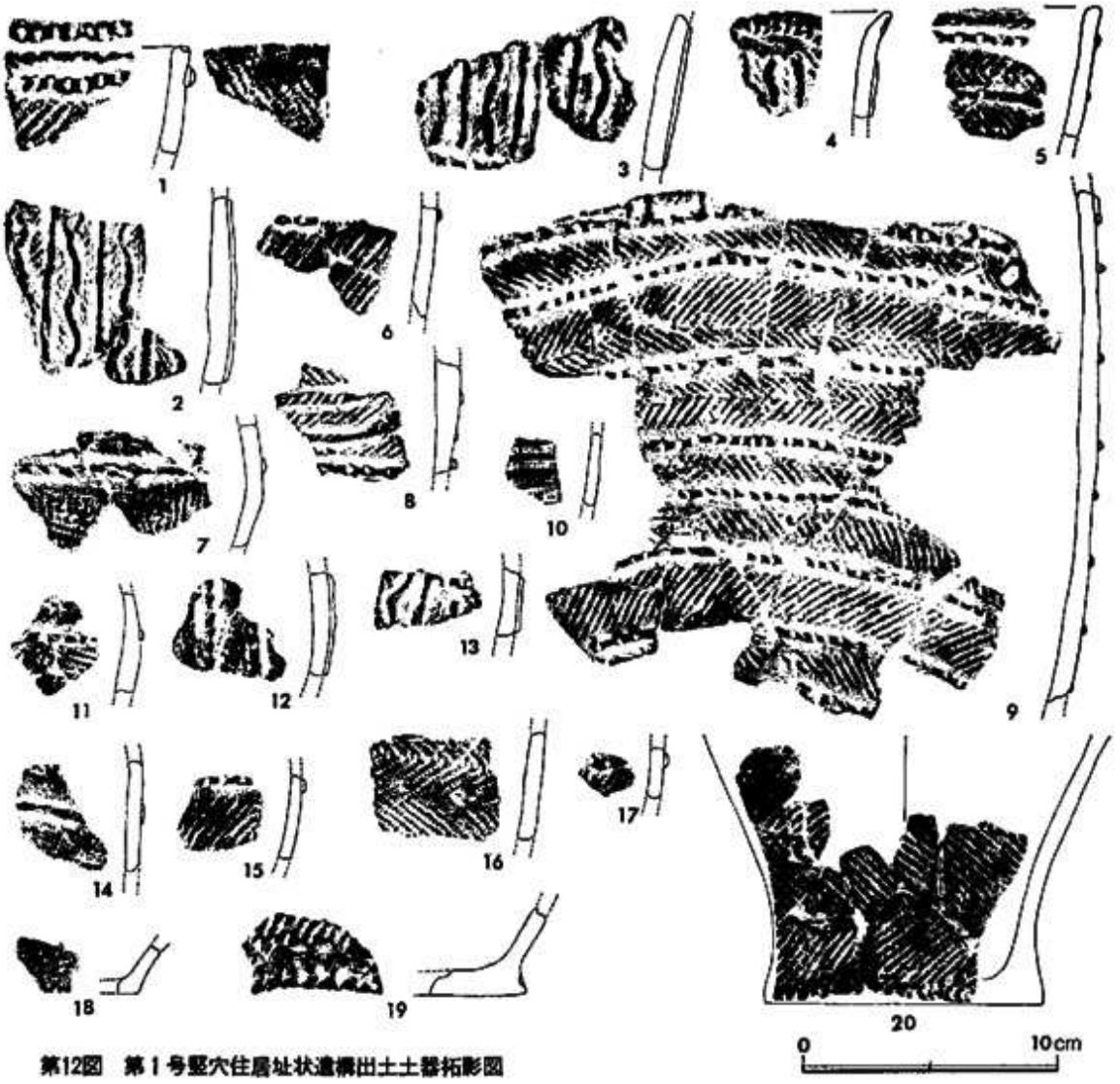
は若干の砂粒を含み，茶褐色を呈している（図版８―１）。

２は，現存部最大径31cm，底部径10.5cm，現存高36.5cmを数える大形の土器である。胴部から底部にかけてはゆったりと下り底面近くになると外側にはり出すような形となる。地文として結節のある羽状縄文が施文されており，樽の「たが」のような比較的太い粘土紐の貼付帯が数段横位にめぐっている。この貼付帯上には篦状工具によるきざみが２～３mm間隔につけられる。

器厚は，８mm内外，胎土に砂粒を若干含み茶褐色を呈している（図版８―２）。

破片においても貼付帯が特徴的に施文される例が大半を占めている。

第12図１は，口縁に一段の貼付帯を有し，その上に篦状工具によるきざみが数mmおきにつけられる。口唇上は平らに整形され，その上にも同種のきざみが数mm間隔につけられる。単節斜行縄文が地文として施文され，裏面にも器面に施文されるものとは反対方向の撚りをもった単節斜行縄文が施文される。



第12図　第１号竪穴住居址状遺構出土土器拓影図

2～4，12，13は，口縁部に折り返しによる若干の肥厚した部位を有し，その上に絡縄体の半回転押圧[7]による短縄文が縦位に並列して施文される。地文として細く撚った単節斜行縄文が施文され縦位に比較的太い粘土紐が貼付けられる。貼付帯は，まっすぐなものと蛇行するものとが交互に出現する。貼付帯上には単節斜行縄文が施文される。

5～9，11，14，15，17は，貼付帯が横位につけられるのが特徴のグループで，地文としては単節斜行縄文，撚りの方向のちがう2種の原体を交互に施文する羽状縄文，結節羽状縄文が施文される。ほとんどの例は，貼付帯上に篦状工具によるきざみが数mm間隔につけられる。この内8は，上部の貼付帯には斜行縄文，下部のものには篦状工具によるきざみがあって，施文方法が使い分けられている。9は，太目の貼付帯が8本みられ，その上にきざみがあり，口縁部近くには縦位の貼付帯がつけられている。

10，18は，絡縄体圧痕文[8]が横位に数段施文され，16は，結節羽状縄文がみられる。19は，斜行縄文が施文され，底面近くには絡縄体の半回転押圧による短縄文[9]が並列して施文される。20は，撚りの方向の反対の2種の縄文原体を交互に施文した羽状縄文がある底部片で，底面近くで急にくびれ，張り出しがある。

器形は，9，20を除いては小破片のため推定の域を出ないが円筒形の深鉢形となるであろう。器厚は，0.8～1.0cm。胎土には全て若干の砂粒を含んでいる。色調は，茶褐色を呈するものがほとんどであるが，2は，灰褐色である。

（註）

6　註5と同一方向に撚った単節斜行縄文の原体を軸に右巻した絡縄体を原体とし註2で説明したと同種の施文方法がとられている。

7　註6と同じ。

8　註1，註4と同じ。

9　註2と同じ。

（羽賀　憲二）

石　器（第16図1c，図版11B）

本遺構からは，第16図1cに示した，断面三角形の擦石の破片1点しか出土していない。その他の石片ないし礫も一切出土していない。1cは，第2号竪穴住居址状遺構の覆土最上面から出土したS—7と接合した。ただし，S—7は全体に焼けているが，本遺構から出土した破片は全く焼けていない。従って，この石器は，破損後に1a・bが焼けたことが判る。（上野　秀一）

第2号竪穴住居址状遺構（第13～17図，図版9B，10，11，12A）

D—2区にある。地山面での標高は，46.80～46.60mである。

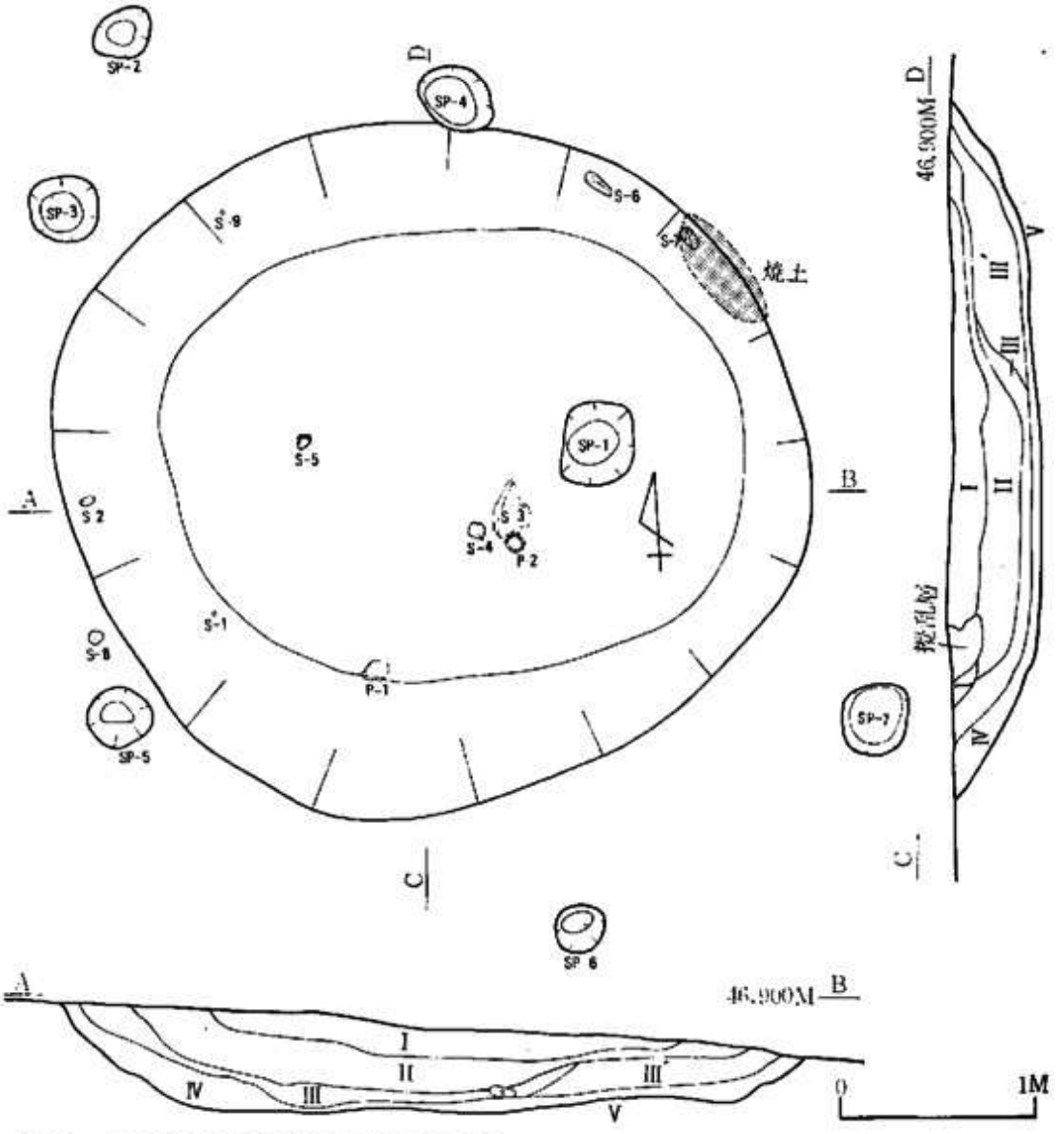
大きさは，3.63×3.49mの不整円形である。ただし，四隅に角がみとめられるので，不整の隅丸方形ともみることができる。

立上りは，西側で50cm，東側で29cm程である。床面は，必ずしも平坦ではなく，壁も明確には

確認できない所もあった。炉址などはないが，北東部の立上り付近が，焼けていた。

柱穴状の小ピットは，遺構内では，中央より少し東側に偏した所にあった（SP—1）。不整隅丸方形を呈し，底面は平らで，底面および壁はしまっている。土壌内容物は，暗灰褐色火山灰質土でしまっており，中に粘土の小ブロックおよび炭化材，オニグルミ，草木類の種子を含んでいた。大きさは，42×38cmで，深さは13cmである。遺構外縁にも6個の小ピットがあり，第3表に示した通りであるが，ピット内の土壌内容物の検討からも，特にまとまりはなく，遺構に伴うものかどうかは定かではない。

層堆積は，以下の如くである。



第13図　S256遺跡第2号竪穴住居址状遺構実測図

第Ⅰ層：真黒色土層（Ⅱ層より柔らかい）

第Ⅱ層：真黒色土層（小ブロック状に粘土粒と硬い土粒を含む）

第Ⅲ層：暗灰褐色土層

第Ⅲ'層：暗灰褐色土層（Ⅲ層よりはややしまっている）

第Ⅳ層：灰褐色土層（所々非常によくしまっている）

第Ⅴ層：灰褐色火山灰質粘土層

本遺構は，底面および壁は明確でない所もあるが，小ピットの存在から底面は，ほぼ正しいものであろう。この遺構では，覆土および底面から多くの石器を検出しているが，その内，S—3，4，5は，底面にあった例で，とりわけS—3の石皿とS—4の擦石は，セットになる可能性もある。この近くに，P—2の底部位の土器もあった。

平面プラン，立上り，柱穴の様子からいって，この遺構がどういう性格をもったものかは明らかにはできなかった。（上野　秀一）

第3表　第2号竪穴住居址状遺構小ピット一覧表

SP番号		平面形	規模	深さ	内容形	備考
1	遺構内	隅丸方形	42×38 cm	13cm	茶褐色土層	炭化物を含む
2	遺構外	不整円形	32×25		黒茶褐色土層	
3		不整円形	38×35		暗茶褐色土層	
4		不整円形	41×32		暗褐色土層	
5		不整楕円形	32×30		暗茶褐色土層	
6		不整円形	29×24		黒褐色土層	
7		不整円形	36×33		黒褐色土層	

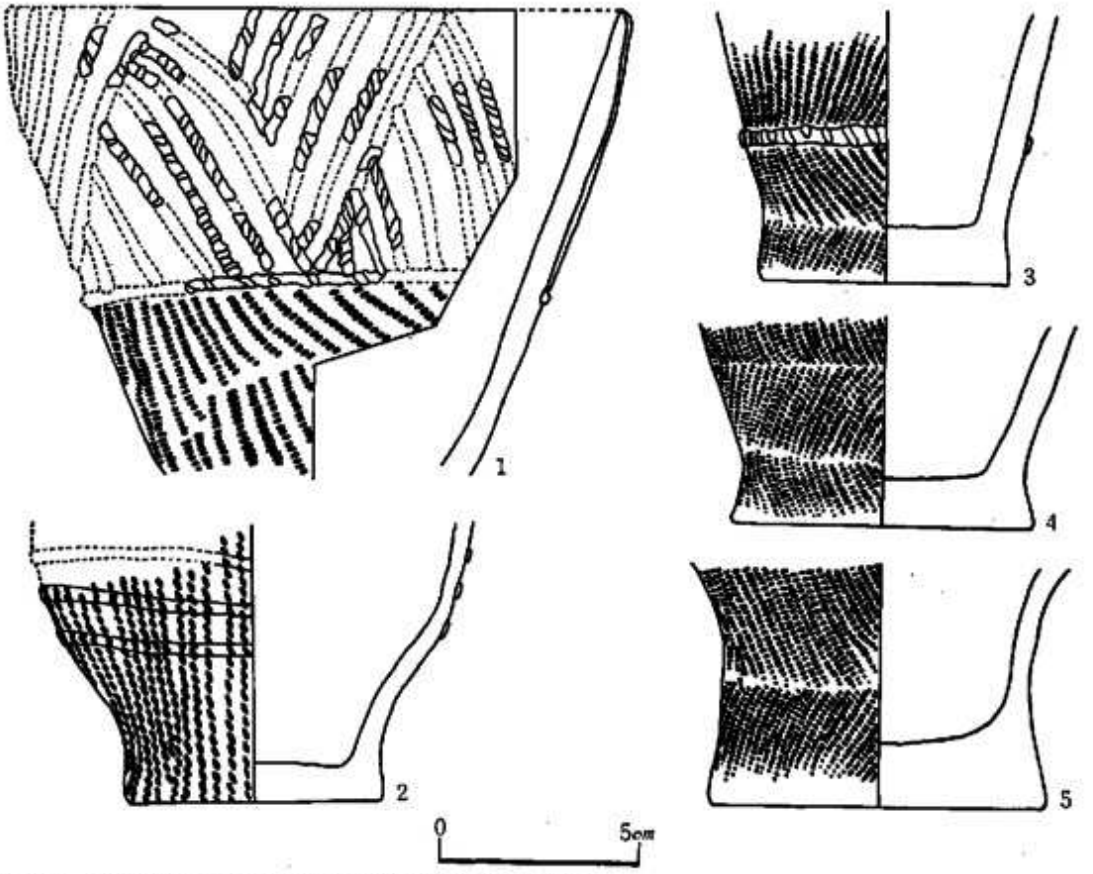
遺　物

土　器（第14，15図，図版8，10B，11A）

第14図1は，口径15.5cm，現存部最小径7.5cm，現存部高さ12.0cmを数える半完形土器である。口縁部には，比較的太い粘土紐の貼付があり，三角形を基本形とする幾何的文様を構成している。貼付帯上には，篦状工具によりつけられたと思われる「きざみ」が数mm間隔でつけられている。胴部には，単節斜行縄文が地文として施文される。器形は，口縁よりややすぼまる様な状態で底部近くへと至っており，やや小形の深鉢形を呈すると思われる。器厚は6mm内外，胎土に砂粒を若干含み，色調は茶褐色で，焼成は比較的良好である（図版8—3）。

2は，底面径6.5cm，現存高さ7.0cm，現存最大径11.0cmを数える小形の深鉢形土器の底部文である。横位に三段の貼付紐がある。その上と器面全体に縦位に2～3mm間隔に絡縄体を回転施文した撚糸文[10]がある。器厚は4～5mm。胎土に若干の砂粒を含み，色調は褐色を呈し，焼成は比較的良好である（図版8—4）。

3は，底面径6.3cm，現存高7.0cm，現存最大径8.5cmの深鉢形土器の底部片である。横位に1



第14図　S256遺跡第2号竪穴住居址状遺構出土土器実測図

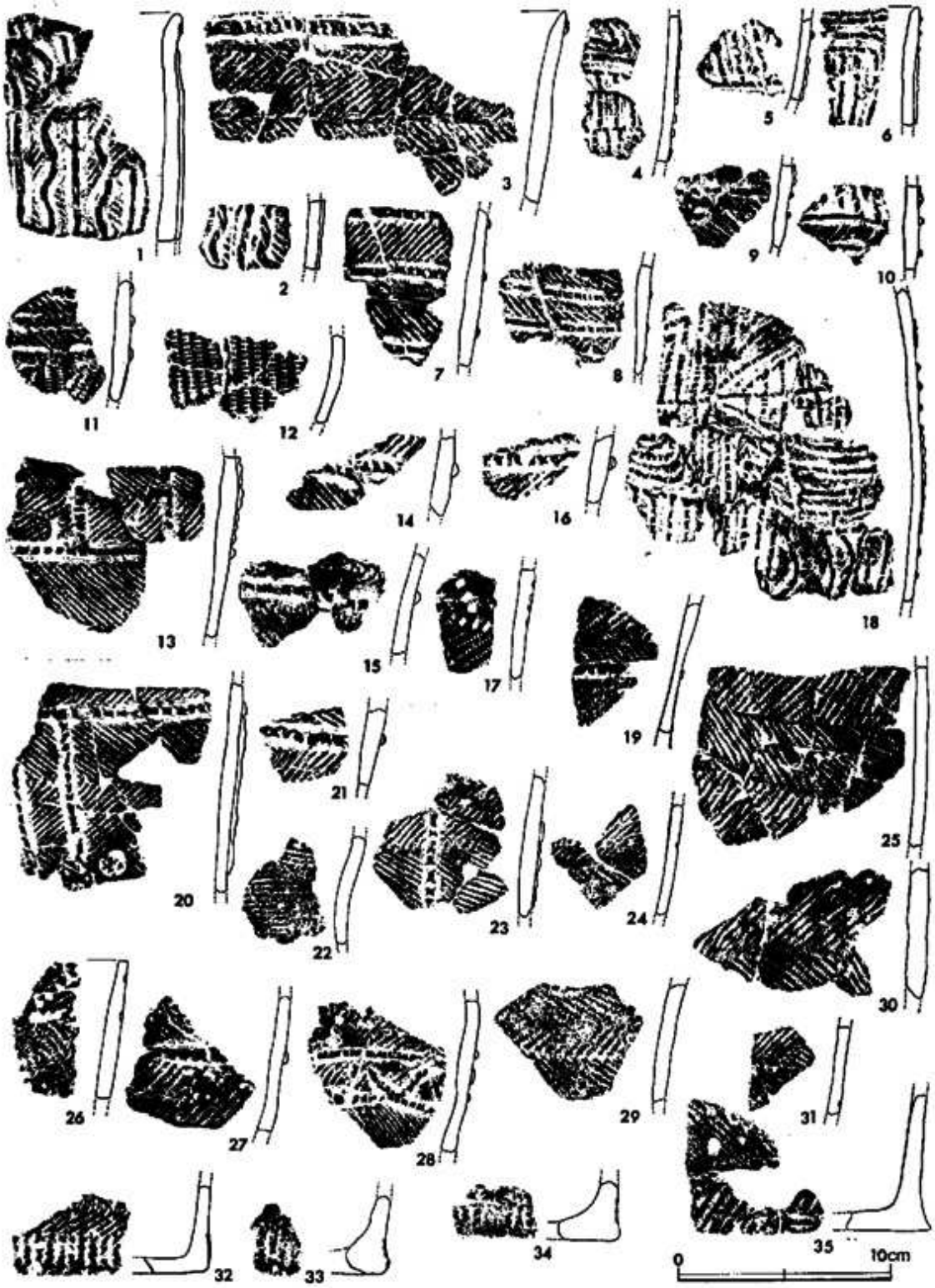
本の粘土紐による貼付帯がめぐっている。貼付帯上には篦状工具によると思われるきざみが2～3mm間隔にめぐっている。器面全体には，地文として異った方向に撚った2種の原体を交互に施文した羽状縄文が施文される。器厚は7mm内外。胎土に若干の砂粒を含み，色調は褐色を呈する。焼成は比較的良好である（図版8－5）。

4，5は，底面径7.5～8.5cm，現存高5～6cm，現存部最大径9.5～10.5cmで，底面にはり出しがある深鉢形土器底部片である。地文として，器面全体に2種の原体を使用した羽状縄文が施文される。器厚は6mm内外，胎土に若干の砂粒を含み，色調は褐色～茶褐色を呈し，焼成は比較的よい（図版8－6，7）。

第15図1・2は，口縁に折り返しによる若干の肥厚部が存在し，その上に絡縄体を90°～180°回転させた短縄文[11]を数mm間隔につける。口縁部には，比較的太い貼付帯が口縁部より垂下する形で縦位に数本直線，蛇行の順序で交互に施されている。これらの貼付帯上には単節斜行縄文が施文されている。地文は乱雑な単節斜行縄文である。

4，5，6，18は，細い粘土紐による貼付帯が縦横に数多くつけられ，複雑な文様を構成する。貼付帯上には篦状工具を使用したきざみが3～5mm間隔でつけられる。

11，12は，絡縄体圧痕文[12]，斜行縄文が施文され，細い粘土紐の貼付帯によって文様帯を区分され



第15図　第２号竪穴住居址状遺構出土土器拓影図

ている。

7，9，14～16，21，27は，地文として単節斜行縄文ないしは撚りの方向のちがう2種の原体を使用する羽状縄文が施文され，横位に数本の粘土紐の貼付帯がめぐっている例である。貼付帯上には3～5mm間隔で篦状工具によるきざみがつけられる。

13，21，23は，比較的太い粘土紐による貼付帯が，横位と縦位に組み合わされてつけられ，地文として斜行縄文，撚りの方向のちがう2種の原体を交互に施文した羽状縄文がある。

28は，横位につけられた比較的太い粘土紐による貼付帯と，斜めにつけられる貼付帯によって三角形を基本とした幾何的文様を構成している。地文として撚りの方向のちがう2種の原体を使用した羽状縄文が施文されている。いずれの貼付帯にも，篦状工具によると思われるきざみが数mm間隔につけられている。

25，30，31は，2種の撚りの方向のちがう原体を交互に使用した羽状縄文が施文された胴部破片である。22は，単節斜行縄文が施文されている。

17，24，26は，縄文原体の尖端部で器面に刺突をくり返した列点文があり，これと，撚りの方向のちがう2種の縄文原体を使用した羽状縄文が地文となる例である。

29は，結節羽状縄文が施されたものである。

32～34は，底面近くにて若干のくびれをみせ，底部にて張り出しをみせ，この部分には絡縄体を回転させた撚糸文[13]が1～2mm間隔に施文されている。32には，結節羽状縄文がみられる。35は，底面近くにて若干のくびれをみせ，張り出しがある。地文として撚りの方向のちがう2種の原体を使用し，これを交互に施文する羽状縄文が施文されている。

器厚は6～10mmで，胎土には全て若干の砂粒を含んでいる。色調は茶褐色が主体をなすが，灰褐色を呈する例（17，19，28）もみられる。焼成は一様に良好である。

（註）

10　註2と同一方向の撚りをもつ縄原体を軸に右巻きにまきつけ，器面におしあて回転施文する。

11　註5と同一。

12　註1と同種の絡縄体を使用，註1の原体よりも若干太目の軸が使用されている。

13　註2と同種の絡縄体を使用，比較的多く回転がなされるようである。

（羽賀　憲二）

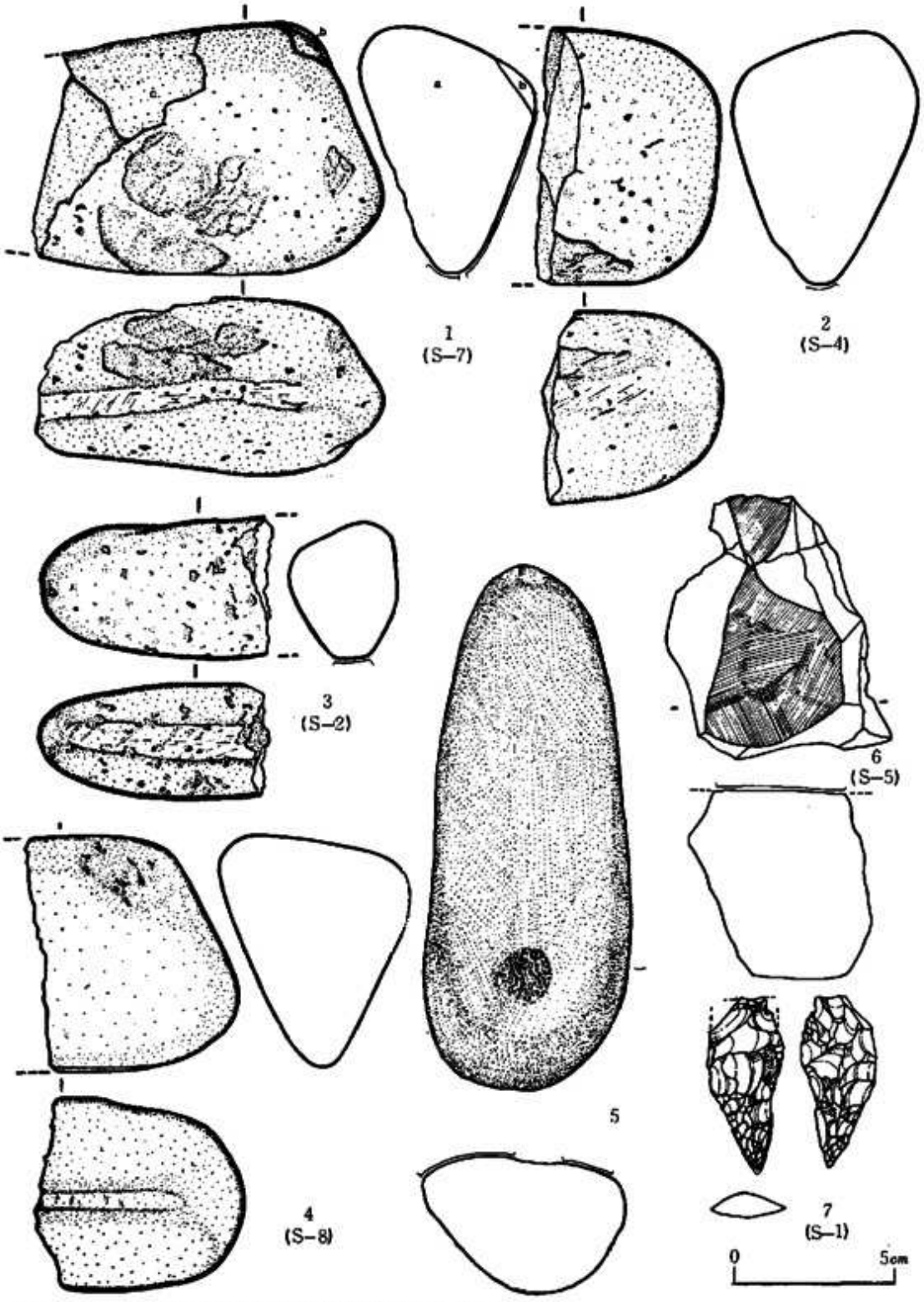
石　　器（第16，17図，図版11B，12A）

本遺構からは，多くの石器の出土をみている。

擦　石（1～5）

1～3は，断面三角形の稜の一側を擦面とした石器である。

1は，3個の破片が接合した例で，a，bは本遺構から，cは第1号竪穴住居址状遺構から出土したものであることは前述した。現存約2/3で，擦面の幅は8～6mmである。擦痕の方向は，斜および長軸方向である。aとbは全体に焼けて黒くなっている。なお，三面は滑らかであるが，明瞭に



第16図　S256遺跡第2号竪穴住居址状遺構出土石器実測図

擦痕は観察されない（第13図S—7）。

2は，約1/3の破片で，擦痕の稜の幅は12～10mmで，斜めの擦痕が観察される。これ以外に三つの面も滑らかであるが，石材の関係で擦痕は明瞭には観察できない。欠損前に焼けた形跡がある（第13図S—4）。

3は，約1/2の破片で，稜の擦面の幅は11～8mmで，長軸方向および斜めの擦痕が観察される。また図示した面の反対側の面には，一部細かく打ち砕れた部分と思われる所があり，敲石ないし台石として用いられたことも考えられる。

4は，稜の擦面は明瞭ではないが，短軸方向の擦痕が若干観察されるので，一応擦石の仲間に入れておく。約1/3程の破片である。三面も滑らかであるが擦痕は観察出来ない（第13図S—8）。

5も，同様に断面三角形の河原石を利用しているが，稜を特に使用したと思われる形跡はない。図示した面を擦面として利用したものと考えられる。擦痕は，明瞭ではない。図の下部には，3と同様な細かく打ち砕かれた部分が丸くあり，やはり敲石ないしは台石として用いられたのかもしれない（第13図S—6）。いわゆる「凹石」としても分類可能である。

石　皿（第13図3，第17図，図版12A）

6は，石皿の破片と思われるものである。擦痕は，必ずしも明瞭ではないが，浅いのが種々の方向に入っている（第13図S—5）。

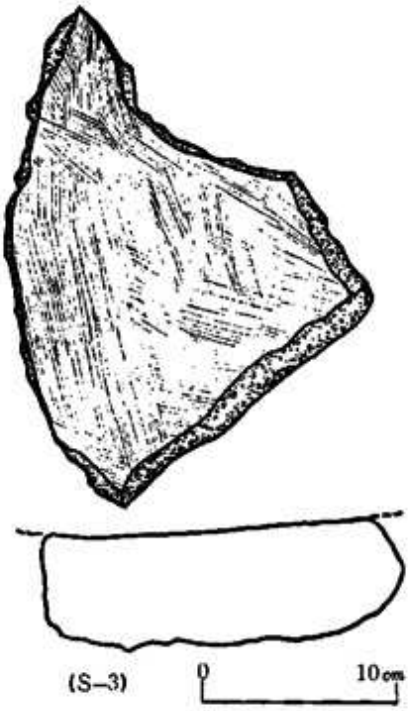
第17図の例は，不定形であるが，完形品と思われる大形の石皿で，257×187mmを数える。擦痕は長軸および斜め方向が主体である。恐らく，断面三角形の稜を擦面とした石器とセットになるものと思われる。P—2，S—4と共に遺構中央SP—1の近くの床底面に接し，擦面を上にして発見された（第13図S—3）。

両面体石器（第16図7）

7は，両面加工の尖頭器である。基部は一部欠損しているが平坦で，平面形は非対称形である。最大幅は，基底近くにあり，尖頭部が長い。尖頭部の加工は入念であるが，b面は，右側縁に加工が偏っており，断面形は，非対称形である。特に先端部1.5cm程の両エッジは，使用による刃こぼれが著しい。先端は少し磨耗している。従って「錐」的な用途も考えられる。用途としては，「石錐」ないし「ナイフ状石器」であったかと思われる。

扁平石核？

第13図S—9のポイントから出土したものである。形態は，第1号竪穴住居址から出土した第9図10に類似のもので，大きさは倍位ある。b面は原石面であるが，a面上面には，切断することによって得られたやや斜め（鈍角）の打面と思



第17図　S256遺跡第2号竪穴住居址状遺構出土石器実測図

われるものを有し，これにa面側からの細かい剥離が少し入っている。a面の下縁にも剥離が入っており，a面左には，切断面がある。

この資料は，遺憾ながら，発掘調査のミスで紛失してしまい現在手元にはない。

剥 片 類

図示しなかったが，黒耀石の小削片（chip）が6点（内1点は焼けている），硬質頁岩質の削片が1点出土している。これらの小削片は，石器製作の際生産されたものであろう。

これ以外に，小さな河原石の破片が2点出土している。

以上が，本遺構から出土した石器・石片類のすべてである。（上野　秀一）

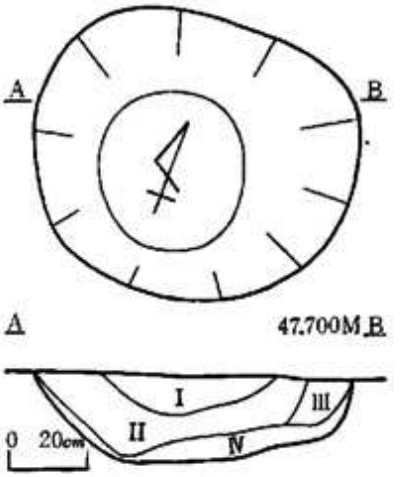
第2節　ピ ッ ト（第18図）

B—7区から，1個のピットが検出されている。

大きさは，84×73cm，深さ22cmである。不整円形を呈する。底面は，皿状で，約45°の角度で立上る。

層準は，第Ⅰ層：黒色土層。第Ⅱ層：暗黒褐色土層。第Ⅲ層：黒褐色土層。第Ⅳ層：暗灰褐色土層である。

遺物は，一切検出されていないが，周囲から出土しているのは，トコロ第6類であるので，この位の時期の可能性もある。（上野　秀一）



第18図　S256遺跡第1号ピット実測図

第3節　植物遺存体について（図版18A，B）

本遺跡の第1号竪穴住居址および第1,2号竪穴住居址状遺構からは，各々植物遺存体がみつかっている。

これらの植物遺存体の採取は，形状のかなり明確なものは，現場で取り上げた例もあるが，もろいため，現形のまま採取することは不可能であった。多くは矢野牧夫氏の指導により，各々の土壌サンプルを水洗しその中から選別したものである。ただし，以下に（　）で示した個体数は，破片も1点に数えており，また土壌サンプルは，植物遺存体を含む層をすべてサンプリングした訳ではないため実数を示すものではない。

1　第1号竪穴住居址（図版18-1）

炉址内焼土層：木炭・くるみ穀片（24個<）

ＳＰ-5内覆土：木炭・くるみ穀片（2個<）

ＳＰ-7内覆土：木炭・くるみ穀片（2個<）

2　第1号竪穴住居址状遺構（図版18-2）

Ｆ1面直上炭層（第Ⅷ層）：木炭*・くるみ穀片（30個<）・どんぐり（1個<）

3　第2号竪穴住居址状遺構（図版18-3,4）

ＳＰ-1内覆土：木炭・くるみ穀片（20個<）・マメ科の種子（1個<）

（註）*印で示したのは，^{14}C年代測定を依頼中の資料

これら三種類の植物遺存体は，矢野牧夫氏の鑑定では，以下の如くである。

オニグルミ（Juglans ailanthifolia）

ミズナラ（Quercus mongolia）

マ　メ　科（Leguminosae）

この内，オニグルミの堅果は，各遺構から最も多く検出できた資料で，すべて縫合線上から半割した例ないしそれ以下の破片である。ほぼ形状の判る2点の半割の資料では，核長21mm，核幅19mm，核厚16（8×2）mm（第1号竪穴住居址状遺構炭層出土），核長約20mm，核幅約20mm，核厚約11（5.5×2）mm（第1号竪穴住居址炉址焼土層出土）である。すべて炭化している。

ミズナラの堅果（いわゆるドングリ）は，第1号竪穴住居址状遺構の炭層から1個だけ検出できたもので，焼けた半割の資料である。これは表皮がはずれ種実の中身が残ったもので，サイズは，核長15mm，核幅10mm，核厚11（5.5×2）mmである。

同様に，第2号竪穴住居址状遺構のＳＰ-1から1点だけ検出したマメ科の種子は，サイズが，長さ3.5mm，幅2.5mm，高さ1.9mmの完形の炭化した資料である。このマメ科は，種類が多く，細かな同定はできないが，大きさからいって食用にしたものではないという話である。

これら三つの遺構の構築年代は，伴出土器から縄文早期末ないし前期初頭と考えられ，絶対年代は，6,000年B.P. 位の年代が与えられる。この時期は，気候区分では，Atlantic 期の中頃に相当し，海水準は現在より約3m上昇しており，気温も約2℃温暖であった（湊・井尻1966，湊1970）。

安田喜憲（安田1974）は，日本における晩氷期以降の植生変遷と人類の居住の問題を論じた中で，後氷期の花粉帯を，L帯，RⅠ帯，RⅡ帯，RⅢa帯，RⅢb帯の5つに区分している。6,000年B.P. 位の時期は，この区分に従うとRⅡ帯（8,500～8,000年～3,000年B.P.）に相当する。この時期は，北海道の秩父別・風蓮などの道央部の資料では，Betula（カバノキ属）が前時代（RⅠ帯）に比べて減少し，Quercus（コナラ属），Ulmus（ニレ属），Juglans（オニグルミ属）などの落葉広葉樹が増加して，気候は温暖化し，湿潤化したといわれる。

紋別郡湧別町湧別市川遺跡における花粉分析の結果（五十嵐・熊野1973）では，約6,000～3,700年前は，Quercus-Juglans 帯の時期で，Abies（モミ属），Picea（トウヒ属）とも激減し，代ってQuercus, Juglans が急増する。さらにUlmus, Tilia（シナノキ属），Castanea（クリ属），Corglus（ハシバミ属）といった温帯性広葉樹が少量づつだが出現する。また，黒松内低地帯から北に出ないPteracarya（サワグルミ属）が2％検出される資料があり，針葉樹の割合は10％で現在よりはるかに少ない。以上の事実からみて，当時は，年平均気温で，現在より1℃前後暖かかったといわれる。

ひるがえって，札幌付近――発寒中継ポンプ場，茨戸第1中継ポンプ場での花粉分析の結果（五十嵐・熊野1974）では，6,800～2,500年B.P. 位の間は，Quercus-Juglans 帯に相当し，温帯性広葉樹の優勢な時代で，ハルニレ，ミズナラ，オヒョウ，オニグルミ，ウダイカンバなどからなる広葉樹林に，僅かにトドマツが混交するといった状態で，沖積世最温暖期の植生を示しており，年平均気温で，約2℃現在よりも暖かったといわれる。そして，現在の札幌周辺と変らない植生になったのは，約2,500年B.P. 頃から始まるQuercus-Abies 帯に入ってからで，前時代より少し冷涼化し現在に至っている。

本遺跡一帯は，背後に野幌原始林をひかえている。現在の野幌原始林は，原生林は殆どなくなり，半自然林が主体になっているが，針潤混交林で，樹種は針葉樹が多く，特にトドマツが主体を占め，トドマツの純林に近い様相を呈している。広葉樹としては，センノキ，カツラ，シナノキ，ミズナラ，エゾイタヤ，ホオノキ，エゾヤマザクラ，シウリザクラ，ミズキ，ナナカマドなどがある（北海道教育庁社会教育課編1969）。遺跡が営なまれた当時は，前述の如く約2℃程温暖であったことを考えると，当時は現在より針葉樹が少なく，ミズナラ，オニグルミといった温帯性広葉樹の優勢な植生を示していたものと思われる。本遺跡で，オニグルミ，ミズナラの堅果が検出されたという事実は，あながち，当時の気候の温暖化とそれに伴う植生の変化といった自然環境の変容と全く無関係であったとはいえないであろう。

しかも，それらの植物遺存体は，マメ科の種子を除いて，食料に供せられたものと考えることも可能である。特に，オニグルミにおいては，すべて半割ないしそれ以下の破片であり，この事実は，恐らく食用にするために遺構内に持ち込まれたことを示唆するのかもしれない。遺構内から出土した敲石（凹石）は，このくるみを割るためとか，どんぐりの皮むきなどに用いられたのかもし

れないし，また石皿と数多くの擦石は，ミズナラといった落葉性どんぐりのアク抜き（渡辺1972，1973，松山1972）の前段階として，製粉化するために用いられたのかもしれない。

ところで，現在北海道内の遺跡から木炭以外の植物遺存体がみつかったという報告は，管見の範囲で不確実な例あるいは出土層位のはっきりしないものまで入れると19遺跡を数える。それを列挙すると以下の如くである。

なお（　）内の数字は個体数である。

1　函館市梁川遺跡（大場・武内1955，p.50）
　種子（キハダ）　　縄文早期（梁川町式）

2　函館市春日町遺跡（児玉・大場1954，p.196）
　くるみ(1)　　縄文前期初頭（春日町式）

3　静内郡静内町トビノ台遺跡（藤本1970，p.74）
　くるみ（炭化）　　縄文前期（静内中野式）

4　千歳市美々貝塚（松下ほか1967，p.51）
　オニグルミ　　縄文前期（静内中野式）（^{14}C：4,500±140y. B.P.）

5　網走市大曲洞窟（児玉・大場1956，p.59）
　くるみ(3)　　縄文前～中期

6　函館市サイベ沢遺跡（児玉・大場・武内1958，p.65）
　豆科植物，くるみ（炭化）　縄文前～中期（サイベ沢Ⅰ～Ⅶ式）

7　札幌市手稲遺跡（大場・石川1956，p.57）
　くるみ(4)　　縄文後期（手稲式）

8　古宇郡泊村茶津２号洞窟（竹田・関井・高橋ほか1962，p.35）
　くるみ(4)　　縄文後期（御殿山式？）

9　天塩郡豊富町豊富遺跡（河野1959，児玉・大場1959，p.46）
　あわ，そば，緑豆　　擦文時代

10　根室市西月ケ岡遺跡（八幡ほか編1966，pp.95～96）
　モロコシ　　擦文時代（末期）

11　十勝郡浦幌町十勝太若月遺跡（石橋・木村・後藤1974，pp.34～35）
　オニグルミ，オオムギ，クチビルバナ科の種（シソ），アワ　　擦文時代（末期）

12　釧路市緑ケ岡ＳＴＶ遺跡（沢編1972，p.16）
　くるみ様炭化物(1)　　擦文時代

13　常呂郡佐呂間町浜佐呂間遺跡（佐藤・其田1965，pp.55～56，石附1975，p.36）
　ササの実　　擦文時代

14　常呂郡常呂町栄浦第二遺跡（東大文学部考古学研究室編1972，p.536）
　ミズナラ，オニグルミ　　縄文晩期～続縄文，オホーツク文化

15　常呂郡常呂町朝日トコロ貝塚Ｆトレンチ（駒井編1963，p.246）

くるみ，イネ科植物（攪乱層）

16　常呂郡常呂町トコロチャシ（駒井編1964，P.184）

オニグルミ（多数）　　オホーツク文化

17　浜益郡浜益村岡島洞窟（大場・石川1961，P.62）

くるみ　　擦文文化？（攪乱か？）

18　古宇郡神恵内村観音洞窟（四手井1960，P.27）

くるみ，種不明の種子　　擦文時代

19　余市郡余市町ヌッチ遺跡（峰山1959，P.6）

くるみ　　時代不詳（アイヌ文化？）

この内，縄文時代に属する例は，1～8の8例であるが，1の梁川遺跡出土のキハダは薬用以外，食用に供せられた事例を聞かないので，一応除外して考えると7例ということになる。9～13までは擦文時代の例であるが，この中で，13の浜佐呂間遺跡の例は，報告では稗粟の種子（250g）が住居址外の貯蔵穴から出土したとされているが，林善茂氏の再鑑定では，ササの実であるといわれる。このササの実は，種類によって異なるが，60年ないし120年の周期をもって一斉に開花する。実は，イネやムギと同じく栄養価が高く，ササだんご，ササもちなどにして食用にされている（宇田川1965）。14～19の例は，共に時期，出土層位などが不明確なものが多いが，トコロチャシの例はオホーツク文化に伴出したものであろう。観音洞窟の例は，石附氏の教示では擦文時代の可能性が強いといわれる。

問題は，この内縄文時代の7例の事例である。出土した植物遺存体は，6のサイベ沢遺跡出土の豆科植物を除いて，すべて「くるみ」である。美々貝塚の例では，この「くるみ」はオニグルミであることが判明している。時期は，縄文前期が3例，縄文前～中期が2例，縄文後期が2例である。

春日町遺跡の例は，長径3.1cm，短径2.4cmのくるみで，本遺跡例より大形である。時期は，縄文早期末～前期初頭と考えられるので，時代的には，本遺跡とほぼ同じである。トビノ遺跡，美々貝塚は，共に静内中野式土器を共伴し，前者は，長軸2m，短軸1m，深さ約1mのピット内に40cm程層をなして炭化くるみが堆積していた。後者は，貝層中の炭層から出土したもので，貝層中の木炭の^{14}C年代は，4,500±140年B.P.と出ている。ただし，この年代は，土器の型式学的編年と著しく食い違いを示している。大曲洞窟の例は，かき殻を主体とした貝層（第5層）中から出土したもので，長径2.8cm，短径2.5cm程で3個みつかっている。内2個は，両側とも縫合線上より穿孔されて円窓状に開通しているので，小動物によって食された例かもしれない。土器は，縄文式，櫛目押型文土器，トコロ第6類などが出土しているが，層位毎の土器関係は不明である。サイベ沢遺跡では，円筒下層，上層式の縄文前～中期の土器と共に，豆科植物の炭化したものとくるみの堅果の炭化したものがみつかっている。この内，豆科植物は，本遺跡でも検出されている。手稲遺跡の例は，第1地区泥炭層直下の砂層から検出されたもので，長径3cm程のくるみの堅果が4個以上みつかっている。現在保存長径は2.2cm程であるという。茶津第2号洞窟出土のくるみは，第3層第2号炉址付近から，炭化したくるみが4個以上出土している。図示された4例は，すべて半割以下の資料

である。

以上の中で，くるみの形状が判っているものが3例あるが，すべて大きさが核長3cm，核幅2.5cm程の例で，本遺跡出土例に比べて全体に大形である。どんぐりに関しては，現在の所道内では出土したという報告はなく，本遺跡例が初見である。

このように本遺跡で，食用可能な多くの植物遺存体が検出されたという事実は，当時の植物質食品の採取の状況，しいては食料獲得の一端を示す事例として誠に興味深いものである。最近，貝塚の発掘を通して動物遺存体の研究は盛んになってきたが，植物遺存体については，まだまだの感がある。

当時の人間の生活・社会組織，具体的な狩猟・採集の姿は，人工遺物と自然遺物の両輪の研究を通して甦えってくるであろう。今後人工遺物の研究と共に，自然遺物の研究がますますウェイトを増してくる故縁である。　　（上野　秀一）

第4節　ま　と　め

本遺跡で検出された3個の縄文早期末～前期初頭の遺構について若干考察を加えてみたいと思う。

本遺跡からは，3軒の竪穴遺構が，地山での標高約47.5～46.5mの間に接近してみつかっている。その内，一軒は，隅丸長方形を呈し中央に約2×1mの掘込炉と7本の主柱穴，遺構外に3本の副柱穴を伴なう例である。住居址と考えられよう。他の2例は，住居址とする根拠に乏しく，竪穴住居址状遺構として扱ったもので，第1号は，隅丸長方形を呈し，遺構内に浅い柱穴3本と床面（F_1面）上に5cm程の厚さの炭層が存在した例である。この例には，この床面以外に，焼土および大形土器片の出土からもう一つ生活面を想定出来た（F_2面）。第2号は，不整円形を呈し，立上りも緩やかで，小ピットが，遺構内に1本だけみつかった例である。遺構周辺に6本の柱穴状小ピットがみつかっているが，これが本遺構に伴なうがどうかは結論は出なかった。そして，各々の遺構からは，縄文早期末～前期初頭に位される「東釧路Ⅲ式」併行の土器を多量に出土し，またオニグルミ，ミズナラなどの植物遺存体も数多く検出できた。

今まで道内で，縄文早期の住居址ないし竪穴住居址状遺構がみつかったという報告は，管見の範囲で，14遺跡33例である。この内，本遺跡と同様に「東釧路Ⅲ式」土器を共伴した例は，網走郡女満別町中央B遺跡A，B竪穴（大場・奥田1960），目梨郡松法町ソスケ遺跡（沢・本田ほか1971），浦河郡浦河町西舎遺跡（黒崎・橋本ほか1972），釧路市貝塚町1丁目遺跡（沢・西編）の4遺跡，5例である。

女満別町中央B遺跡の例は，発掘技術上で，問題を多く残すが，A竪穴が，平面プラン不整円形で，直径8mを数える。中央に，長径20cm程の焼土層があり炉と考えられる。柱穴は，壁周に沿って7か所確認されている。B竪穴は，報告者は，二つの竪穴が重複した二重址であると説明しているが，図示されたセクションからは，必ずしもその関係は判然としない。報告されたセクションを信ずる限り，一個の段を有する竪穴と考える方が妥当ではあるまいか。

松法町ソスケ遺跡の例は，楕円形プランで，長径5.1m，短径4.5mを数える。住居址内南壁側には，1.5×1.0m，深さ15cmのピットがある。柱穴は，南東壁側に直径25cmの例が1本と北壁側に，やや直線的な配列で直径10cm程の例が3本あると報告されている。しかし，報図によると，径10cm程の柱穴は，南側壁に沿っても，やはり直線的な配列で3本認められ，長軸にそって3本づつの柱穴が2列配された6本柱の住居址の可能性もある。

西舎遺跡の例は，半分しか残されていなかったもので，径約3mの円形プランを呈すると報告されている。しかし円形プランであったとは必ずしも断定出来ない。炉・柱穴などは確認されていないが，住居址壁に接して，外に径40cm程の台石（作業台）があったといわれる。貝塚町1丁目遺跡の第13号住居址は東半分を北筒Ⅱ式期の第9号址で切られているため，全形は不明であるが，西壁の状態からいって，ほぼ円形に近いプランであろうという。柱穴様小ピットはなく，中央部近くに同一時期と考えられる楕円形の遺構（第3号ピット）がある。

ひるがえって，他の上器型式を共伴した北海道の縄文早期の住居址例を概観してみると，早期の貝殻文を主体とした尖底土器群では，函館市住吉町遺跡（児玉・大場1953），松前郡松前町トノマ遺跡（吉崎1965）で，遺構と思われるものが確認されているが，共に平面プランは不明である。住吉町例は，石で囲まない長径約30cm程の方形の炉が検出されており，これを中心に，6×4.5m程の範囲が，濃い遺物の分布を示めしている。トノマ例は，竪穴構造の一部がみつかったというだけで詳細は不明である。

下頃辺式，沼尻式，虎杖浜式，東釧路第Ⅰ群などの条痕文・沈線文などを文様の主体とした平底土器群のグループでは発見例は多い。十勝郡浦幌町下頃辺遺跡（吉崎1965），同郡同町平和遺跡（大場・明石1968，明石1971），釧路市東釧路遺跡（河野・沢ほか1962，沢1968，沢・西ほか1971，沢・橋本ほか1971），白老郡虎杖浜遺跡（大場・扇谷・竹田1962），釧路市沼尻遺跡（河野・沢ほか1962，沢・西1973），同市北陽高校校庭（河野・沢ほか1962），釧路市緑ケ岡ＳＴＶ遺跡（沢編1972），紋別市オムサロ第76号竪穴（大場・因幡1971）などがある。

下頃辺遺跡では，工事で露出した崖面で確認されたもので，円形プランと推定される竪穴住居址で，2個の柱穴が発見されたが，炉址は確認されていない。平和遺跡では，第1号～第3号，第5号～第14号までの13個の竪穴が確認されている。平面プランは，殆どの例不整円形を呈しているが，第2号，第12号竪穴は楕円形で，第5号は隅丸方形である。しかし，第2号は，平面プランには疑問があり，また第12号は図が示めされていない。さらに第5号は方形で，構造的には，円形プランのそれと軌を一にするので，平和遺跡では円形プランが一般的であったと解釈してもよいであろう。規模は，第5号の直径10.6mを最大とし，第14号の直径2.6mを最小とするが，直径4～5mの所に集中している。竪穴中央には，殆どの例に焼土が認められている。ただし，一番規模の小さい第14号竪穴には，焼土はなく，第3号，第6号，第9号の例は，全壊に近く焼土の有無は確認されていない。第8号においては竪穴中央に円礫が5～6個残置されており，石囲いの炉であった可能性もあるという。なお，第10号，第11号では，各々竪穴中央に大きな掘り込みがある。各々1.2×0.9m，深さ20cm程の隅丸方形，長径2m，深さ20cm程の楕円形を呈する。第10号では，この中に

焼土が認められたとのことである。柱穴は，遺構内外に数多く認められるが，いずれも不規則な配列のものが多い。しかし，基本的には，遺構内にあるものは，壁周をとりかこむような配列で，遺構外にある例も，壁周に沿っている。この内，第7号は，炉（焼土層）を中心に，七角形に7個の柱穴が配されており，第8号では，遺構内に3個づつ半弧状に一列に並んで，2列6個認められている。また，第7,8号では，床面直上の第Ⅳ層中でも踏み固められ，遺物が豊富に出土し，これも1つの生活面であろうと報告者はいっている。いずれも，伴出土器は，沼尻式ないしアルトリ式である。

東釧路遺跡では，昭和35年の調査（河野・沢1962）の際，その下層から，直径約5.5mの不整円形プランの住居址がみつかっている。柱穴は，遺構内で，主柱穴と思われるものが4本，副柱と思われるものが2本みつかっている。また，遺構外壁に沿って36個の小ピットが認められたという。炉ないし焼土と思われるものは検出されていない。時期は，東釧路Ⅰ式期であるといわれる。同遺跡の昭和42年度の調査（沢1968）では，不整円形プランの直径5.5mの住居址が発見され，中央より少し南壁によって炉址がみつかっているという。床面近くには，炭化した木炭およびアシが3～5cmの厚さで堆積しており，側壁と接する床面に，径1～2cm程の棒を突さしたような小孔が並列してあったという。床面に接して，沼尻式と前後関係不明な土器が出土している。同遺跡第Ⅰ地点（東釧路貝塚）の昭和45年の調査（沢・西ほか1971）では，2個の住居址がみつかっているが，その内第1号住居址は，ほぼ円形の径4.6m程の住居址で，完掘ではないので詳細は不明であるが，高さ5～8cm程の段が認められたとのことである。柱穴様ピットは，南北に並列した形で，3個認められている。時期は沼尻式土器に接近した時期であろうという。第2号住居址（沢・橋本ほか1971）は，3.5×3m程の不整円形を呈する住居址で，床面中央に径10cm，深さ21cm程の柱穴が1個みつかったという。床面には焼土はない。時期は，不明だが，東釧路Ⅰ式より相対的に古い可能性が充分あるという。

釧路市沼尻遺跡の例は，プランは確認されていないが，中心部に70×50cmの焼土を板状の砂岩4枚でとり囲んだ石囲いの炉址があったといわれる。この周囲より沼尻式の完形土器1個体と石錘11個などが出土している（沢・西1973）。北陽高校校庭の例は，円形プランで，炉址はなく，柱穴は3本一直線状に配されていたといわれる。時期は，東釧路Ⅱ式である。

虎杖浜遺跡では，4.9×4.76mの不整円形プランの住居址がみつかっており，中央部床面に，楕円形（74×50cm）の炉址があったといわれる。土器は，虎杖浜式土器を伴出している。

緑ケ岡ＳＴＶ遺跡では，2軒の住居址がみつかっているが，Ｊ－2号は，半壊した例で不整円形プランを呈するが，柱穴・炉は確認されていない。大楽毛式に近い土器を伴出している。Ｊ-3号も，不整円形プランの住居址で，炉は確認されていないが，遺構内に小ピットが13個みつかっている。時期は，Ｊ-2号と同時期か接近した時期であろうという。

オムサロ遺跡第76号竪穴では，不整楕円形プランのすりばち状の住居址が検出されたとされているが，プラン・壁が不整形で，住居址とは考え難く，完掘していないのではないかと考えられる。

最後に石刃鏃文化の遺構と思われる例を紹介しておこう。その1つは，女満別町豊里（石刃）遺跡第一地点の例（大場・奥田1960）である。ここでは，長径20cm程の焼土とその周りに台石，円

錐形石核，石槍，石刃，石刃鏃，剝片，石錘など計約100個が発見されたといわれる。プランは，確認されていないが住居址であったろうといわれる。もう1つは，釧路市大楽毛第4地点（加藤1969）の例である。報告者は，第5層～第7c層にかけては縄文早期，東釧路Ⅲ式土器，第8層では石刃鏃，第9層は，先土器文化期の石器がそれぞれ出土し，第9層より掘り込まれた先土器文化期の遺構と，第7c層上部より掘り込まれた縄文早期の遺構などが検出されたといわれる。前者は，隅丸方形の長径3.5m，短径2.8mの竪穴住居址で，これを取り囲むように高さ20cm程の段が存在している。炉址は，住居址中央に，縄文中・後期の攪乱があるため存在は確認できていない。しかし，先土器時代の彫器とされた第7図2の資料は，ファシットの入り方は，荒屋型彫刻刀に近いものであるが，長く下端近くまで抜けており，素材および周辺調整は，通常の荒屋型とは異なっており，石刃鏃文化の所産された同図11の例と極似している。また，1も同図10などと類似している。さらに，第8図69の蔵石は，いわゆる「凹石」といわれるもので，先土器時代には認められない。従って，本住居址は，石刃鏃文化期か，それ以降「東釧路Ⅲ式」期の所産である可能性が高いと思われる。なお，この隅丸長方形の住居址の北西部に，重複して縄文早期の遺構が重なっていたと報告されているが，その時期の遺構であるかどうかは報告では必ずしも明確ではない。

以上通観して判断されることは，条痕文・沈線文などを文様の主体とした平底土器群の時期および東釧路Ⅲ式期の竪穴住居址は，プランは不整円形を基調とし，一部隅丸方形・楕円形を呈する例もある。そして，焼土が，殆どの例に認められる。とりわけ，沼尻例では石囲いが認められている。柱穴の配列には，規則性は認められないが，東釧路遺跡昭和35年下層の例では，主柱穴が4本であり，平和遺跡の第7号では，炉を中心に7本，同8号およびソスケ遺跡で3本づつ一列に並んで，2列6本認められるのが，比較的まとまった例である。

それでは，本遺跡例と比較してみると，第1号竪穴住居址例の如く，明確な掘り込みをもった炉を有し，遺構内に7本の主柱穴と遺構外に3本の副柱を有する例は，以上でみる限り初見である。ただ，遺構中央に掘り込みが認められる例として，平和遺跡第10,11号竪穴があり，また女満別町中央B遺跡B竪穴，東釧路遺跡第Ⅰ地点第1号住居址，大楽毛第4地点では，すべて完全にプランを確認された訳ではないが，段があった可能性がある。また，平面プランが隅丸方形ないし楕円形を呈するものに，平和遺跡第5号，ソスケ遺跡，大楽毛第4地点などがある。6本柱を基調とする例としては，ソスケ遺跡などがある。

第1号竪穴住居址状遺構の如く，床面直上に炭層が認められた例として東釧路昭和42年調査例があり，生活面がもう一枚認められたと報告されているものに，平和遺跡第7,8号竪穴がある。

第2号竪穴住居址状遺構は，不整円形を呈し，柱穴は1本しか認められなかったが，この例は，平面プランとしては，他の多くの例と同様であろう。とりわけ，東釧路遺跡第Ⅰ地点第2号住居址例と極めてよく類似している。

さて，本遺跡で接近して3軒発見された竪穴は，平面プラン・構造が，各々著しく異なっている。時期的には，すべて同一型式の「東釧路Ⅲ式」土器を出土し，ほぼ同時期であると考えられる。しかし，仔細に検討すると貼付文の幅が少しづつ違い，各々の間にはミクロな時間差を考えることが

できるかもしれない。さて，前に掲げた遺跡の中で，ほぼ同時期で2軒以上の竪穴が接近して発見された例は，東釧路遺跡第Ⅰ地点の不確実な例も除いて，平和遺跡だけである。ここでは，発掘技術上の問題が全くない訳ではないが，11例プランが判っており，内8例は不整円形である。他の3例は，隅丸方形ないし楕円形であるが，基本的には，円形プランを基調とすることは前述した。構造的にも，第10,11号の掘込みのある例を除いては，焼土と壁周内外に柱穴を伴なうという点で，比較的まとまりがある。従って本遺跡の如き例は，平和遺跡例と違って特異な感がある。今後資料集積をまって検討すべき問題である。

さて，関東地方の縄文早期の住居址は，一般に内部に炉址をもっていない（麻生1965）が，この事実をもって，沢（河野・沢ほか1962）および吉崎（吉崎1965）は，「北海道のこの時期の竪穴住居には，明確なかたちで炉址の存在するものがある点で，本州地方のそれと性格が異なる」としている。しかし，東北地方では，縄文早期の住居址に，明確な形で炉址を伴なっている。比較的まとめられている山形県の例（加藤1972）では，南陽市須刈田遺跡の須刈田式（田戸下層式併行）の隅丸方形の住居址では，中央部に1.3×1m，深さ30cmの掘込式の炉がある。また，最上郡舟形町大畑山遺跡では，山ノ内式（田戸上層式併行）2軒，細野式（子母口式併行）1軒，大畑山式（野島式併行）1軒の住居址群を発掘している。平面プランは山ノ内式においては隅丸方形，細野式は楕円形状，大畑山式は隅丸方形で，1例の不明なものを除いて，地床炉ないし掘込炉を伴っている。ただ，飽海郡遊佐町金俣B遺跡の例は，槻木Ⅱ式に対比されるが，円形プランを呈し，炉址は確認されていない。従って，金俣B遺跡の例を除いて，関東地方の田戸下層式土器の時代から，東北地方では，明確な形で炉を伴っている可能性が強いのではあるまいか。このことは，東北地方，北海道という北日本の気候的問題に由来するものであろうか。今後検討する必要がある。

最後に，竪穴住居址の構造上の問題について考えてみると，一般的には，円形プランを呈する住居址は，柱穴は炉を中心に壁面にそい円形に配列しており，上屋構造は円錐形と考えられる。一方，方形ないし楕円形プランの住居址は，長軸にそって柱穴が並ぶため，木材は合掌式に組み合わされ，屋根は切妻，四柱づくりになる（麻生1965）。本遺跡第1号竪穴住居址例は，長軸に沿って3本づつ2例認められ，屋根は切妻式であったかと思われる。しかも，遺構外西側に認められた3本の柱穴は，西側部分に片寄って，床面および遺構外縁部が焼けていたことから，入口構造に伴う柱穴であった可能性が高い。

ただ，本遺跡の竪穴の柱穴で問題になるのは，第1号竪穴住居址の東側に相対するSP-5，SP-7の小ピットおよび第2号竪穴住居址状遺構のSP-1内からくるみが出土していることである。果して，これらが柱穴であったかどうかという疑問は残る。貯蔵穴的性格の小ピットであったことを完全には否定はできないかもしれない。とりわけ，後者の例は，直径も大きいのでその感を強くする。

以上，みてきたように本遺跡の例は，縄文早期の住居址の平面形・構造に多くの問題を投げかけ，さらに遺構内外にある小ピットの同時期性およびその性格の究明に，幾つかの問題を提示する資料である。

（上野　秀一）

第2章　発掘区出土遺物

第1節　土　　器（第19～25図，図版12B，13～15，16A）

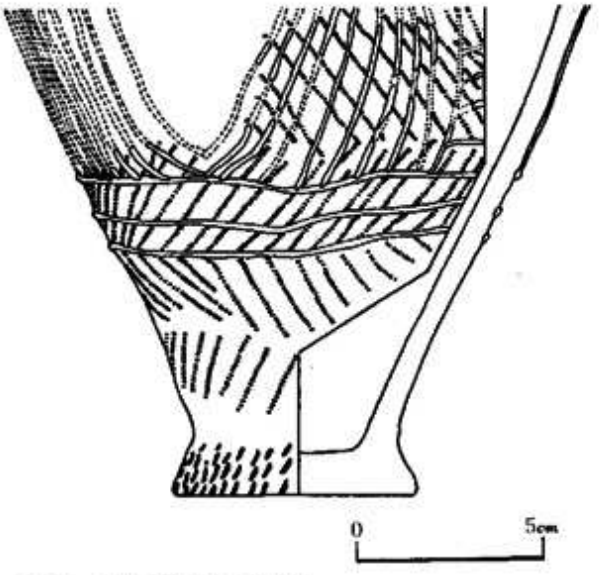
本遺跡から出土した土器は，大きく2つのグループに分けられる。この内，第Ⅰ群土器は，竪穴住居址および竪穴住居址状遺構を中心に半径10mにわたって多量に検出されたもので，縄文早期末の「東釧路Ⅲ式」，「タンネトウE式」，「中茶路式」などに対比される土器群で，前述の遺構内から出土した土器と同種のものである。第Ⅱ群土器は，いわゆる「トコロ第6類」といわれるもので，第Ⅰ群土器の出土範囲の外をとり囲むように散発的に発見されたものである。

第Ⅰ群（第19～21図，図版12B，13～15，16A）

この仲間は，文様構成の上から，更にA～Cの3つのグループに細分できる。

完形土器（第19図，図版16A）

口縁部が欠損している。現存部最大径16cm，底部径7.5cm，現存高13cmの比較的小形の深鉢形土器である。胴部から底部にかけてはゆったりと下り，底面近くになると外側にはり出すような形となる。地文として撚りの方向のちがう2種の原体を交互に施文した羽状縄文が器面全体につけられる。胴部上半には，細い粘土紐を数本貼付し複雑な文様を構成している。底部には，絡縄体を90°～180°回転させた短縄文が数mmおきに並列して施文される。器厚は，8mm内外，胎土に砂粒を若干含み色調は茶褐色を呈する。焼成は良好である。第Ⅰ群B類に属する。

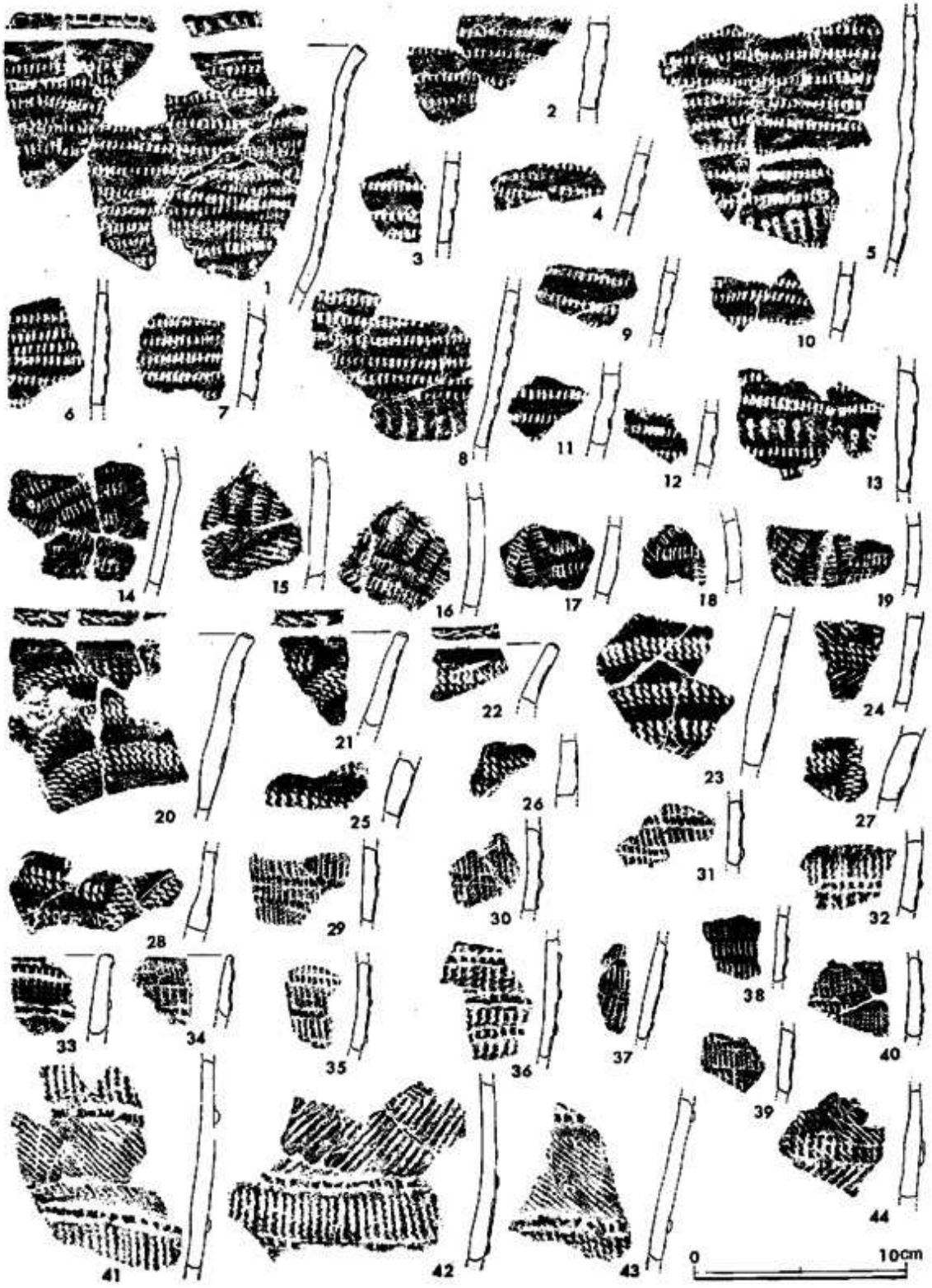


第19図　発掘区出土土器実測図

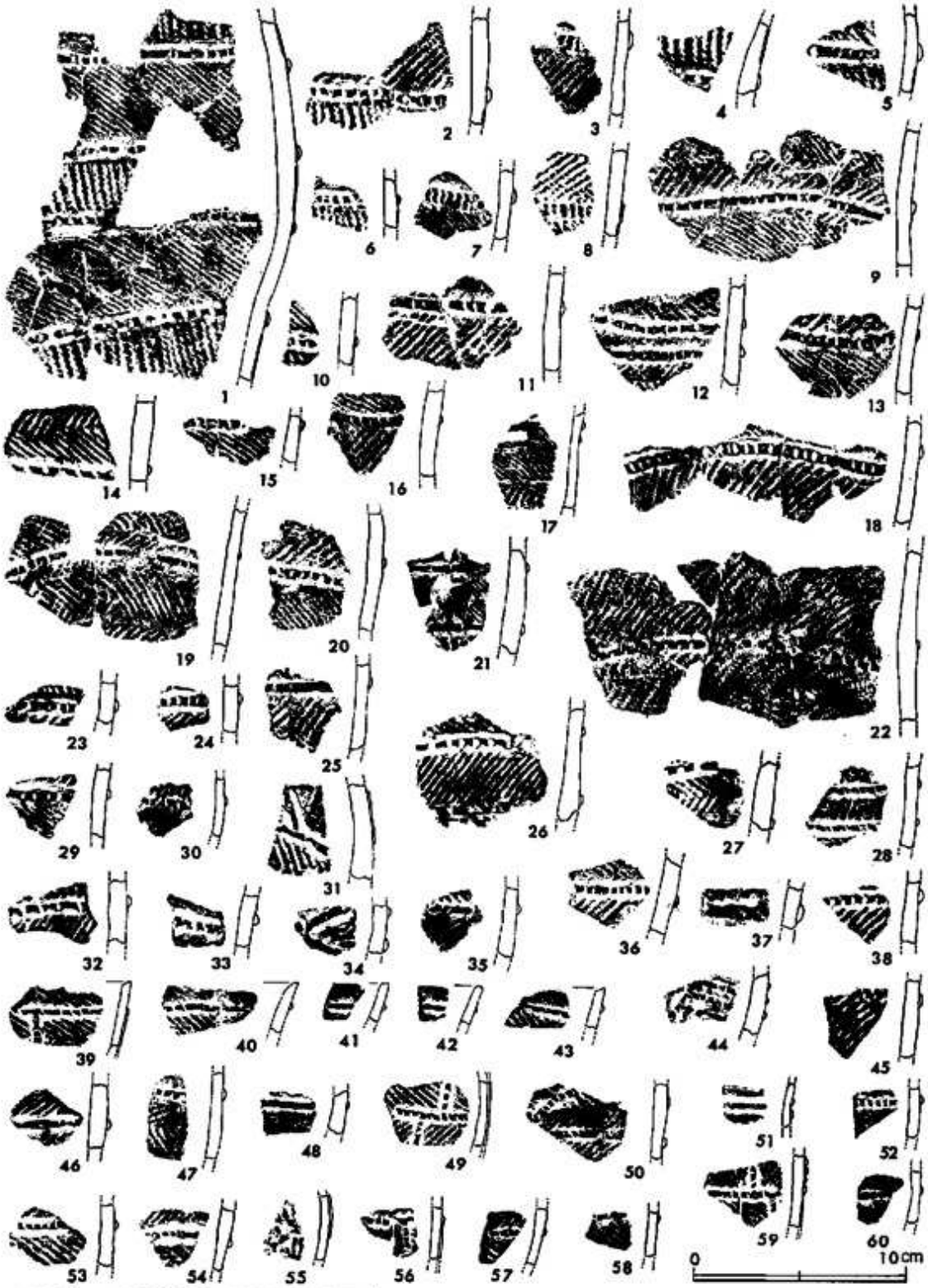
A　類（第20図，第21図1～8，10　図版12B，13A・B）

絡縄体が文様施文において，基本原体となるグループである。すなわち，絡縄体の押圧した例，絡縄体を90°～180°回転させた例，絡縄体を回転することにより縦位に並列した撚糸文を施文する例などがみられる。また，これらの絡縄体による文様とともに斜行縄文とか貼付紐などとが組み合わさって施文される例も非常に多く，この種の例も本類に入れた。

1～13は，絡縄体圧痕文が口唇上に一



第20図　S256遺跡発掘区出土土器拓影図(1)



第21図　S256遺跡発掘区出土土器拓影図(2)

段，口縁より胴部一帯にかけて十数段施文される。その下部には，単節斜行縄文の原体の端部を押圧する短縄圧痕文が2～3mm間隔に縦位に並列して施文され，その下位にさらに絡縄体圧痕文を施文する。文様帯を明確に区分しているといった文様構成がうかがえる。器形は，口縁が若干外反する深鉢形を呈すると考えられる。

14～19は，絡縄体圧痕文が数段縦横に施文され，その下部には単節斜行縄文が施文されている。

20～28は，口唇上には絡縄体を90°～180°回転させた短縄文を施文し，口縁より胴部にかけては，単節縄文の原体の端部を1～2mm間隔に縦位に並列して圧痕し，さらに絡縄体を90°～180°回転させ施文する短縄文がつけられ，これらによって弧を描くような文様を構成する。

29～35，37～40は，比較的細い粘土紐による貼付帯が横位に数段めぐっており，絡縄体を回転させ施文する撚糸文が器面全体をおおう。

36は，比較的細い粘土紐による貼付帯が横位に数段めぐっており，貼付帯間に絡縄体を，90°～180°回転あるいは数回転させた短い撚糸文を施文したものである。

41～43，第21図1，2，4～6，8，10は，絡縄体を数回転させ縦位に撚糸文を1～2mm間隔に並列させたものと，単節斜行縄文が，貼付帯によって区分されて交互に施文されるグループである。

第20図44，第21図3，7，8は，前記グループのものと同一個体であろうかとも考えられる破片であるが，比較的幅広の粘土帯による貼付がみられ，この貼付帯上に絡縄体を90°～180°回転させ短縄文を1～2mm間隔に縦位に並列して施文されている。地文は，単節斜行縄文である。

器厚は，5～10mm程であり，胎土には全て砂粒を若干含んでいる。色調は，茶褐色が主体をなし，炭化物が付着して黒褐色を呈するもの（第20図1，7，12，29，第21図1，4，5，10）もみられる。焼成は，比較的良い。

B　類（第21図9，11～60，第22図1～23，図版13B，14A・B）

粘土紐による貼付帯が主体をなすグループであり，単に横位に貼付帯が数段めぐるタイプ，貼付帯が縦横につけられ，これによって文様を構成するタイプ，貼付帯と列点文が組み合わされて出現するタイプの3種類がみられる。

9，11～30，32，33，35～38は，粘土紐による比較的太い貼付帯が横位に数段めぐっている。貼付帯上は，例外なく篦状工具によるきざみが1～3mm間隔に施文される。地文としては，単節斜行縄文，撚りの方向のちがう2種の原体を交互に施文する羽状縄文がみられる。

第21図39～49，51～60，第22図1～5は，比較的細い粘土紐による貼付帯が縦横につけられ，文様構成は方形を基本とする。貼付帯上には2～3mm間隔に篦状工具によるきざみを施文する比較的薄手の土器で，地文として撚りの方向のちがう2種の原体を交互に施文した羽状縄文がみられる。

第21図31，34，50は，比較的太い粘土紐による貼付帯が横位，斜行方向に組み合わされて施文される。貼付帯上には篦状工具によるきざみが2～3mm間隔につけられる。地文として単節斜行縄文，撚りの方向のちがう2種の原体を使用する羽状縄文が施文されている。

第22図6～10は，比較的太い貼付帯を有し，貼付帯が縦位につけられこれを中心として斜方向の

第22図　S256遺跡発掘区出土土器拓影図(3)

貼付帯が数本木の枝の様な形でつけられる。貼付帯上には，単節縄文の原体を押圧するきざみが2～3mm間隔に施文される。地文としては，撚りの方向のちがう2種の縄原体を交互に施文する羽状縄文がある。また背面には，横位に走る条痕文が見られる。

15～19は，比較的太い粘土紐による貼付帯が縦・横・斜につけられ貼付帯上に単節斜行縄文を施文する。地文としては，撚りの方向のちがう2種の縄原体を縦位，横位に交互に施文する羽状縄文がつけられている。貼付帯は，これら撚りの方向のちがう縄文の合わせ目に沿って貼付けられているようである。

1～14，20～23は，比較的太い粘土紐による貼付帯が縦横につけられる。地文として，撚りの方向のちがう2種の縄原体を使用し交互に文様を施文する羽状縄文がみられ，横位・縦位・斜位方向とアトランダムに施文される。羽状に施文される縄文の合わせ目に沿って2～5mm間隔に縄原体の先端部を刺突した列点文がつけられている。

器形はいずれも小破片のため明確ではないが口縁が若干外反し，底部に至って急にすぼまりをみせる深鉢形の土器と考えられる。またまれには，波状口縁を呈するものも存在しているようである。

器厚は0.5～1.0cm程度であり胎土に若干の砂粒を含んでいる。焼成は，良好である。色調は，茶褐色を呈するものが主体をなし，灰褐色を呈するもの（第21図17），黒褐色を呈するもの（第21図1～8，10），黄褐色を呈するもの（第22図12，19～21）などがみられる。

C　類（第22図24～41，第23図1～26，図版14B，15A・B）

粘土紐による貼付帯が全く無く，縄文原体の先端部を刺突した列点文，あるいは棒状の刺突具を使用した列点文が特徴的にみられるグループである。

第22図24～31，33～41，第23図7，8，10，12，16，18，21，23，25は，地文として撚りの方向のちがう2種の縄文原体を使用し，交互に施文する羽状縄文が主体をなしている。羽状縄文の縄文の合わせ目に沿って縄文原体の先端部を刺突した列点文がめぐる。

第23図1～6は，口唇上にきざみ，列点文などが施文されるものである。

第22図32，第23図17は，地文として撚りの方向のちがう2種の縄文原体を交互に施文した羽状縄文と，棒状刺突具による列点文が組み合わされたものである。

第23図13，19は，列点文はみられないが，結節羽状縄文を地文として施文するものである。

第23図9，14，20，22，24は，撚りの方向のちがう2種の縄文原体を交互に施文する羽状縄文が地文として施文されるものである。

第23図15，24，26は，単節斜行縄文が地文として施文されるものである。

器形は，全て小破片のため判然としないが口縁が若干外反し底部にてくびれを有する深鉢形の土器であろうと推定される。

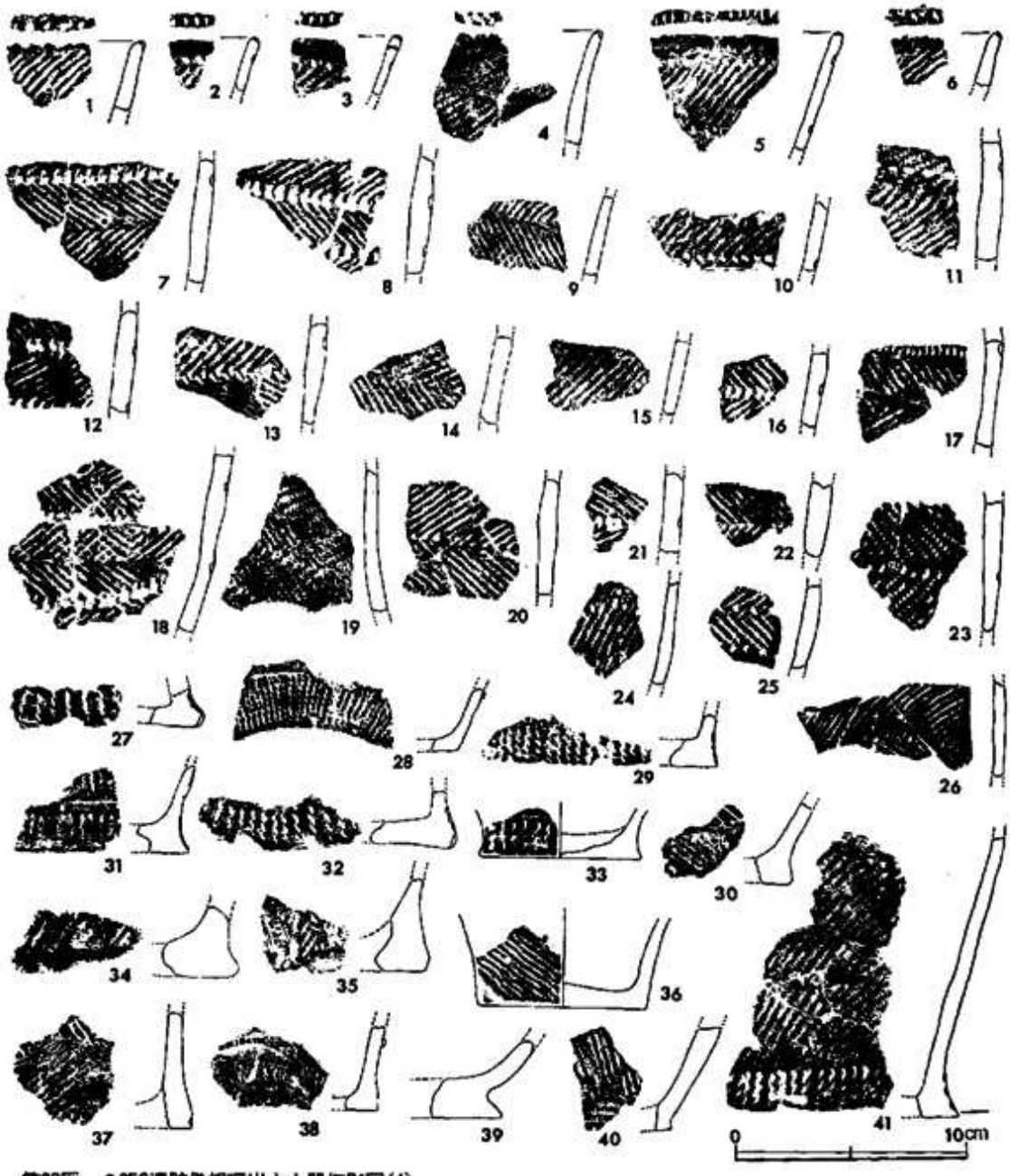
器厚は，0.5～1.0cm内外であり，胎土には全て若干の砂粒を含んでいる。焼成は比較的良好で，色調は，茶褐色をなすものが主体をなし，黒褐色を呈する例（第23図3），黄褐色を呈する例（第23図20，23，26）などがある。

底　　部（第23図27～41，図版15B）

ほとんどの物が底面近くにて急にくびれをみせ，底面が外側に張り出す形を呈する。

ただし，28，36は，くびれが無く，胴部よりすんなりと底面へと至っている。

27，29，32，33，41は，絡縄体を90°～180°回転させ施文する短縄文がくびれ部分に縦位に並列して施文されている。



第23図　S256遺跡発掘区出土土器拓影図(4)

30，34～38，40は，単節斜行縄文が地文として施文されている。

31は，絡縄体圧痕文が縦位を主に施文されるもので，39は，無文の例である。

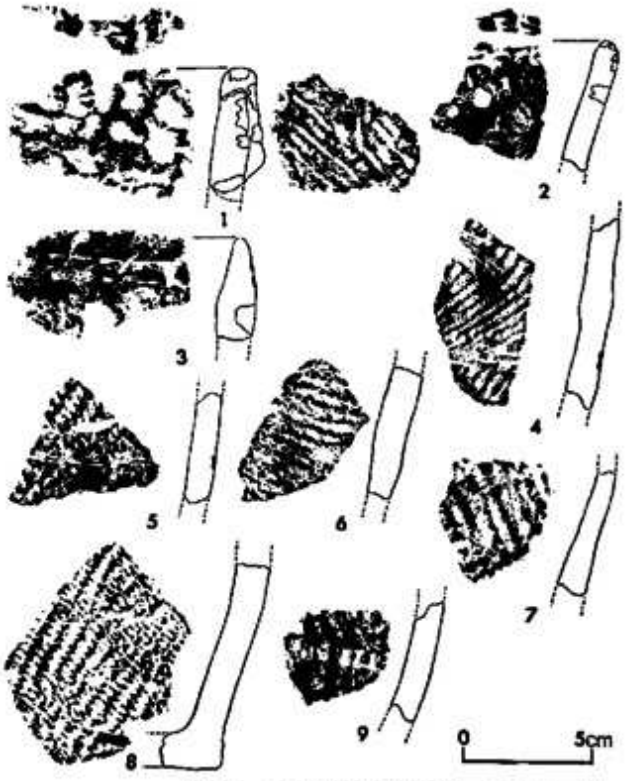
器厚は，6～12mm内外で，胎土に砂粒を若干含んでいる。焼成はほぼ良好であり，黄褐色を呈する例（31，33，34，36，37），茶褐色を呈する例が主体をなしている。

第Ⅰ群（第24図，図版16A）

肥厚帯があって，この下に円形刺突文が巡るものである。

1～3は，口縁部片である。1は，肥厚帯と小突起があり，肥厚帯上と口唇部上には平らな篦による連続刺突文がある。肥厚帯下には，円形刺突文があり，内面にも縄文がある。2は，肥厚帯はないが，口唇部上とその直下に半截竹管による連続刺突文があり，その下に中空の竹管状工具による円形の刺突文が巡る。3は，肥厚帯上に連続刺突文があり，この下に，大きめの円形刺突文がある。

4～7，9は，胴部片である。4は，アヤクリ文（第二種結節）の斜行縄文である。5，7は，単節斜行縄文の例である。6は，無節斜行縄文である。9は，平篦による連続刺突文が，横環する例である。



第24図　S256遺跡発掘区出土土器拓影図(5)

8は，底部片で，軽い張り出しがある。地文は単節斜行縄文である。

器厚は，1cm程で，胎土には微量の繊維を含んでいる。色調は，灰褐色である。

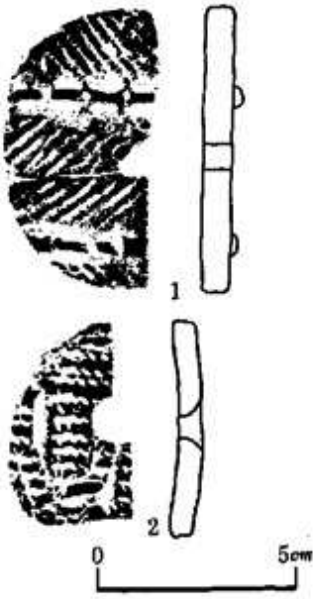
有孔土製円盤（第25図，図版16A）

1は，第1号竪穴住居址状遺構内より出土したものである。

土器の胴部破片を利用し，円形にニッチを打ち欠き整形し，中心に孔をあけたものである。右半分が欠損している。

土器は，比較的太い粘土紐による貼付帯が横位に数段めぐり，地文として撚りの方向のちがう2種の縄文原体を交互に回転した羽状縄文が施文される。貼付帯上には篦状工具によるきざみが3～

5mm 間隔につけられている。胎土には若干の砂粒を含んでおり，色調は黄褐色を呈し，焼成は比較的良好である。



第25図　有孔土製円盤拓影図

2は，発掘区のE—4区より出土したものである。1と同様に土器の胴部破片を利用している。土器は，細い粘土紐による貼付帯が縦横につけられ，絡縄体を回転させ施文する撚糸文が並列して2～3mm間隔でつけられている。胎土には若干の砂粒を含み，焼成は比較的良好である。色調は暗褐色を呈する。　（羽賀憲二）

第2節　石　　器（第26～29図，図版16B，17）

発掘区から出土した石器は，殆ど縄文早期末の土器の出土したグリッドから出土しているため，これらの土器と共伴すると考えても差しつかえないと思われる。

石器の器種は，いわゆる「石篦」，広義の「削器」，扁平石核，石皿，擦石類，敲石などである。

石　　篦（第26図1，2，4，5）

1は，a面全周とb面両側縁に加工を加えた石器である。a面の加工は，特に長軸両端は入念でdouble end scraper とも考えられる。

2は，横長の素材を使って，両面全周に粗い加工を加えた石器である。a面下部には，斜めに素材面が残り，ここが刃部であったかと思われる。上端は，尖頭部を形成し両面の加工は入念であるが，ここは柄部であったろうと思われる。

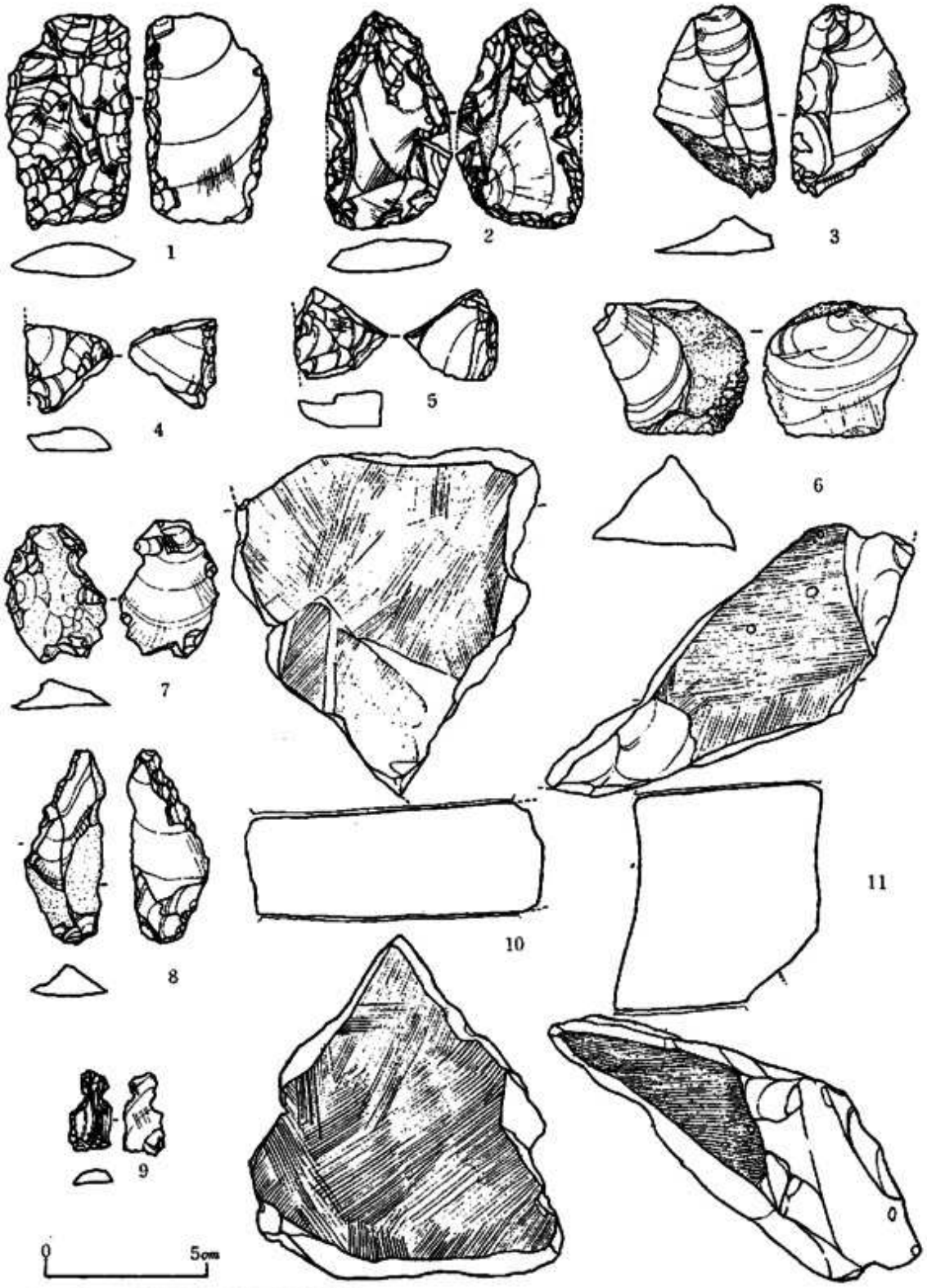
4，5は，1と類似の石篦の破片かと思われる。共に，a面全周に粗い加工を加え，b面側縁に沿って二次加工を加えている。

削　　器（第26図3，7～9）

すべて1つのタイプとしてまとまるものではない。

3は，やや幅広の縦長剥片を素材とし，b面左側辺に大きな剥離を入れている。石器の未成品の可能性もある。7は，a面に原石面を幅広く残す矩形剥片のa面側縁に二次加工を加えたものであるが，二次加工の剥離は新鮮で（パティナが新しく）新しい剥離である可能性もある。

8は，やや部厚い縦長剥片のa面左上部縁とb面右上部縁に二次加工を施こしたものであるが，この刃部に相当する所は鋸歯状で，果して削器として用いられたかどうかは不明である。なお，下部は，両面から厚味をとるための大きい剥離が入っている。9は，横長の小さな剥片を素材に，その全周に加工を加え，一部つまみと思われるものを作出したものである。石匙の如き形態をとるが，サイズは極端に小さくナイフとしての用途は，必ずしも考えられない。



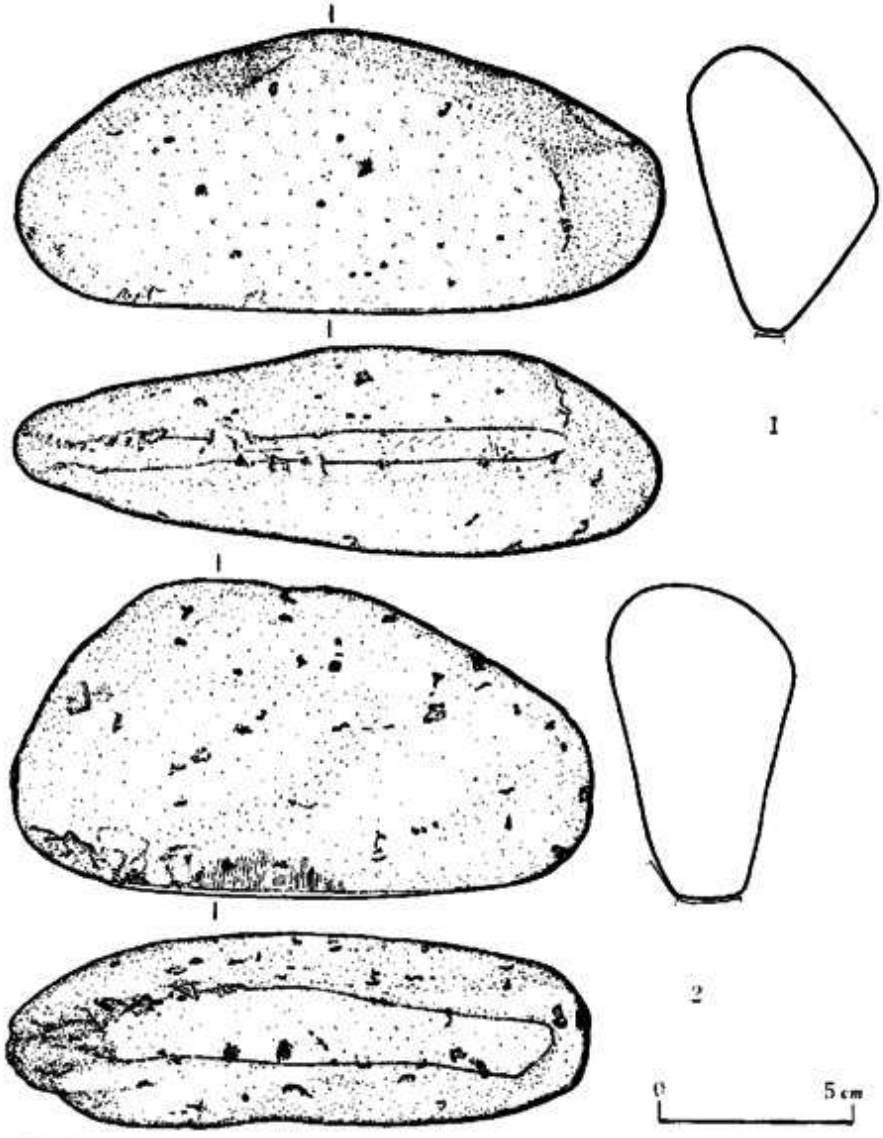
第26図　S256遺跡発掘区出土石器実測図

扁平石核（同図6）

6は，扁平石核と思われるもので，a面に大形の矩形剥片をとった跡がある。あとは幅広く原石面が残っている。

石　　皿（第26図10，11，第29図7）

10は，石皿の破片である。両面を擦面としているが，a面の方が，細かい擦痕を観察できる。厚さは3.3cmで，擦面は，ほぼ平坦である。11も同様である。厚さ6.7cmで，b面は軽く擦っただけの面で，本来の擦面は，a面であったと思われる。第29図7は，図示面のみ粗い擦痕が観察できる。

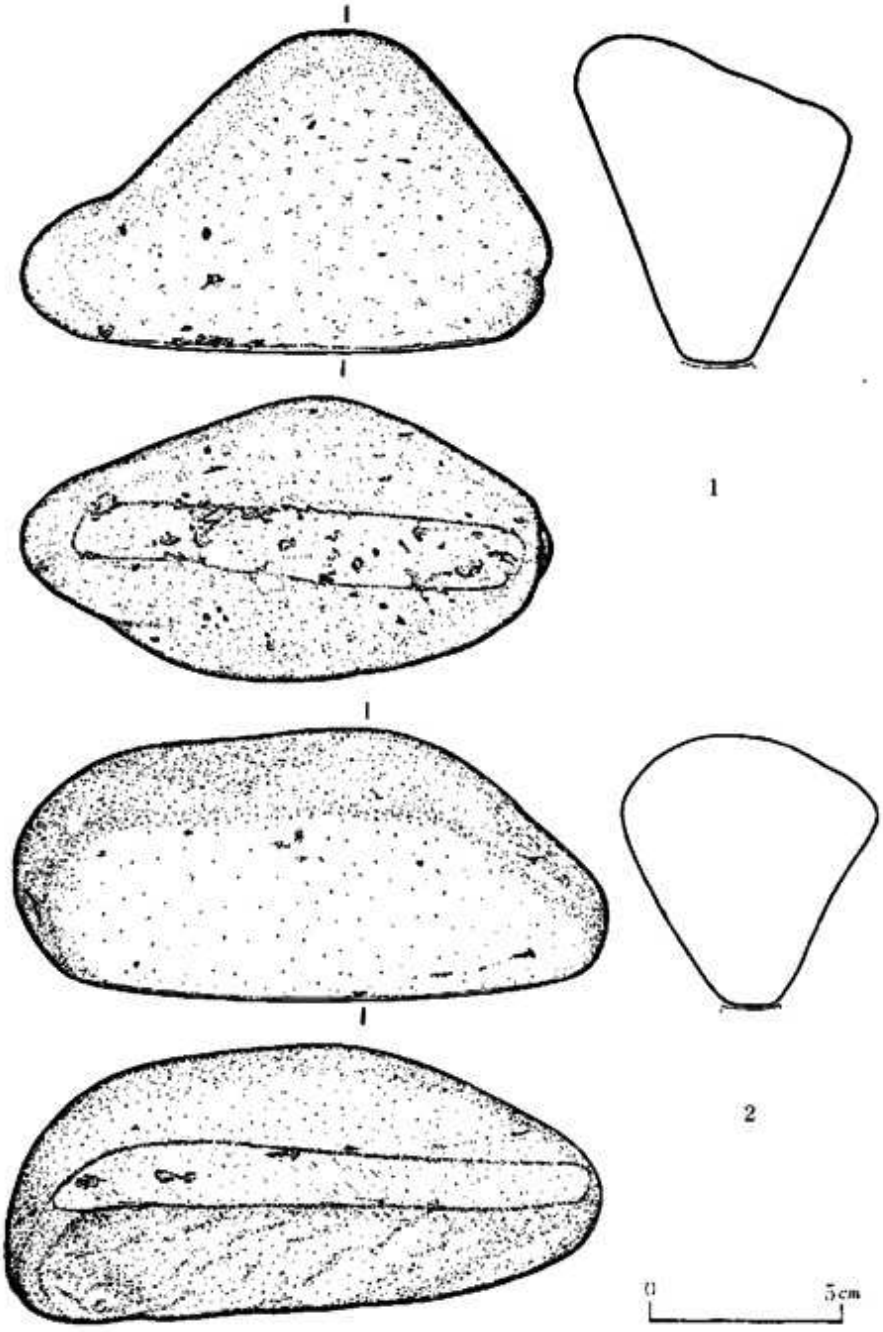


第27図　S256遺跡E—3区出土石器実測図(1)

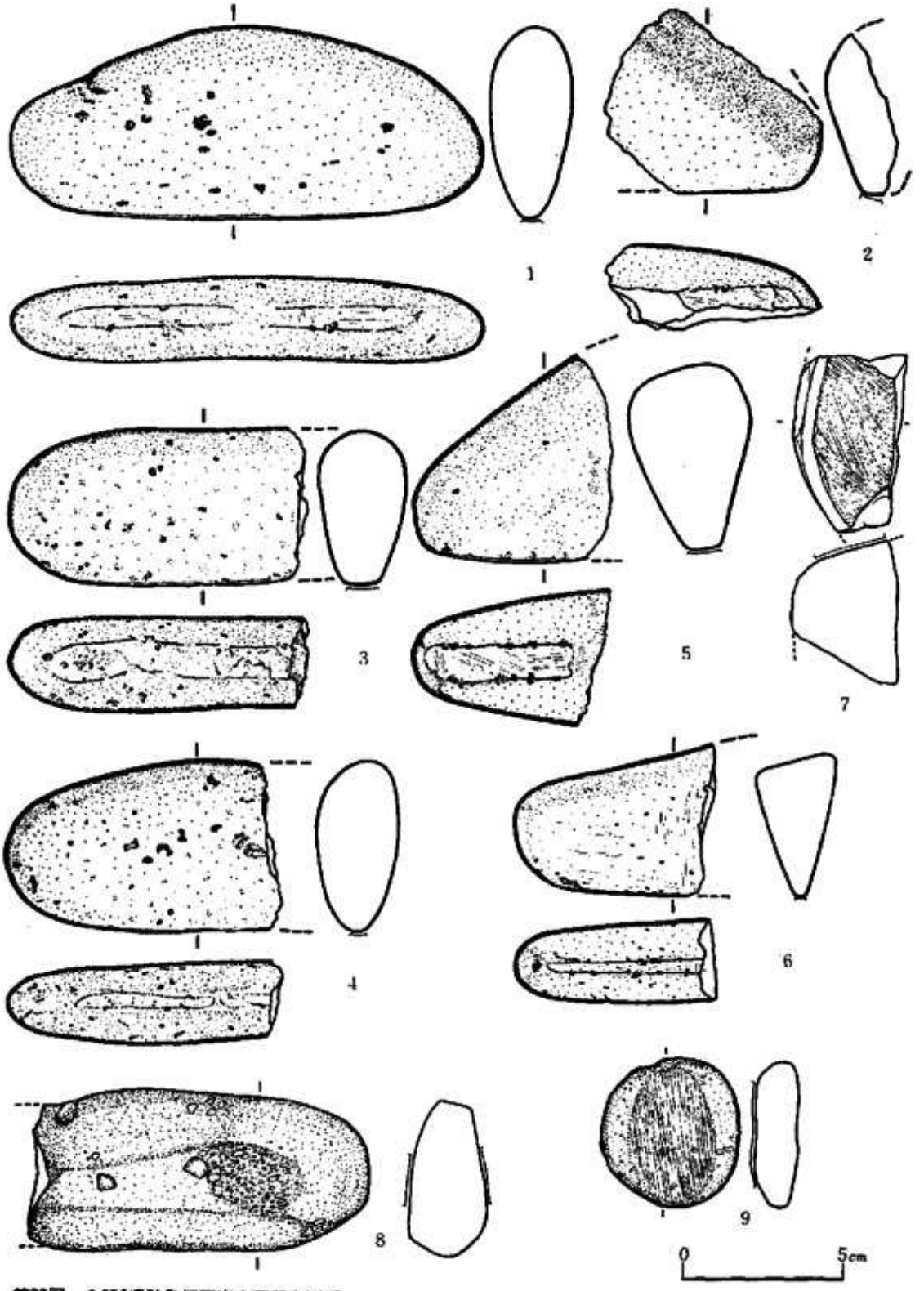
擦　　石（第27，28図，第29図1～6，9）

第29図9例を除いて，すべて断面三角形ないし楕円形の一稜を擦面とした石器である。

第27，28図の4点の石器は，第4図 point S からまとまって出土した例である。すべて完形品で，断面形は三角形である。第27図1は，擦面幅8～5mmで狭く，長さは12.8cmである。擦面の



第28図　S256遺跡E－3区出土石器実測図(2)



第29図　S256遺跡発掘区出土石器実測図

上の両面は滑らかであるが，擦痕は観察できない。擦痕の方向は長軸・短軸および斜めの方向である。同図2は，擦面幅1.9～1.3cmで，長さは11.4cmである。図示正面下部中央にも，一部擦痕がある。擦面の擦痕の方向は短軸および斜めである。第28図1は，擦面幅1.8～1.4cm，長さ11.4cmで，擦面以外は原石面である。擦痕の方向は，長軸および短軸方向である。同図2は，擦面幅1.6～1.0cm，長さ13.7cmで，他の三面も，同様に滑らかであるが，擦痕は観察されない。擦痕の方向は短軸および斜め方向である。

第29図2，3，5，6も，E—3区から出土した同様の擦石の破片である。断面形は，3を除いては，扁平な三角形である。2は，1/5程の破片で，擦面は幅0.7cm以上ある。擦痕の方向は，斜めである。3は，1/2程の破片で，断面形は楕円形である。擦面幅1.1～0.9cmで，擦痕は明瞭ではないが，斜め方向のが観察できる。5は，1/3程の破片で擦面幅は1.1～1.0cmである。方向は，長軸・短軸および斜め方向である。6も，1/3程の破片で，擦面幅は0.3cmで狭く，方向は斜めおよび短軸方向である。断面形は，楕円形により近い。4も断面形は，楕円形に近い例で，1/2程の破片である。擦面幅は，狭く0.4～0.3cmで，使用してまもない例で，擦面もまだ明確ではなく，方向も不明である。

同図9は，扁平な円礫の一面に軽い擦痕が観察される例である。

敲　　石（第29図8）

比較的扁平な棒状の河原石の両面に径1～1.5cm程の範囲で，敲打の跡があるものである。いわゆる「凹石」の初期段階の例ともみることもできる。

本遺跡の遺構内および発掘区から出土した石器は，すべて本遺跡の第Ⅰ群土器に共伴すると考えられる。

石器の器種には，両面加工のナイフ状石器，各種の削器，石篦，扁平石核？，各種の擦石，石皿，敲石（凹石）などがある。

削器は，定型的なものは少なく，あとは縦長ないし矩形剥片の一側に簡単な二次加工を加えただけの例である。第9図3は，剥片の全周に二次加工を施し尖頭部を作出したものであり，第25図9は，巨視的には「石匙」の仲間かとも見える。いわゆる「石篦」は，裏面の長軸側縁にそっても二次加工がある。扁平石核としたものは，一端にある楔状剥離を重視すればグレービング・トウール(graving tool)とみることも可能であろう。

擦石の主体を占めるものは，断面三角形の一稜を擦面とした石器である。得られる円礫（河原石）の関係で，断面が楕円形を呈する例もある。石皿としたものは，一部は機能的に砥石として用いられたものもあるかもしれない。両面に擦痕が観察される例もあるが，常に片面の方が細かい擦痕を有し，滑らかである。敲石としたものは，扁平な河原石の一部に径1～2cm程の範囲で，繰返しの敲打の跡がある例で，いわゆる「凹石」とみることもできる。

以上の中で，定型的な器種として一番多いのは，断面三角形の擦石であり，次いで石皿が多い。一方，不定形の削器を除いてはナイフ状石器，石篦などの剝片石器は，量としても少なく，器種にもバラエティがない。一見，不完全な組成を思わせる。

それでは，本遺跡における石器群組成が，北海道の縄文早～前期の石器群の中で，どのような位置を示すか簡単に比較してみたいと思う。対象は，土器群との共伴が比較的明確な資料を基に行なうが，個々の遺跡における石器群が，遺跡の性格，報告者の石器認定上の問題で，必ずしも完全な組成を示さない場合もあり，更に地理的な問題として土器群と石器群が，地域の枠を超えて同一のものであるという保証もないため，不備な点もあろう。しかし，ここでは細かな検証するいとまがないので単なる比較に留めたいと思う。

縄文早期の貝殻文を特徴とする尖底土器群では，石器組成が明確な資料は，函館市住吉町遺跡（児玉・大場1953）の1例のみである。ここからは，無茎・有茎・柳葉形の石鏃，無茎の石銛，石槍，錐，縦形・円形掻器，「石篦」，縦形「石匙」（つまみのあるナイフ），両面・片面・側縁調整の縦形削器（つまみのないナイフ），定角式および狭長の石斧，擦切石斧，断面三角形の擦石，石皿，円形の敲石，石錘などが出土している。この内，石鏃，石銛に関しては，素材面が表裏幅広く残る例が多い。いわゆる「石篦」は，縄文時代に特徴的な器種であるが，住吉町遺跡の場合は，側縁を調整しただけの例が多く裏面に調整があるのは，1例のみで少ない。

一方縄文早期の条痕文・沈線文などをもつ平底土器群のグループには，釧路市沼尻遺跡（沢・西1973），白老郡虎杖浜遺跡（大場・扇谷・竹田1962），釧路市緑ヶ岡ＳＴＶ遺跡（沢編1972），釧路市東釧路遺跡第Ⅰ地点（沢・橋本ほか1971）の例がある。

沼尻遺跡では，沼尻式土器と共に，長茎・無茎の石鏃，石銛，円形掻器？，縦形掻器ないしは「石篦」，両面・側縁調整の削器，グレービング・トゥール？，定角式石斧，石錘，砥石，敲石などが出土している。石鏃は，表裏に素材面を残す例が多い。長茎鏃は，一見石刃鏃を思わせる形態で，尖頭部の長さに対し，茎部が長い。石銛は有茎のもので，調整は粗い。これは，報告者は異なる時期のものであろうという。縦形掻器は，裏面側縁に沿って二次加工のあるもので，加工方法からいって小形の「石篦」である可能性もある。削器は，縦形ないし矩形の剝片を素材にしているが，この中で一端を斜めに加工している例がある。いわゆる「常呂型ナイフ」に類似する。グレービング・トゥールは，縦長の剝片の側縁に沿ってグレーバー・ファシットを両側に入れたもので，石刃鏃文化のそれに類似する。

虎杖浜遺跡では，竪穴住居址内から，虎杖浜式土器とともに，石槍ないし両面調整の削器（ナイフ）の破片，横長ないし矩形の剝片を素材にした削器，扁平石核ないしグレービング・トゥール，石錘，断面三角形の擦石，石皿，砥石，敲石などが出土している。器種量が少なく，完全な組成ではない。この内，扁平石核ないしグレービング・トゥールとしたものは，切断によって得られた打面と思われるものを上面に有し，一端にそこから狭長の剝離を入れている例である。

ＳＴＶ遺跡では，2軒の大楽毛式期頃の竪穴住居址がみつかっているが，この内Ｊ―2号住居址床面から無茎鏃，縦長ないし矩形剝片を素材にした削器，グレービング・トゥール，石錘，砥石，

敲石などがある。J—3号住居址床面からは，両面加工の石器の破片（石槍？），円形掻器，削器，石錘，砥石などが出土しており，覆土中から定角式の石斧が1点出土した。なお，グレービング・トゥールは，図示されていないが，黒曜石製で「左側縁部上面から打撃が加えられたもので右側縁部にかけて幅広いグレイバー・フアシットをもつ」と説明されている。

東釧路遺跡第Ⅰ地点の東釧路Ⅰ式土器と共伴した石器は，無茎石鏃，掻器，縦形削器，グレービング・トゥール，石錘，砥石などである。資料が少ないので組成は完全ではない。

一方，東釧路Ⅲ，Ⅳ式頃の時期になると目梨郡羅臼町ソスケ遺跡（沢・本田・西・大沼1971），網走郡女満別町中央B遺跡（大場・奥田1960），浦河郡浦河町西舎遺跡（黒崎・橋本ほか1972），夕張郡長沼町タンネトウ遺跡（野村1962），東釧路遺跡第Ⅰ地点（沢・橋本ほか1971）などの遺跡がある。

ソスケ遺跡の第Ⅳ層からは，東釧路Ⅲ式土器と共に，無茎鏃，有茎石鏃，石槍？，円形掻器，縦形削器などが出土している。女満別町中央B（本郷）遺跡のA竪穴内からは，やはり東釧路Ⅲ式土器に伴って，狭長鏃，両面・片面・側縁調整の縦形削器（ナイフ），石錘，砥石などが出土している。西舎遺跡では，住居址内から貼付文のある東釧路Ⅲ式頃の土器と共に，石鏃，縦形石匙，縦形削器などが出土しているがいずれも資料は極少である。

タンネトウ遺跡B発掘区の資料は，比較的まとまっている。ここからは，タンネトウE式と共に，狭長鏃，石槍，石錐，「石篦」，縦形石匙，グレービング・トゥール，擦切石斧，環頭石斧，砥石などが出土している。この内，狭長鏃は，「先端の折口にまでおよんで細部加工がなされている。つまり先端を意識的に加工している」としてサイド・ブレードであろうとされている。グレービング・トゥールは，「いずれも上から右下へ向って一打を加えた剝離面を有している」（P.69）と説明されている。また，東釧路遺跡第Ⅰ地点では，東釧路Ⅳ式土器に伴って，無茎・有茎鏃，有茎石鏃，円形掻器，削器，定角式石斧などが出土している。

あと伴出関係が明瞭ではないが，目梨郡羅臼町中谷遺跡（沢・本田・西・大沼1971）では，コッタロ式，中茶路式などの第Ⅲ群土器に断面三角形の擦石（手持石杵）が数多く共伴している。また，網走市網走湖底遺跡（米村・松下・安倍1967）では，無文土器と貼付文のある東釧路Ⅲ式頃の土器を出土しているが，掻器，削器，両面体石器，環頭石斧，石斧，石錘，砥石などと共にグレービング・トゥール，断面三角形の擦石の破片が出土している。この内，グレービング・トゥールは，虎杖浜遺跡出土例に類似している。

以上縄文早期の石器群をみたが，全体に資料的に少ないためか，各土器型式グループ内でも，かなりばらつきがあり，傾向性をつかむことが難しい。石鏃では，一般的に無茎鏃が多く，それに長茎鏃ないしは狭長鏃といわれる独特な石鏃を伴っている。これらの例は，石刃鏃と何らかの脈絡を感じさせる。石槍，石銛に関しては，明確な伴出例は少ないが，住吉町，STV遺跡J—3号住居址，ソスケ遺跡などで出土している。石錐も少ない。住吉町例とタンネトウ遺跡例だけである。円形掻器は，一般に多い。住吉町例そして条痕文・沈線文を有する平底土器群には，通有の石器器種であるらしい。東釧路Ⅲ式前後の時期には一般に稀薄であるが，ソスケ遺跡では多く出土している。「石篦」は，北海道例は掻器に近い形態を呈し器種認定が難しい面もあり，確実な例は住吉町例だけであ

る。沼尻，タンネトウ遺跡例も，巨視的にはこの仲間かもしれない。「石匙」といわれるつまみのあるナイフは，住吉町，タンネトウ遺跡などにはあるが，条痕文，沈線文を有する平底土器群には認められない。石斧に関しては，定角式の石斧が，数少ないながら認められ，住吉町，タンネトウ遺跡では擦切手法がある。石皿は住吉町，虎杖浜で発見されている以外顕著ではない。石錘は，住吉町遺跡および条痕文・沈線文を有する平底土器群に全例認められるが，東釧路Ⅲ式前後の時期では，女満別町中央B，網走湖底遺跡例だけである。断面三角形の擦石は，住吉町，中谷遺跡で数多く認められた外は，散発的である。虎杖浜，網走湖底遺跡で若干出土をみている。いわゆる「凹石」の出土例はない。グレービング・トゥールは，沼尻，虎杖浜，タンネトウ，網走湖底などで出土している。なお，タンネトウ，網走湖底遺跡では環頭石斧が出土をみている。

さて，縄文前期には，温根沼式，朱円式，多寄式などの押型文土器のグループと春日町式のグループ，そして静内中野式，加茂川式の土器グループがある。これらの土器群の石器組成をみてみると，まず押型文土器群では，根室市温根沼遺跡（児玉・大場1956），釧路市東釧路貝塚（河野・沢ほか1962），上別市多寄遺跡（佐藤・近堂1960）などがあり，その内，温根沼遺跡第1竪穴下層（第Ⅱ～Ⅲ層）および貝塚貝層からは，温根沼式土器と共に石錐，円形掻器，縦長削器，斧形石器（敲石）などが出土している。

東釧路貝塚では，第Ⅴ群土器と共に，数多くの剥片の側縁に簡単な二次加工を施しただけの無茎鏃，有茎鏃，有茎石銛，石槍，石錐，数多くの円形掻器，縦形石匙，両面・片面・側縁調整の削器，定角式石斧，石皿，石銛，「石冠」（擦石），砥石，礫器などが出土しており，器種も多く量も豊富である。

多寄遺跡では，多寄式土器と共に，有茎鏃，有茎石銛，石錐，円形掻器，縦形石匙，両面・片面・側縁調整の削器，定角式石斧，手斧，扁平石核などが出土している。

函館市春日町遺跡（児玉・大場1954）では，春日町式土器に，多数の無茎鏃，柳葉形鏃，石槍あるいは両面加工のナイフ（削器），石錐，「石篦」，縦形石匙，側縁調整の削器，定角式石斧，狭長石斧，打製石斧，断面三角形の擦石，凹石，石錘，敲石をともなう。

静内中野式土器のグループには，空知郡栗沢町加茂川遺跡（岩崎・宇田川・本田・河野1966），静内郡静内町中野遺跡（河野・藤原・藤本1954），伊達郡伊達町北黄金遺跡（名取・峰山1954）などがある。

加茂川遺跡では，加茂川式土器に，無茎鏃，有茎石銛，石槍，石錐，掻器，両面及び片面加工の縦形石匙，側縁調整の縦形削器，定角式石斧，狭長石斧，擦切石斧，打製の斧状石器，石錐，凹石，北海道式石冠（擦石），石皿様石器，敲石，砥石などを共伴している。

静内町中野遺跡B区からは，静内中野式土器に，無茎鏃，有茎石銛，円形掻器，縦形石匙，定角式磨製石斧，擦切石斧，石錘，北海道式石冠などを伴っている。

北黄金遺跡上坂台地尖底貝塚では，静内中野式土器に，有茎鏃，無茎石銛，縦形石匙，側縁調整の削器，定角式石斧，石鋸，北海道式石冠，石錘，砥石などが出土している。

以上の縄文前期の石器群には，早期に比べて，かなりまとまりがある。石鏃においては，各型式

を通じて無茎鏃が一般的で，有茎鏃をともなうのは北黄金遺跡上坂台地例を除いて押型文土器グループだけである。有茎・無茎の石銛，縦形石匙も，各型式を通してある。円形掻器は，押型文土器には一般的で，その他では静内中野遺跡で出土しているのみである。石篦は，春日町遺跡で認められただけである。定角式の石斧は，全型式伴出する。擦切石斧は，東釧路貝塚，静内中野式のグループにあり，石鋸は，東釧路貝塚，上坂台地にある。凹石は，春日町，加茂川遺跡などに認められる。縄文早期に認められたグレーピング・トゥールは，前期にはない。

以上みて判断されるように，本遺跡例と同様な組成を示す例は，東釧路Ⅲ式前後の時期にもなく，他の型式グループのものとも異なっている。ただ，本遺跡で，最も多く出土した断面三角形の擦石は，中谷遺跡，網走湖底遺跡で出土をみており，扁平石核ないしグレーピング・トゥールとした器種は，虎杖浜，網走湖底遺跡で出土している。

本遺跡の石器群組成のきわだった特徴は，石鏃をはじめとする尖頭器類が全くないこと，石斧，石鋸などがないことである。さらに付言すれば，石斧を除いた大形器種の石器は比較的豊富であるが，剥片石器は器種においても，量においても極めて少ない。この事実は，他の遺跡との比較を通じても，きわだった差異として浮び上っくる。このことが，本遺跡の性格――特に，セットルメント・パターンの一端を示すものか，あるいは内陸に立地するという地理的特殊性に由来するのかは今後の課題である。

なお，北海道の縄文時代早・前期の石器群組成の問題は，特に「石刃鏃文化」との関連で問題になってくるし，また東北地方との比較考察も当然必要である。さらに，個々の器種に関しても詳細に検討すれば多くの問題が提示されるのは明白であるが，これら残された課題は将来責を果したいと思う。

（上野　秀一）

第4表　S256遺構出土石器一覧表

図版番号	出土地区	名称	全長	最大幅	最大厚	重量	石質	備考
			mm	mm	mm	g		
9— 1	第1号竪穴	擦石	(140)	58	73	650	Py.-an.	S-1
2	〃	〃	118	40	30	250	Ho.-an.	S-2
3	〃	削器	33	15	5	2.0	She.	尖頭部作出
4	〃	両面体石器の破片	26	16	5	1.4	Obs.	
5	〃	削器	41	21	3	2.8	She.	
6	〃	〃	42	22	9	6.9	Che.	
7	〃	両面体石器の破片	18	34	5	2.1	Obs.	
8	〃	〃	32	17	3	1.5	Obs.	9と接合
9	〃	〃	36	27	6	3.6	Obs.	
10	〃	扁平石核？	(19)	(25)	8	3.3	Obs.	
11	〃	矩形剝片	35	28	5	4.1	She.	
12	〃	縦長剝片	43	19	4	3.0	She.	
13	〃	〃	38	21	9	6.0	Che.	
14	〃	矩形剝片	28	28	6	5.2	She.	
15	〃	〃	30	22	3	2.0	Obs.	
16	〃	〃	25	16	3	1.3	Obs.	
17	〃	〃	27	22	3	1.7	She.	
18	〃	扇状剝片	22	25	5	2.5	Obs.	
19	〃	〃	20	25	3	0.9	Obs.	
20	〃	〃	20	24	5	1.3	Obs.	
21	〃	〃	26	22	2	1.3	Obs.	
16— 1	第2号竪穴状遺構	擦石	(107)	51	77	600	Py.-an.	S-7 破片(註)
2	〃	〃	(55)	59	79	350	Py.-an.	S-4 〃
3	〃	〃	(71)	35	41	150	Py.-an.	S-2 〃
4	〃	〃	(59)	57	74	350	Py.-an.	S-8 〃
5	〃	凹石	162	63	41	600	Py.-an.	S-6
6	〃	石皿	(81)	(57)	57	360	Py.-an.	S-5 破片
7	〃	ナイフ状石器	53	24	8	9.0	Obs.	S-1
17— 1	〃	石皿	254	182	63	2,350	We.-tu.	S-3

(註) この石器は，3片に割れて出土したが，内1片は，第1号竪穴住居址状遺構から出土している。

第5表　発掘区出土石器一覧表

図版番号	出土地区	名称	全長	最大幅	最大厚	重量	石質	備考
			mm	mm	mm	g		
25—1	D—4	石篦	66	41	11	35.7	She.	
2	D—4?	〃	68	38	11	31.3	Obs.	
3	D—1	削器?	59	36	13	21.3	Obs.	
4	D—2	石篦	(27)	(27)	8	5.6	She.	破片
5	E—2	〃	(28)	(29)	12	9.4	She.	〃
6	E—2	扁平石核	41	45	28	42.1	She.	
7	表採	削器?	43	31	10	10.9	Obs.	
8	D—2	〃	60	24	13	12.8	Obs.	
9	D—12?	〃	25	13	4	1.2	Obs.	つまみあり
10	D—4	石皿	(109)	(100)	33	500	Py.-an.	
11	D—2	〃	(135)	(44)	65	460	Py.-an.	
26—1	E—3	擦石	165	53	72	700	Ho.-an.	
2	E—3	〃	148	49	81	800	Ho.-an.	
27—1	E—3	〃	135	74	83	800	Ho.-an.	
2	E—3	〃	152	66	70	850	Sa.	
28—1	D—4	〃	146	25	61	340	Py.-an.	破片
2	E—3	〃	(68)	(19)	(57)	90	Sa.	〃
3	E—3	〃	(93)	29	49	210	Py.-an.	〃
4	D—2	〃	(86)	25	53	190	Py.-an.	〃
5	E—3	〃	(62)	38	69	190	Py.-an.	〃
6	E—3	〃	(62)	25	45	100	Py.-an.	〃
7	A—3	石皿	(55)	(34)	(48)	110	Py.-an.	〃
8	D—4	凹石	(106)	50	31	250	Py.-an.	〃
9	D—4	擦石?	43	47	14	40	Py.-an.	

〔石質略号〕

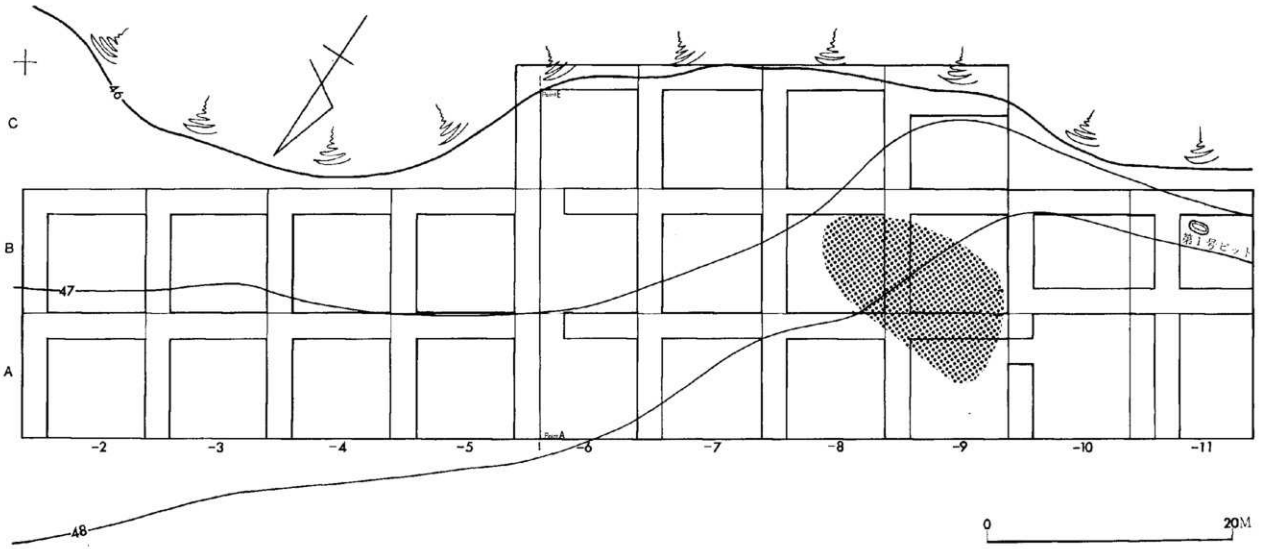
Che. (Chert)：硅岩，Ho.-an. (Hornblende Andesite)：角閃石安山岩，Py.-an. (Two Pyroxene Andesite)：複輝石安山岩，Obs. (Obsidian)：黒曜石，Sa. (Sand Stone)：砂岩，She. (Hard Shell)：硬質頁岩，We.-tu. (Welded Tuff)：熔結凝灰岩

□ 引用・参考文献

明石　博志　1971『平和遺跡』（単）
麻生　　優　1965「住居と集落」『日本の考古学』Ⅱ所収
五十嵐八枝子・熊野　純男　1973「湧別市川遺跡周辺における沖積世の古気候変遷」『湧別市川遺跡』所収
五十嵐八枝子・熊野　純男　1974「札幌市北方低地帯における沖積世の古気候変遷」『第四紀研究』13―2所収
山田　悟郎　1974「石狩町紅葉山遺跡の花粉分析」『紅葉山43号遺跡』所収
石附喜三男　1975「線文式文化における農耕作物」『古代学研究』74所収
石橋　次雄・木村　方一・後藤　秀彦　1974『十勝太若月――第二次発掘調査――』（単）
岩崎　隆人・宇田川　洋・本田　栄作・河野　本道　1966『加茂川遺跡』栗沢町教育委員会
宇田川竜男　1965『ネズミ』中公新書82
大場　利夫・武内　収太ほか　1955『函館市梁川町遺跡』市立函館博物館
大場　利夫・石川　　徹　1956『手稲遺跡』（単）
大場　利夫・奥田　　寛　1960『女満別遺跡』（単）
大場　利夫・石川　　徹　1961『浜益遺跡』（単）
大場　利夫・扇谷　昌康・竹田　輝雄　1962「白老郡虎杖浜遺跡の発掘について」『北方文化研究報告』17所収
大場　利夫・明石　博志　1968『平和遺跡』（第1集）（単）
大場　利夫・因幡　勝雄　1971「オムサロ第76号竪穴―縄文早期の竪穴―」『もうべっと』所収
加藤　晋平　1969『釧路市大楽毛第4地点の発掘調査―昭和41年―』釧路市教育委員会
加藤　　稔　1972「住居と集落の変遷」『岡山』所収
北川　芳男・中村　　斎・矢野　牧夫ほか　1974「野幌丘陵周辺の第四紀に関する諸問題」『北海道開拓記念館研究年報』3所収
黒崎　康雄・橋本　　晋・中田　幹雄・高橋　正勝　1972『西合遺跡』（単）
河野　広道　1959「北海道出土の大形U字形鉄器について」『北海道学芸大学考古学研究会連絡紙』19所収
河野　広道・沢　　四郎ほか　1962『東釧路』釧路市教育委員会
河野　広道・藤原　敏郎・藤本　英夫　1954『静内町先史時代遺跡調査報告』静内町々史資料1
児玉作左衛門・大場　利夫　1953「函館市住吉町遺跡」『北方文化研究報告』8所収
児玉作左衛門・大場　利夫　1954「函館市春日町出土の遺物について」『北方文化研究報告』9所収
児玉作左衛門・大場　利夫　1955「網走市大曲洞窟出土の遺物について」『北方文化研究報告』10所収
児玉作左衛門・大場　利夫　1956「根室国温根沼遺跡の発掘について」『北方文化研究報告』11所収
児玉作左衛門・大場　利夫・武内　収太　1958『サイベ沢遺跡』函館市立博物館
児玉作左衛門・大場　利夫　1959「天塩国幾富遺跡の発掘について」『北方文化研究報告』14所収
駒井　和愛編　1963, 1964『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』（上），（下）東大文学部
小山内　熙・杉本　良也・北川　芳男　1956『5万分の1地質図幅―札幌―』北海道地下資源調査所
佐藤　忠雄・近堂　祐弘　1960『名寄』士別市教育委員会
佐藤　忠雄・其田　良雄　1965「先住民族の足跡」『佐呂間町史』所収
沢　　四郎　1968『釧路市東釧路遺跡発掘調査概報（昭和42年度）』釧路市教育委員会
沢　　四郎・西　　幸隆・山崎　　哲・山本　文男・松田　　猛　1971「東釧路遺跡第1地点（東釧路貝塚）の発掘―昭和45年―」『釧路市立博物館々報』209所収
沢　　四郎・橋本　正雄・山崎　　哲・山本　文男・松田　　猛　1971「東釧路遺跡第1地点（東釧路貝塚）の

発掘―昭和46年―」『釧路市立郷土博物館々報』2所収
沢　四郎・本田　克代・宇田川　洋・大沼　忠春ほか　1971「ソスケ遺跡，中谷遺跡」『羅臼』所収
沢　四郎・西　幸隆　1973「北海道釧路市沼尻遺跡の出土遺物について」『釧路市立郷土博物館紀要』2所収
沢　四郎・西　幸隆編　1974『釧路市貝塚町1丁目遺跡調査報告―第4次調査―』（単）
沢　四郎編　1972「釧路市緑ヶ岡ＳＴＶ遺跡発掘調査報告―第1次調査，第2次調査―」『釧路市立郷土博物館紀要』1所収
竹田　輝雄・関井　保子・高橋　悦郎ほか　1962『茶津洞窟遺跡』小樽市博物館紀要1
東京大学文学部考古学研究室編　1972『常呂』（単）
名取　武光・峰山　巌　1954『伊達町北黄金遺跡発掘報告』（単）
野村　崇　1962「先史時代」『長沼町の歴史』（下）所収
藤本　英夫　1970「北海道静内町字真歌トビノ台遺跡」『日本考古学年報』18所収
北海道教育庁社会教育課編　1969『北海道の文化財』北海道文化財シリーズ11（総合編）
松下　亘ほか　1967「美々貝塚」『千歳遺跡』所収
松山　利夫　1972「トチノミとドングリ―堅果類の加工方法に関する事例研究―」『季刊人類学』3―2所収
湊　正雄・井尻　正二　1966『日本列島（第二版）』岩波新書
湊　正雄　1970「最近の地質時代における北海道の古地理的変遷（北海道のおいたち）」『新しい道史』8―3（39）所収
峰山　巌　1959『ヌッチ川遺跡』郷土研究1
安田　喜憲　1974「日本列島における晩氷期以降の植生変遷と人類の居住」『第四紀研究』13―3所収
八幡　一郎・増田　精一・岩崎　卓也　1966「西月ケ丘遺跡」『北海道根室の先史遺跡』所収
吉崎　昌一　1965「縄文文化の発展と地域性―北海道―」『日本の考古学』Ⅱ所収
四手井晴子　1960「北海道観音洞窟発掘報告」『先史学研究』2所収
米村　哲英・松下　亘・安部　三郎　1967『網走湖底遺跡』網走市立郷土博物館報告2
渡辺　誠　1972「縄文時代における植物質食料採集活動の研究」『古代文化』24―5～6所収
渡辺　誠　1973「縄文時代のドングリ」『古代文化』25―4所収

Ⅲ　S257遺跡



第30図　S257遺跡発掘区配置図および遺構位置図（1：200）

Ⅲ　S257遺　跡

本遺跡からは，性格不明の小ピット１個と縄文時代晩期最終末～続縄文時代初頭頃の土器および石器が出土している（第30～33図，図版19，20）。

第1章　遺　　構

第１号ピット（第31図，図版19B）

長径1.5m，短径1.0m，深さ40cmを数する。

南西部壁は，ゆるやかに傾斜して底部へと至り，北東部壁は，直立に近くなる。壁はかたく，しっかりしている。底面は，中央に若干の高まりをみせる他は平坦でありかたくしまっている。

埋没状況を層序にて見ると

第Ⅰ層：暗褐色土

第Ⅱ層：暗茶褐色土

第Ⅲ層：黄褐色土

第Ⅳ層：褐色土

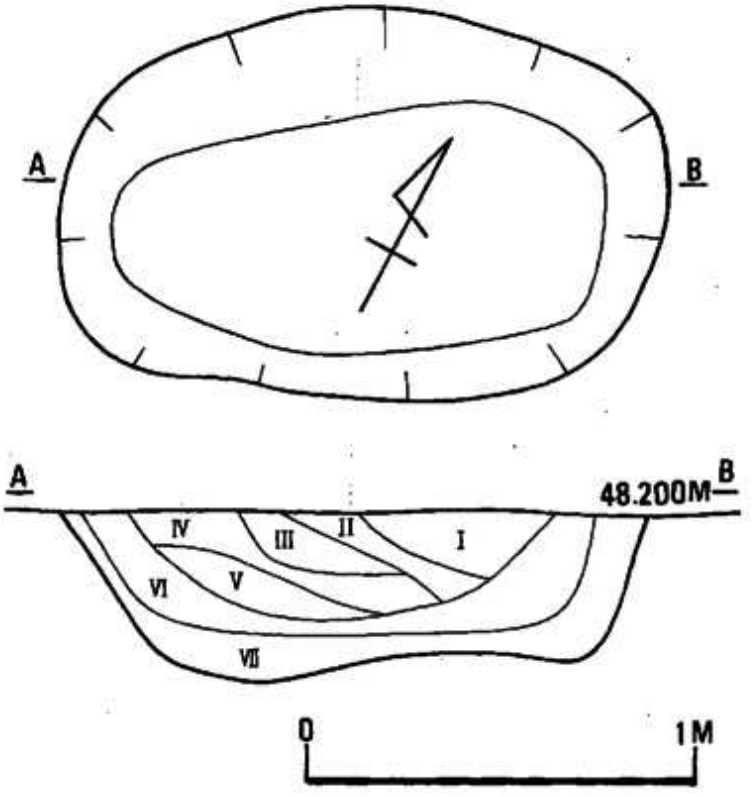
第Ⅴ層：Ⅲ層に良く似た層

第Ⅵ層：黒褐色土

第Ⅶ層：漸移層（黄褐色火山灰質土層）

土器・石器などの遺物は全く出土しておらず本ピットが遺構であるとする根拠に乏しいが，壁・床の状態がかなりしっかりしているところから，人為的に掘られた可能性が高い。

（羽賀　憲二）



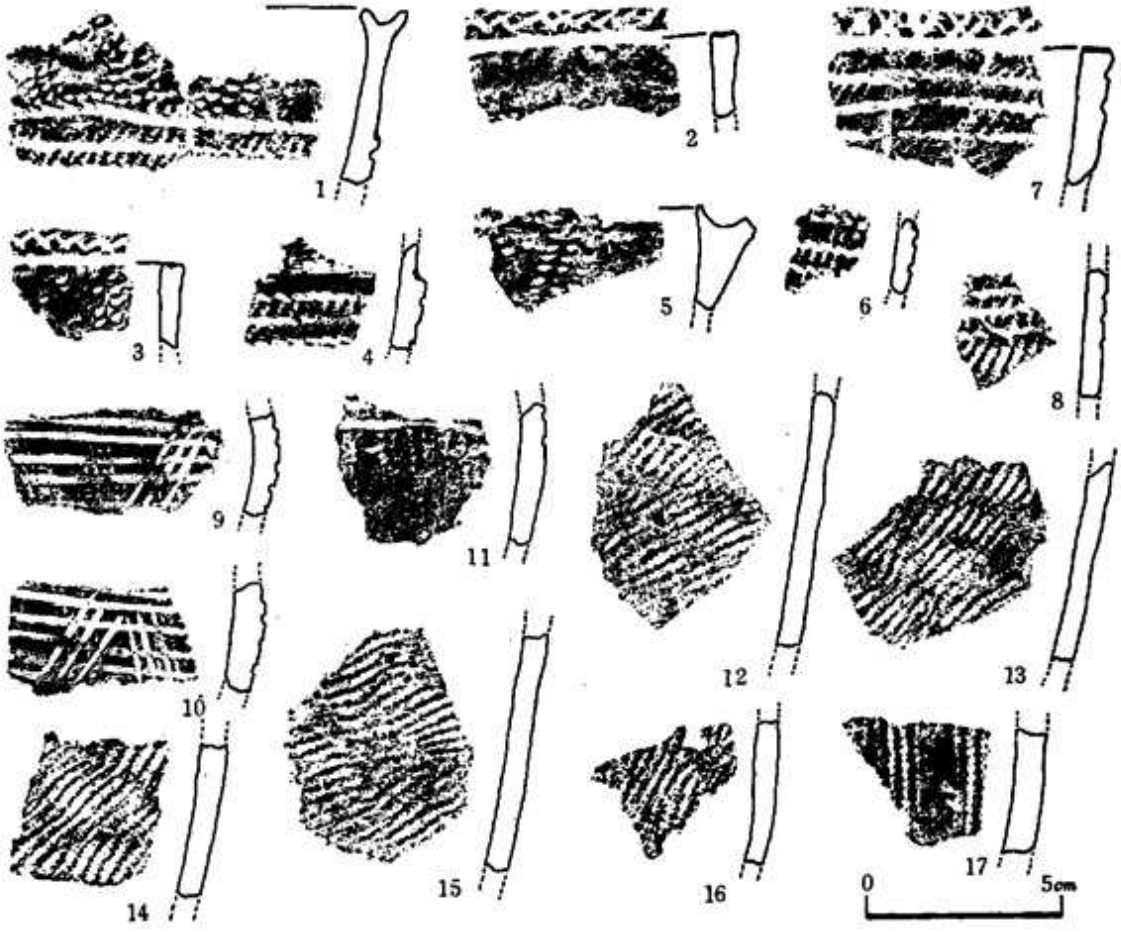
第31図　S257遺跡第１号ピット実測図

第2章　発掘区出土遺物（第32，33図）

S257遺跡では，A-(一)9区を中心に，B-(一)8，B-(一)9区の狭い範囲から遺物を検出している（第29図斜線部分）。出土量は，表採を含めて土器53片，石器2点で全体に僅少である。

土　　器（第32図，図版20A）

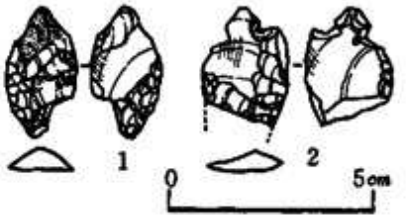
1～11は，口縁部の破片である。1～3，5は，口唇部の下2cm程の所に肥厚部があって，段を形成し，この上は地文はない。1および5ではここに丸棒状工具の先端を連続刺突した文様が，2～3本単位で曲線状に施され，1，4，6，8においては，肥厚部直上に横位に同様な連続刺突文が観察される。1と5には，突起がある。大きく肥厚させ，中央部はへこんでいる。いずれも，口唇部は平らで，丸棒状工具の先端部による刺突ないしは，側面を押圧した文様がある。肥厚帯より下には地文が施さ



第32図　S257遺跡発掘区出土土器拓影図

れており，ここに，横位に3本程の撚糸圧痕文がある。

7は，肥厚部および段はなく，口唇部下に撚糸圧痕文が3本横走する。ここには地文はない。口唇部は平らで，この上に平らな角のある篦のような工具で「X」字状に，交互に方向をかえた刺突文がある。



第33図　S257遺跡発掘区出土石器実測図

9～11は，いずれも口唇部を欠損するが，地文の上に，丸棒状工具による沈線文が施されたものである。9，10でみる限り，モチーフは，連続横走沈線文と右下りおよび左下りの2種類の方向の斜め沈線文が交叉している。器形はやや内湾する。

12～17は，胴部片である。12～16は，いずれも左下りの節の細かい単節斜行縄文である。17は，帯縄文である。

9～11および17例を除いては，全体に破片の曲面率が低く平坦で，器形はかなり大形か，ないしは円筒形以外の器形である可能性もあろう。

器厚4mm程で，焼成はよく，内面は横に整形している。色調は，灰褐色を基調とする。

これらの土器は，大きくいわゆる「大狩部式」に近い位置を求められるもので，夕張郡由仁町東三川遺跡のⅠ式（野村1969），幌泉町東歌別遺跡（扇谷1963），新冠郡新冠町緑丘遺跡（藤本・愛下1963）の資料などに近い。特に，口唇部の刻目は，東三川Ⅰ式のグループのそれと類似している。

石　　器（第33図，図版20B上段）

1は，表採品で，全長32mm，最大幅17mm，最大厚5.5mm，重量2.7gの有茎石鏃である。縦長剥片を素材に半両面加工している。先端部には原石面が幅広く残り，未成品の可能性もある。逆刺は不明瞭で，茎部作出も顕著ではない。

2は，A-(一)9区の耕作土中から出土したもので，現存長29mm，最大幅21mm，最大厚5mmの縦形石匙である。先端部を欠損する。素材は横長剥片で，つまみは，両側から大きな2回の剥離で作出されている。a面とb面右側縁に加工がある。なお，この種の裏（b）面加工は，縄文時代末期～続縄文時代に特徴的にみとめられるものである。

石質は，いずれも黒曜石である。　　（羽賀　憲二）

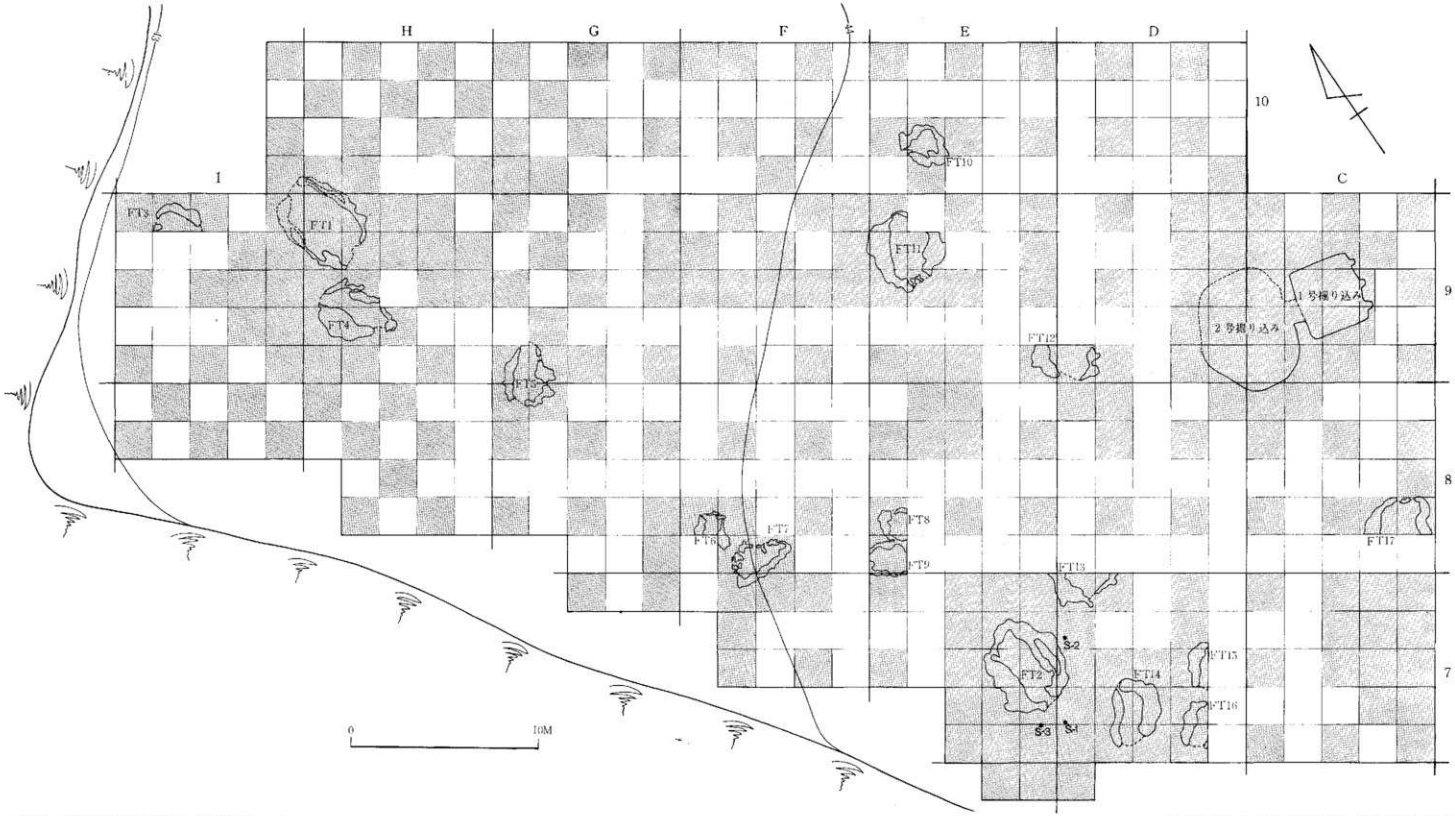
□ 引用・参考文献

羽谷昌康　1963「幌泉町東歌別遺跡調査概報」『北海道の文化』特集号所収

野村　崇　1969「山仁町東三川遺跡」『北海道山仁町の先史時代』所収

藤本英夫・愛下　淳　1963「新冠郡新冠町字緑丘の墳墓遺跡について」『北海道の文化』特集号所収

Ⅳ　S 253 遺 跡



第34図　S253遺跡発掘区配置図および遺構関連図

〔注〕ＦＴとはいわゆる風倒木痕を指す。●印は石器出土地点

Ⅳ　S253遺　跡

第1章　遺構および出土遺物

第1節　遺　　構（第34図，図版22B）

C～D—9区の耕作土中から陶磁器の破片やガラス片，腐蝕した鉄片などが次々と見出され，その範囲は10×8mにも及んだ。そこで一帯の耕作土を黄褐色火山灰層（月寒火山灰層〔Tk〕）の上面まで一様にとり除いたところ，さらに〔Tk〕に掘り込まれた，平面形の四角なものと丸いものとの2つの大きな掘り込みが連らなって存在することが判明した。とりあえず四角い方を1号掘り込み，丸い方を2号掘り込みと呼ぶことにし，初めに両者の覆土の堆積状況を説明する。基盤の〔Tk〕の上面20～30cmは，いわゆる漸移層の黄褐色火山灰質土であるが，セクション図では区別していない。

第Ⅰ層：黄褐色火山灰〔Tk〕と茶褐色土とが混りあった層。耕作土ほど両者の混合は徹底していない。

第Ⅱ層：茶褐色土に木炭の小片，細粒がたくさん混入して黒褐色を呈する層。

第Ⅲ層：パサパサした黒褐色土で，耕作土と異なり黄褐色火山灰〔Tk〕を混入しない。木炭の細片が数多く点在するが，Ⅱ層ほど木炭の細粒が充満してはいない。

第Ⅳ層：微細な粒子の白桃色の灰。

第Ⅴ層：木炭の細片，粒を主体に黒褐色土が若干混入。Ⅺ層ほど真黒に炭一色ではないが，黒褐色土の混入は目立たぬ存在で，木炭がつまっている感じの層。

第Ⅵ層：灰と炭粒と茶褐色土とが混合した層。Ⅹ層の上部が汚された感じで，Ⅹ層との境は必ずしも明瞭ではない。

第Ⅶ層：灰と炭粒と土粒とが混合した層で汚れた灰褐色を呈する。構成はⅧ層とほぼ同じだが，灰が主体でべとついている。

第Ⅷ層：炭粒と灰と土粒とがごちゃまぜに攪拌された感じの層。炭粒が主体で黒褐色を呈する。

第Ⅸ層：Ⅹ層が一度掻き出され，さほど土との混合がすすまぬうちに再堆積した感じの層。構成はⅩ層とほぼ同じだが，不明瞭ながら白灰色の灰と赤褐色の灰との互層が部分的に認められる。

第Ⅹ層：赤褐色を呈する灰層で部分的に白灰色の灰ブロックが点在する。セクション図に斜線の入った断面で示されるように，大きな木炭がそっくり残されており，大きな木炭の内部は生焼けのものが多い。

第Ⅺ層：木炭の微粉を主体に灰が多少混入する炭層。

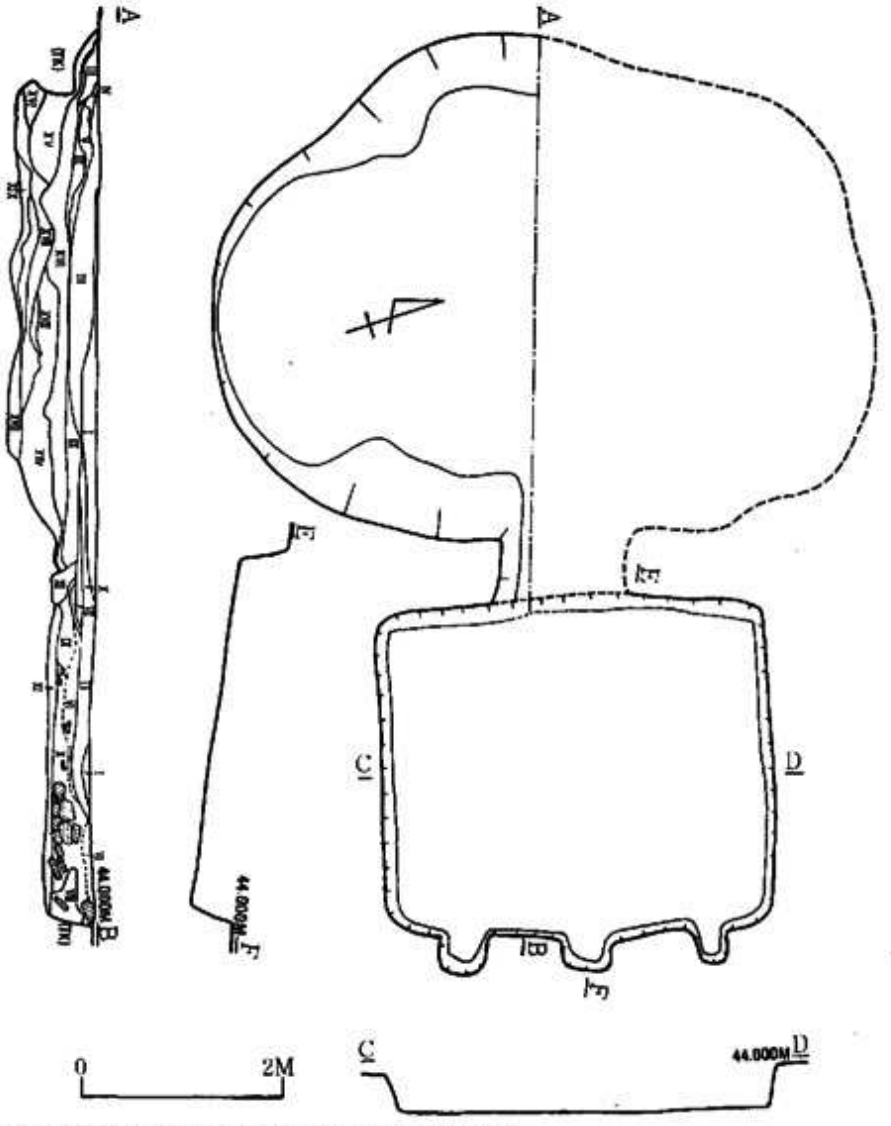
第XII層：壁をつくりだすために固くつまれた感じのもので，赤褐色の灰を主体に白灰色の灰が混合する。

第XIII層：黒褐色土と木炭粒と黄褐色火山灰〔Tk〕とがごちゃまぜになっている層。主体は黒褐色土と木炭粒とである。部分的には不明瞭ながらさらに分層可能な堆積をみせるが，全体としては1層と捉えられる。

第XIV層：黒褐色土と木炭粒と黄褐色火山灰〔Tk〕とがごちゃまぜになっている層。主体は〔Tk〕で全体としては暗黄褐色を呈する。

第XV層：構成はXIV層とほぼ同じだが，比較的大きな黄褐色火山灰〔Tk〕の塊を多く含む。

第XVI層：XIII層とほぼ同様と思われるが，再堆積の黄褐色火山灰，黒褐色土，再堆積の黄褐火山灰と分層し，ごちゃまぜになっていない。



第35図　S253遺跡第1号および第2号掘り込み図（●は木炭）

第Ⅶ層：一度掘り出された黄褐色火山灰〔Tk〕が再堆積したもので，黒褐色土と混合して汚れている。

第Ⅷ層：黒褐色土と黄褐色火山灰〔Tk〕とが半々くらいの割で混り合った層で明茶褐色を呈する。それぞれの粒子は微細で，この層はかなりしまっている。

第Ⅸ層：上から茶褐色土，灰褐色の灰，黒褐色土とサンドイッチ状に重なった層であるが，その分層が明瞭な部分はわずかで，多くはそれらが入り乱れ混り合っている。

以上の層のうち第Ⅹ，Ⅺ層は，その構成が純粋で堆積状態も整然としており1号掘り込みの構築目的と直接に関連する層と理解される。

1号掘り込み（第35図，図版23A）

形状はほぼ方形で東西方向約3.3m，南北方向約3.8mをはかるが，東側に幅30～40cm，奥ゆき約40cmの方形の突出部が3つ付属している。壁は黄褐色火山灰〔Tk〕の上面から約50cmの深さまでほぼ垂直に掘り込まれている。3つの突出部の壁もほぼ垂直である。底は水平な平坦面で，さらに段差なく3つの突出部の底につづいている。一連の壁は固くしっかりしており，その大部分が焼けて赤化している。底面の一部，とくに東側の底面にも同様の赤化が認められた。

この赤化の状態と上述した，第Ⅹ，Ⅺ層の構成などから，この1号掘り込みが炭焼窯であることはほぼ疑いのないところである。これが炭焼窯であれば，東側に付属する3つの突出部は恐らく煙道と思われる。また，西側の2号掘り込みに連なる部分は窯口であろう。

2号掘り込み

これは長径約6.5m，短径約5mの不整な楕円形を呈する大きな深い掘り込みで，東側は1号掘り込みの窯口と思われる幅1.1mの突出部と連結している。この窯口の底は波打ちつつ西へむかって次第に下降してゆく。一方，2号掘り込み本体の底面は中央部ではゆるやかに波打ってる程度であるが，周縁にむかうにつれ起伏が激しくなり，底面といった一つの面が明瞭には捉えられない。黄褐色火山灰〔Tk〕上面からの壁高は，南側では40～60cm，東側および西側では50～90cmの間である。掘り込みの角度も一様ではなく，南側ではほぼ垂直であり，東側ではゆるやかな傾斜に掘り込まれ，西側では緩傾斜から急激にえぐり込まれている。

この2号掘り込みは，直接に1号掘り込みと関連するものであろうが，最下層のⅨ層には木炭の細粒や灰の含有がさほど多くはなく，壁や底のつくりだしが甚しく一様ではない上に，壁などに熱による赤化といった現象は見受けられない。このことから推して，この2号掘り込みは，炭焼きに伴う第二義的な作業場，焼きあがった木炭の処理場所といった施設であったと思われる。なお，北側半分は，南半分と同一の構造，層堆積を有するものと判断されたゆえ，発掘はしていない。

出　土　品（図版25）

陶磁器とかガラスの破片といった出土品は，１号，２号掘り込みの上の耕作土，および Ⅰ 層から Ⅳ 層までの各層から出土したが，出土品それ自体は出土の層位にかかわりなく同一の様相を示す。

出土品を以下に列記するが，磁器のうち文様の付されているものは大部分プリントによる。陶磁器の数量は最小の個体数である。

陶　器	壺	1
	浅鉢	1
	いわゆる貧乏徳利（図版25-８）	2
	擂鉢	1
	耳つき小鍋	1
磁　器	飯茶碗（図版25-４・５）	9
	その蓋（図版25-１・２）	7
	湯呑茶碗	2
	小皿（図版25-６）	3
	小鉢	2
	ぐい呑（図版25-７）	1
	三平皿のようなもの（図版24-３）	3
	燭徳利	1
銅銭（図版25-12～14）	寛永通宝	1
	１銭銅貨（明治９年鋳造）	1
	１銭銅貨（明治10年鋳造）	1
銅製品	キセルの吸口（図版25-９）	1
鉄製品	鉄鍋破片	2
	缶詰の缶破片（図版25-11）	若干
	座金	1
	５寸釘（図版25-10）	1
	くさび	1
	その他の破片	約20
ガラス製品破片		約30
合成樹脂製の小さなボタン		3
動物遺骸	エゾシカ落角	左右各１（異個体）
	サメ類椎骨	6
	ホタテなどの貝殻片	3

（高橋　和樹）

第2節　いわゆる「風倒木痕」について（第36図）

第34図に示したように調査区域内に17個のいわゆる風倒木痕が見出された（FT 1～17）。耕作土を剝ぎ一様に黄褐色火山灰質土層まで掘り下げた時点で，それらは特有の平面観を露わにする。多くのものは，二つの不整な半月形を呈する黒色の土壌に囲まれた，長径2.5～5mのほぼ楕円形のプランを有し，黒色の土壌に馬蹄形に囲まれた内側は一帯の黄褐色火山灰質土層とほぼ同様の土層が，既に耕作によって削平されてしまってはいるが，かつてはマウンドを形成していたようだ。この内側の黄褐色の火山灰質土の色調は，乾ききると周囲にひろがる黄褐色火山灰質土層より一段と明るさがきわだつ。これは後にも触れるが，黒色の土壌の落ち込みに端的に示されるように，内側の黄褐色の火山灰質土が排水溝にぐるりと囲まれているようなもので，周囲の黄褐色火山灰質土層とはくらべものにならないほど水はけが良好のためかと思われる。

17個のいわゆる風倒木痕の長軸方向には，おおまかにみてほぼ南北をとるもの（FT 1，2，8，13），ほぼ東西のもの（FT 3，4，7，9，10），ほぼ北東―南西のもの（FT 5，6，11，12，14，15，16，17）などが認められた。

いわゆる風倒木痕が人為的な遺構ではなく，自然の営為の所産たることは第3章に詳述するが，しばしば遺跡において見出されるこのいわゆる風倒木痕の構造，層堆積を把握するため，またこのS 253遺跡の遺跡としての性格を考察する必要上，17個のうち規模の大きなFT1，FT2の2例について調査を実施した。

耕作土を剝ぎ黄褐色火山灰質土層まで掘り下げた時点で確認された平面観は第36図に示した通りである。遺憾ながらFT1については，ほぼ南北に二分するセクションラインより北側の平面観の実測がおわらぬうちに発掘作業が進んでしまったため，写真と対比しつつおおよその復原を試みるに至った。平面図中，実線で囲まれた部分は第Ⅴ層，第Ⅶ層など，特に色調の濃い黒色の土壌の分布を示し，その内側の破線と実線とに囲まれた部分は，その他の黒っぽく汚れた土壌の分布を示すよう努めた。

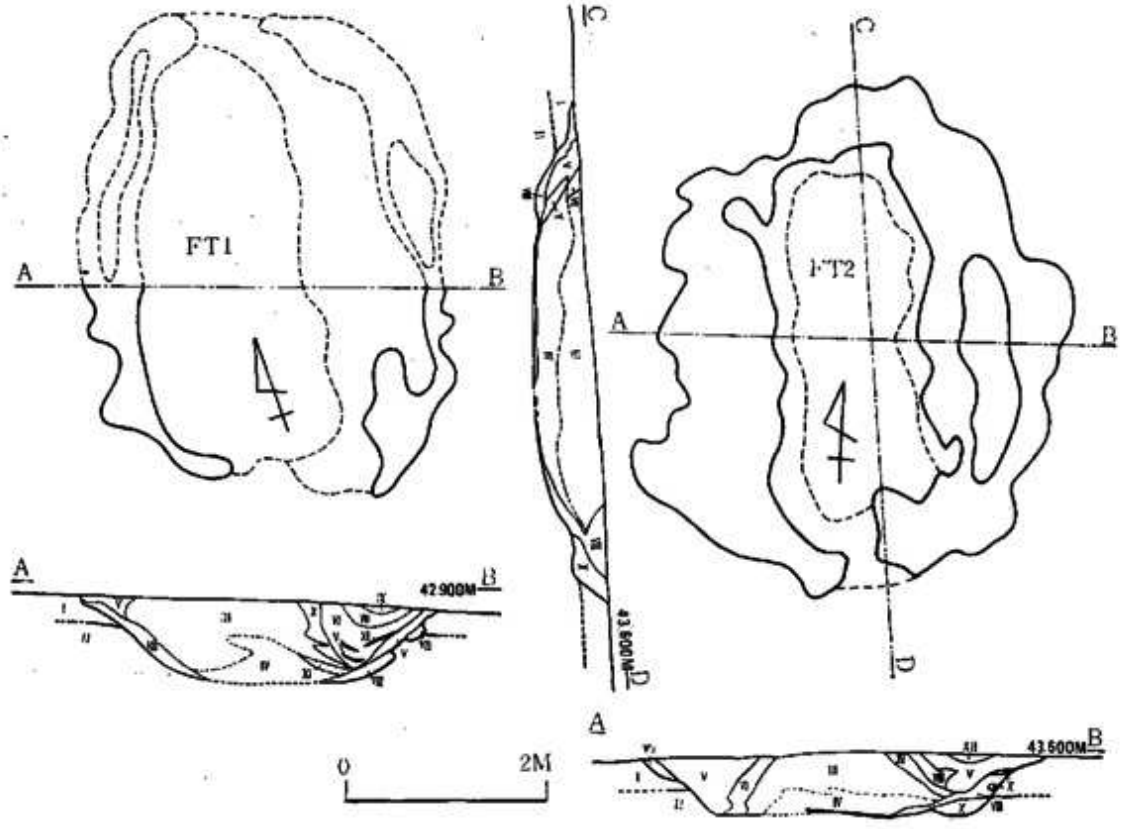
FT1およびFT2の層堆積について（図版23B）

FT1およびFT2の層堆積は基本的に同一であり，まさにいわゆる風倒木痕に特有のものである。以下に層名を列記する。

第Ⅰ層：黄褐色火山灰質土層。粒子は細かく湿った状態では粘性に富む。いわゆる漸移層である。

第Ⅱ層：月寒火山灰層〔Tk〕。いわゆる地山で，明るい黄褐色を呈し，堅くしまっている。

第Ⅲ層：ほぼ第Ⅰ層と同様だが，ぼそぼそしており，一度浮いた感じの層である。乾ききると色調は第Ⅰ層より明るくなり，明るさがきわだつ。この層は本来はマウンドを形成していたと思われるが，既に耕作による削平を被っていた。



第36図　S253遺跡におけるいわゆる風倒木痕

第Ⅳ層：ほぼ第Ⅱ層と同様だが，一度浮いた感じで，ややぼそぼそしている。色調は第Ⅱ層よりやや明るい。第Ⅲ層と第Ⅳ層との差は小さく，断面を観察して瞰げに分けられる程度である。

第Ⅴ層：黒色土。粒子は細かい。

第Ⅵ層：黒褐色土。第Ⅴ層とほぼ同様であるが，湿った状態では第Ⅴ層の黒さがきわだつ。

第Ⅶ層：暗褐色土。粒子は細かく，第Ⅵ層より色調が淡い。

第Ⅷ層：いわゆる風倒木痕の壁沿いに黒色土が陥入していったものらしく，第Ⅲ，Ⅳ層の小塊を混える層。全体としてはほぼ暗褐色を呈するが，部分的には色調に濃淡の差が認められ，上部ほど色調が濃い傾向がある。

第Ⅸ層：暗黄褐色火山灰質土層。黄褐色の火山灰質土に黒褐色の土が少し混合したような感じである。やや粘性に富む。

第Ⅹ層：第Ⅸ層とほぼ同様だが，第Ⅸ層より色調淡く，粘性は乏しい。

第Ⅺ層：黄褐色を呈する火山灰質土層だが，若干汚された感じを有し，粘性に富む。色調は第Ⅺ層→第Ⅴ層へと向うにつれ濃くなる。

第Ⅻ層：灰褐色火山灰。ざらざらした火山灰の細粒で，二次的に流されてきたもののようである。

FT 1（第36図，図版24）

9～10—H～I区に見出され，長径およそ4.8m，短径3.6m程で，長軸はほぼ南-北方向をとる。平面的には東側と西側にそれぞれ半月形に黒色の土壌が相対して分布するが，黒く汚れた土壌の分布は東側の方が多い。セクションラインにはかかっていないが，黒色の土壌の上にはザラザラした火山灰（第XII層）が薄くのる。

断面図に示される如く，第V層の下に続く第VIII層が東西両側から深く落ち込んでおり，あたかも第III，IV層は浮き上っているかのようである。第IV層と第II層とが接する横底部の境界はさほど明瞭ではないが，比較的ぼそぼそした第IV層としっかりと固くしまった第II層との間には，東西両方向から落ち込む第VIII層の延長線に沿って，わずかながら褐鉄分の沈着が認められる。最深部での第I層上面からの深さは約80cmを測る。

FT 2（第36図，図版24）

7—E区に見出され，長径約5m，短径約4mを測る。長軸方向はほぼ南北である。平面的には，黒色の土壌が馬蹄形に取り囲んでいる。東側の黒色の土壌の上には第XII層の火山灰が薄くのっている。

東西，南北の2方向のセクションをとったが，第V層の下に続く第VIII層が深く落ち込んでゆき，第III，IV層をあたかも浮きあがらせている如き様相は共通しており，FT1のそれとも同一である。第I層上面からの深さは約60cmを測る。（高橋　和樹）

第2章　発掘区出土遺物（第37図）

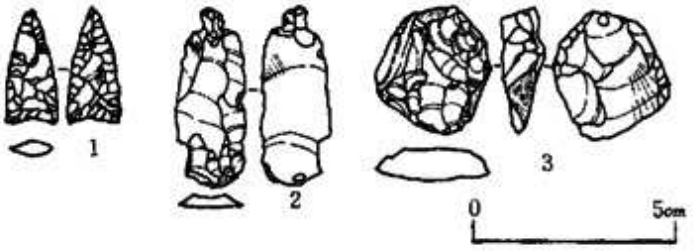
今回の調査によって本遺跡から出土した先史時代に属する遺物は，以下に説明する3点の石器だけであり，このほかには土器の小破片，黒耀石のチップといったものすら検出されなかった。

3点の石器は，7—D～E区に偏在して見出されたが，いずれも耕作土中に包含されており，如何なる経緯の下で遺存されるに至ったのかは，全く不明のままである。

石　鏃（S—1）（第37図，図版20B）

無茎の石鏃で，細長い，二等辺三角形の底辺がやや彎入する形態を有する。両面加工で縁辺全周にわたって入念に二次加工が加えられているが，裏面の中央部には第一次剥離面が残存している。この第一次剥離面から推して，素材は恐らく縦長剥片であろう。全長28.0mm，最大幅13.0mm，最大厚3.4mm，重量3.1g。黒耀石製。

石　匙（S—2）（第37図，図版20B）



第37図　S253遺跡発掘区出土石器実測図

いわゆる縦形石匙の形に作出されたものであるが，縦形剥片の先端部に両側から二次加工が加えられつまみが作り出されただけのもので，側縁などには殆ど二次加工が認められない。ただ，背面の両側縁に沿って，わずかに縦方向の擦痕が認められ，ナイフなどとして使用された可能性はあるようだ。全長44.2mm，最大幅18.5mm，最大厚4.5mm，重量3.1g。黒耀石製。

掻　器（S—3）（第37図，図版20B）

扁平石核の残核を素材とする掻器と考えられる。裏面に剥片をとったあとがあり，背面の一端に調整を施し刃部としている。背の高い刃部ではない。背面，腹面とも全体にわたって短かい不規則な擦痕が認められる。刃部近くの稜は両面とも磨耗している。全長31.0mm，最大幅29.0mm，最大厚9.0mm，重量7.8g。黒耀石製。

第3章　小　　括

これまでに説明してきた通り，本遺跡においては，先史時代に属する遺構は全く見出されず，近代の所産たる炭焼窯が1基（1号掘り込み）と，その付属施設たる2号掘り込みが検出された。

また，いわゆる風倒木痕が17個確認され，そのうちの2個について調査した（FT_1，FT_2）。

遺物としては，先史時代に属すると思われる石器3点のほかは，1，2号掘り込み廃棄後の窪みに投げ捨てられた陶磁器などが出土しただけであった。

ともかく，これらについて若干の考察を加えておきたい。

1号，2号掘り込みについて

既述のように1号掘り込みは，その床や壁面が熱を受けて赤変していること，床面にじかにのる炭層や生焼けのままのこされた木炭を包含する灰層の整然たる堆積などにより，これが炭焼窯であったことは殆ど疑いのないところである。

北海道における炭焼窯の発掘調査例については寡聞にして知るところがないが，最近になって山木雄三氏らを中心に木炭生産についての実地調査が本格的に進められるに至り，窯の形態，構造，構築の過程といった具体的なことについても，詳細な研究成果がもたらされてきた。

それによると，元来，北海道では在来窯ともいわれる角窯が一般的であったが，明治20年～30年代にかけて改良窯と称する卵形の炭窯が出現，その後さらにベコ窯，農林1号へと改良がすすめられた。それらの窯のうち，明治，大正期には角窯の使用が支配的であったといわれるが，角窯は火のまわりが均等ではなく，角の部分に未炭化木が残るという欠点があったという[1]。

本遺跡において見出された1号掘り込みは，3.3×3.8mを測る方形のもので，形態的にはこの角窯の一種と思われる。1号掘り込みに生焼けの未炭化木が残されていた事実も，角窯の性能からすれば得心がいこう。ただ，1号掘り込みのように，煙道と思われる突出部が3つも付属する角窯の類例が他にも存在するか否かは分らない。

さて，『白石村誌』によると，白石開村当初の明治初年代に，薪材の伐採，木炭の製造などに従事し，生計を営む村民があったという[2]。白石地区の開拓草創時代（ほぼ明治10年代）には，森林を切り開いて木炭を焼き，これを売るかたわら開墾をすすめるというのが一般的であったらしく，『白石発展百年史』には詳しくそうしたことが書かれている。上野幌地区においては，明治18年に小ケロ石松らが入植したのが開発の始まりで，当時はみんな炭焼きのかたわら，わずかな畑をつくっていたという。まさに，「北海道での木炭生産の初期の形態は，開墾の障害となった原木の処分のために行なわれ，副業的小規模生産で[3]」あったという一つの典型であったろう。そして明治25年頃から次第に炭焼きから，開墾を主とする生活になっていったという[4]。残念ながら，その開拓初期の炭焼窯がどのような場所に構築され，その形態や構造がどのようであったかについての記載はない。

上野幌地区のうちでも，本遺跡の存在する一帯に，開拓の最も初期から入植していた藤井三郎太氏の御息女，藤井竹乃さん（上野幌876番地在住）の記憶によると，この一帯の人々に初めて炭焼きを教え，実地に指導したのは渕野半平氏であった。渕野氏は明治23年に下野幌地区に入植したと伝えられている[5]。野幌では明治20年代の後半に冬季間の炭焼きが一般化していたといわれ[6]，上野幌地区への人々の入植，定着は比較的新しいことではあったが，ここでも明治30年代前半には同様に炭焼きが一般化していたであろう。

ところで，具体的な詳細を知ることはできなかったが，竹乃さんによると，渕野氏が普及させた当時の炭窯は，卵形に地面を掘り下げ，その深さと地上の設備の高さとを合わせた全体の高さが6尺5寸程であったという。これは『野幌部落史』が伝える黒炭窯[7]と殆ど同様の形態，構造のものと推察され，山木氏らのいう卵型窯に相当しよう。

今回見出された炭窯は卵形のものではなく，角窯の一種とおぼしきものであり，それゆえ渕野氏の技術指導による窯ではない可能性が強い。いずれにせよ，1号，2号掘り込みの構築年代が，渕野氏が下野幌に入植した明治23年以降であることは，ほぼ疑いのないところである。

1号，2号掘り込み廃棄後の窪みへの不用品や破損品などの投棄はさらに新しいことであった。竹乃さんによると，本遺跡に接する小さな谷はごく最近に至るまで，付近一帯の人々の塵芥の捨場であったという。今回出土をみたものは，毀れた茶碗であったり，不用の空缶であったり，わずかばかりの食物残滓であったり，使われることのなくなったキセルや銅貨であったり等々，いかにもとりとめがなく，塵芥として捨てられたものという印象が強かった。

いわゆる風倒木痕について

本遺跡ではいわゆる風倒木痕が17個確認された。いちいち報告されてはいないが，札幌市内のある遺跡で，それぞれ同一の長軸方向をとるいわゆる風倒木痕が，ほぼ等間隔に谷に沿って並んでいた例を実見したことがあるが，本遺跡における17個の配列や長軸方向などは，必ずしも整然たる同一性をもたない。これは，本遺跡においては，いわゆる風倒木現象が幾度かに亘って発生したためと判断される。

いわゆる風倒木痕については，最近になって北海道でも，明らかにこれが人為的なものではなく，自然の営為の所産たることが認識されるに至った[8]。それ以前にもいわゆる風倒木痕の報告例は皆無ではなく，例えば風連日進湖畔遺跡で，住居址でもなさそうな遺構として報告されているものは[9]，恐らくいわゆる風倒木痕の片側であろう。札幌市教育委員会がこれまでに報告してきたもののうち，N293遺跡でC型と分類された第48号，第49号ピットは明らかにいわゆる風倒木痕であり，第22，23号，第39号ピットなども[10]その片割れであることはほぼ間違いない。

さて，いわゆる風倒木痕が人為的な所産ではなく，台風など自然の営力によるものであろうことは，大土壙状遺構，ローム盛土土壙，あるいは竪穴土壙などと呼ばれてきた〝性格不明の落ち込み〟について，数多くの実例を再検討した能登健氏によって，明解に論述されたところである。氏の論拠は以下のようにまとめられよう。

①〝性格不明の落ち込み〟が人工的所産＝遺構であるのか否かが重要な問題となるが，そもそも氏自身が調査したものは，全例これを遺構と認定するに足る積極的証左に欠けていた。

②これを遺構であるとする説をみても，本来一つの性格を有するはずのものが，墓壙，貯蔵穴，おとし穴，産小屋など多岐，多様な機能のうちのどれかを有するものであるといった程度の憶測が下されるばかりで，説得力のある説明は見当らない。このことはとりもなおさず，人工的所産としては余りにその構築の意図が測り難いという事実を物語っている。

③この〝性格不明の落ち込み〟は，（文化圏や時期といったものに制約されずに）広く各地に見出され，また，（遺跡の性格や規模とは無関係に），発掘面積が広くなればなるほど数多く検出される傾向が強い。

④以上の諸点から，どうしてもこれが人工的所産であるとは考え難い。

⑤この〝性格不明の落ち込み〟に共通する最大の特徴は，落ち込みの中央部の充塡土層にローム（その落ち込みの基盤となる土層）を有することである。つまり，ローム面で平面プランを確認した場合，基盤のロームと充塡ロームとの間に，黒色土層（腐植土）がリング状に入り込む形となる。

⑥この堆積状況が，台風などの営力による風倒木痕であることを思わせるものであることは，強風による倒木の様子を実際に観察したところでも確信されるし，群馬県堂原遺跡においてこの種の落ち込み内に半腐植のままで大木が検出されている例からも頷けよう。[11]

以上①～⑥の論拠は，この〝性格不明の落ち込み〟が人工的所産ではないということに，殆ど異議をさしはさむ余地を残さぬほど完璧なものといえよう。

本遺跡に見出された17個についても，いずれも〔Tk〕層上面での平面観が，黒色の土層がリング状にめぐるという共通性を有し，調査した2例については図示したセクションに明らかなように，黒色の土層が深く落ち込み，あたかもいわゆる充塡ロームを浮き上がらせているかのような様相をみせ，いわゆる風倒木痕に相違ないものと確信される。残りの15個についても，既に説明したように，乾ききると，いわゆる充塡ロームの色調が，周囲の〔Tk〕層上面のそれよりも一段と明るさがきわだつことで，黒色の土層が深く落ち込み，あたかも排水溝がめぐっているかの如き状態であることは，容易に察知されるところである。

ところで，このようないわゆる風倒木痕とは別に，湧別市川遺跡のA-21，C-44，B-47グリッドなどに見出された特異な落ち込みが存在する。[12] 報告者によって cryoturbation による異常褶曲と考えられているものがそれで，C-44グリッドに見出されたものについてみると，第9図として掲げられたセクションに明らかなように，汚れた部分が複雑に入り組んではいるが，基本的にはⅢ，Ⅳ，Ⅴ，Ⅶ層といった汚れた土の落ち込みによって，より上部の層が浮き上がっているといった様相を看取することも可能である。それは，いわゆる風倒木痕のうち，能登氏のいう充塡ロームが大きく片側に偏ってのるもののセクションに極めてよく類似するものと推察される。

現在までのところ cryoturbation によるとされる異常褶曲については報告例が数少なく，いわゆ

る風倒木痕と湧別に見出されたような異常褶曲とでは，どのように形態や層堆積が異なるのか，十分明らかではない。

湧別市川遺跡の異常褶曲は，ごく普通にみられるいわゆる風倒木痕にくらべ，規模が小さい。加えて，いわゆる風倒木痕の底面中央部にはやや広く平坦な面がつづき[13]，そのためにこれが何らかの人為的な遺構であると理解されたことがあるくらいだが，湧別のものの底面には平坦な面は認められない。こうしたことから，湧別のものがいわゆる風倒木痕とは異なる成因によってできた可能性は否定しえないのである。

報告によると湧別の異常褶曲は石刃鏃文化層が堆積した後に起った現象であるという。石刃鏃文化層の堆積以降に，こうした異常褶曲がおこる寒冷期が存在したことについては，地質学の方面でも必ずしも十分な確証が得られているわけではなさそうであるが，湊正雄氏は，

①クリオターベションに関与する地層のなかには，例えば摩周火山灰 f 層など極めて新期のものがある。鈴木秀夫氏らによって観察されている根室地方の露頭でみられた化石構造土も摩周火山灰 f 以降のものである[14]。

②八ケ島原湿原の上部 Picea 帯に認められる減暖期（ほぼ B. C. 1000～2000年）の存在[15]。

③縄文後期に認められる海退[16]。

などから，北海道の平地に広くみとめられるクリオターベションの最後時期が縄文前期から中期にわたる温暖期以降の縄文後期に対比されるものと推定されている[17]。

専門外のことゆえ詳しくは検討しかねるが，小疇尚氏らによれば，化石周氷現象と呼ばれるもののうちでも，埋没 earth hummock と称されるものは，年平均気温＋6℃の等温線より北に分布するとされ，ひがし北海道では，より寒冷な気候下にみられる他の化石周氷河現象よりも，さらにずっと新しい時代に至るまでみられるようだ[18]。この earth hummock にともなう involution こそ，湧別市川遺跡にみられた異常褶曲の断面形にごく近いものであると筆者には思われる。

かつて十勝坊主中に見出されたという配石遺構が報告され，考古学的にも無視できない性質のものであると主張されたことがある[19]。これが真に配石遺構であるのか否かは，筆者には判断しかねるが，いずれにせよ北海道，とくに北・東北海道では，いわゆる風倒木痕とは成因の異なる異常褶曲で，その平面，断面形がいわゆる風倒木痕に類似し，考古学的な遺物を伴出するものがある事実は留意されて然るべきであろう。

発掘区出土の石器と遺跡の性格について

S 253遺跡は，土地所有者の談話を殆んど唯一の根拠として遺跡と認定された。その談話によると，かつてここから石斧や石鏃などが拾われたことがあるようだ[20]。

しかしながら，本調査の前に実施された，遺跡の範囲確認のための試掘においても，遺構はおろか一片の遺物すら見出されなかった。

今回の本調査においても，出土した先史時代の遺物は3点の石器だけであり，その他には土器の細片や黒曜石のチップといったものすら一切検出されていない。かつてここに何らかの遺跡が営ま

れたものとするならば，これは甚だ特異な事態といわざるをえない。

ところで，現在では全面的に耕作による攪乱をうけている遺跡においても，耕作が及ぶ以前に遺物包含層が存在した場合，包含層付近に生じたいわゆる風倒木痕には，多くの場合，その特徴的な黒色土の落ち込みに沿って遺物が流れ込み，遺存しているものである。殊に落ち込みの上部には比較的数多くの遺物がまとまって入っており，耕作土を剝いだ時点でその遺物の集中が注意されるのが通例である。

ところが本遺跡においては，17個のいわゆる風倒木痕が，ほぼ発掘区の全域にわたって見出されたにもかかわらず，一つとして遺物の入り込んだ例がないのである。この事実から，筆者は，耕作による攪乱が及ぶ以前においても，ここには遺物包含層が存在しなかったのではなかろうかという疑問を遂に拭い去ることができないのである。

何一つとして遺構がなく，遺物包含層も存在しない遺跡とは，一体どのような性格を有するものなのであろうか。本地点は非常に水捌けの悪い土地であり，発掘時にも一度雨が降ると何日も水がひかず，あたかも湿地のようになることを経験した。藤井竹乃さんのお話では，入植した明治の昔から，ここは非常に水捌けの悪い土地であったという。好んで人々が家を建て住みつくような所ではなかったようだ。

出土した3点の石器はいずれも耕作土中からの出土品であり，これらが一つのセットとして捉えられる保証は全くない。ただ，セットであると仮定してみるならば，この基部の多少彎入した三角形の石鏃と，縦長剝片に簡単な二次加工を加えてつまみを作り出しただけの石匙様のもの，そしてぞんざいな調整を施しただけの残核を素材とする小形の円形掻器といった取合せは，縄文時代早期末葉から前期の石器組成を思わせる。

これらがあくまでも一つのセットであると仮定するならば，本地点にかつて遺跡が営まれたと主張するに足る積極的な根拠がない以上，これらの石器は，どこか近傍の遺跡から何人かによって運ばれてきたものと考えるのが最も素直な考え方と思われる。最近まで塵芥の捨て場となっていた谷近くから，黒曜石製の完形石器のみが見出されたということは，恐らく開拓以降に好事家に採集された石器が，何らかの理由で捨てられるに至ったことを意味するものではなかろうか。

（高橋　和樹）

(註)

1) 山本雄三　1973「炭焼きの足跡をたずねて」「北海道開拓記念館だより」3—2，p. 3。
　熊谷憲夫・山本雄三・西野平治・小出成基　1974「標茶町の木炭生産について1」『北海道開拓記念館調査報告』6，pp. 55～61。
2) 白石村役場　1921『白石村誌』p. 150。
3) 前掲，山本　1973，p. 2。
4) 薩　一夫編1970『白石発展百年史』pp. 60～69。
5) 前掲，薩編1970，p. 64。
6) 関矢マリ子　1974『野幌部落史（復刊）』pp. 147～148。
7) 前註6）に同じ。
8) 西桔梗遺跡では，粘土丘とか特殊遺構Bと呼ばれるものが，風倒木によってできたものであるとの古崎昌一助教授の見解が明記されている。千代淮編1974『西桔梗』p. 101，305など。
9) 山崎博信　1965『風連日進の遺跡』p. 7。
10) 上野秀一編1974『N293遺跡』札幌市文化財調査報告書Ⅶ。
11) 能登　健　1974「発掘調査と遺跡の考察」『信濃』26—3，pp. 275～283。
12) 木村英明ほか　1973『湧別市川遺跡』
13) 本年度中に刊行される予定のS153遺跡に見出された第75号，第92号ピットなどは，いわゆる風倒木痕であるが，遺構といっても通じそうなそのプランや断面形を見ていただきたい（札幌市文化財調査報告書Ⅹ）。
14) 鈴木秀夫・野上道男・田辺　洋　1964「化石周氷現象の観察」『第四紀研究』3—3，pp. 167～177。
15) 塚田松雄　1958「花粉分析からみた後氷期の気候変遷」『第四紀研究』1—2，pp. 48～58。湧別市川遺跡周辺の泥炭地の花粉分析でも，@Abies-Picea Zone (3700～2300 y. B. P.) は寒い時期で，Sub-boreal Stage に相当するという結果が得られている。前掲，木村ほか1973，pp. 99～104。
16) 井関弘太郎　1958「日本における海面の相対的変化と沖積層」『第四紀研究』1—2，pp. 39～44。
17) 藤　正雄　1970「最近の地質時代における北海道の古地理的変遷」『新しい道史』8—3，pp. 10～12。
18) 小疇　尚・野上道男・岩田修二　1974「ひがし北海道の化石周氷河現象とその古気候学的意義」『第四紀研究』12—4，pp. 177～191。
19) 山田　忍・近堂祐弘　1958「十勝坊主中に見出された配石遺構について」『先史時代』7，先史学同好会，pp. 1～10。
20) 羽賀憲二ほか　1974『札幌市埋蔵文化財台帳』札幌市文化財調査報告書Ⅰ，p. 15。

結　　語

以上，S256，S257，S253の三つの遺跡について報告した。

S256遺跡からは，縄文早期末の竪穴住居址などの遺構3軒とその時代の遺物を数多く検出することができた。とりわけ，第1号竪穴住居址は明確な掘り込み炉と遺構内に7本の主柱穴と遺構外に3本の副柱を伴うもので，当時代としてははじめての例である。このように古い段階から，住居址内に炉址を伴う傾向は，道内の例のみならず，東北地方でも認められ，北日本の地理的特殊性に由来するものかもしれない。また，第1号竪穴住居址状遺構においては，床面（生活面）が2枚あり，下のF_1面直上から，厚さ5cm程の炭層がみつかっている。この中から，当時食料に供したであろうクルミとかドングリが検出されている。また，他の2つの遺構でも，炉址内とか小ピット内から同様の植物遺存体がみつかっている。遺跡が営なまれた当時は，花粉分析の結果では，冲積世最温暖期の植生になってきた時期で，ミズナラ・オニグルミなどの温帯性広葉樹が優勢な時代であった。あながち，このことと本遺跡で，これら植物遺存体がみつかった事実とが相矛盾するものではないであろう。

本遺跡の遺構内および発掘区から多く検出できた第Ⅰ群土器は，地文が単節斜行縄文ないしは撚りの方向の違う2種の原体を交互に施文した羽状縄文で，これに絡縄体および細い貼付文が多用される例である。器形は，口径に比べ底径が小さく，張り出しがあって，ここに絡縄体圧痕文が縦位に並列して施文されている。以上の型式表徴から，いわゆる東釧路Ⅲ式，タンネトウE式，中茶路式などと呼ばれるグループに近い位置を求められようが，これらのいずれにも本遺跡の土器群は明確に比定しえない。なお，今回の報告では，土器の項目の執筆担当者が，病気で倒れたため，その位置付けや類例などを具体的に詳述することができなかった。この責は，別の機会に果したいと考えている。

S257遺跡では，性格不明のピット以外，特に問題になる遺構は見い出せなかったが，縄文晩期末～続縄文時代初頭の土器を検出できた。

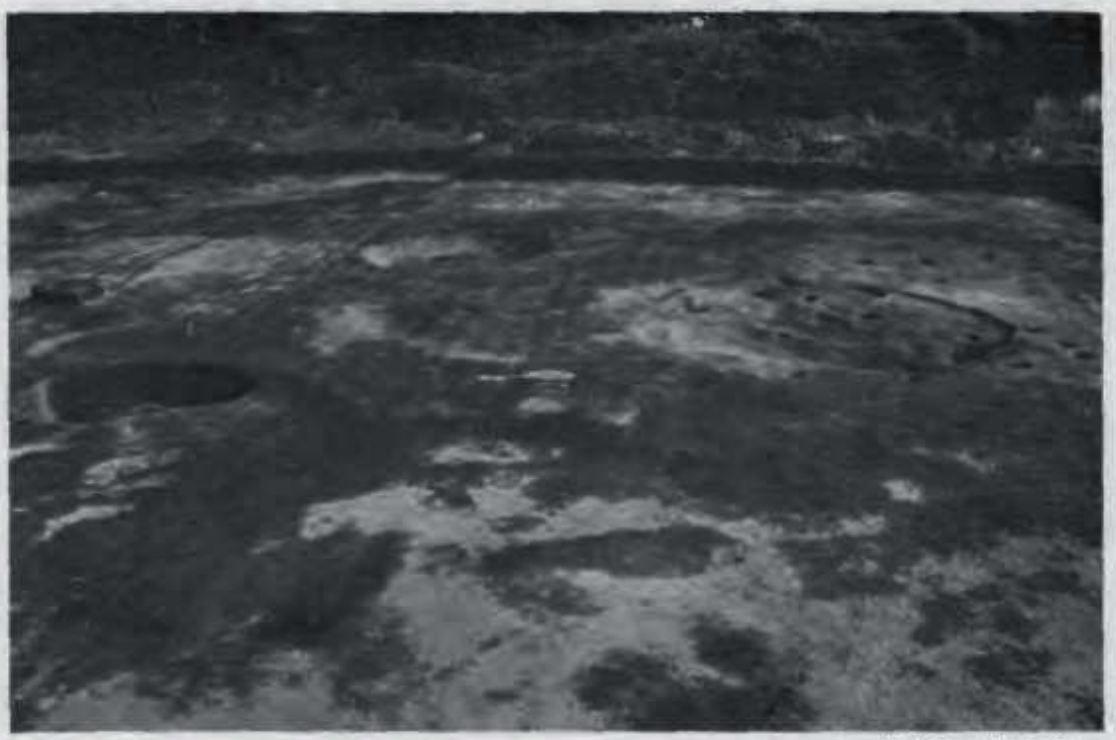
S253遺跡では，近代の炭焼窯址を発掘している。中世～近代そして現代の陶磁器の諸窯，レンガ焼窯なども，文献に残されないまま失なわれていく現状である。このような資料も，V・G・チャイルドの「考古学は1つである。だから，ここで論じられる諸概念は，その一切の分野に適用できる」（『考古学の方法』）という著明な言葉を借りるまでもなく，考古学的方法論による解明が益々重要になってくるであろう。

また，本遺跡地内で数多く発見された「性格不明の落ち込み」は，最近これが「風倒木痕」であるという意見が強くなってきた。ただ，北海道の場合寒冷気候に由来するcryoturbationによる異常褶曲の場合もある。遺跡を発掘していて，しばしば発見されるこの種の性格不明のピットも，今後一つ一つ性格を明らかにしていかねばならないであろう。　　（上野　秀一）

A　S256 遺跡遠景（南東より）

B　S256 遺跡発掘区遠景（南西より）

A　S256 遺跡E－5区南東壁セクション



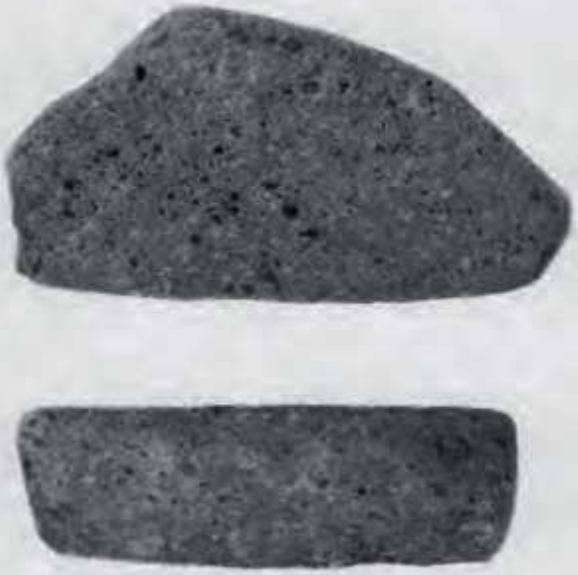
B　遺構近景（北西より）

A 第1号竪穴住居址（南より）

B 第1号竪穴住居址（東より）

A　第1号竪穴住居址炉址（北より）

B　第1号竪穴住居址出土土器



A 第1号竪穴住居址出土石器

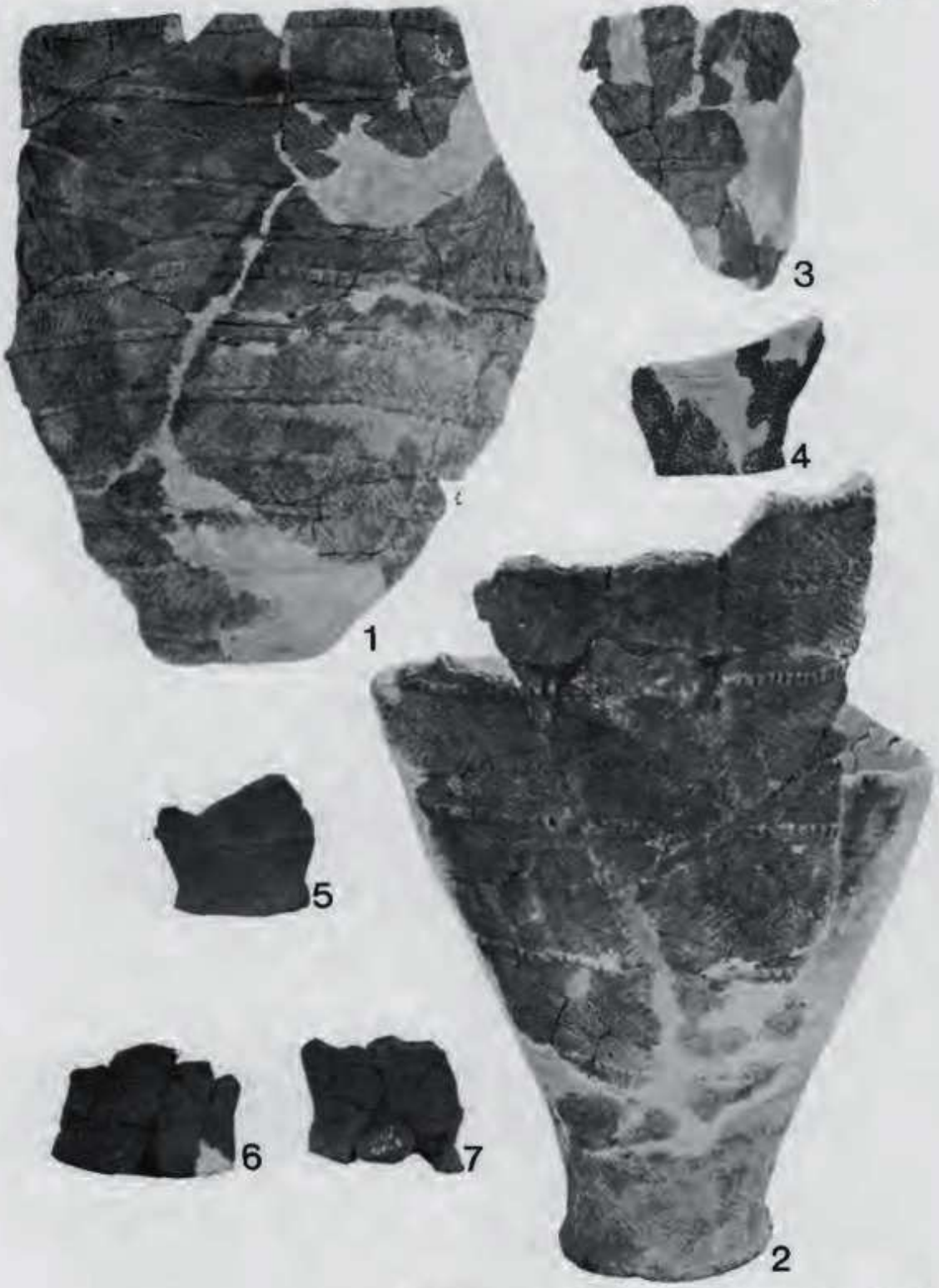
B 第1号竪穴住居址状遺構（F1面）(1)（北西より）

A　第1号竪穴住居址状遺構（F2面）(2)（北西より）

B　第1号竪穴住居址状遺構炭層・土器出土状態（F1面）（北東より）

A　第1号竪穴住居址状遺構（南東より）（F 2面）

B　第1号竪穴住居址状遺構（F2面）土器出土状態（南西より）



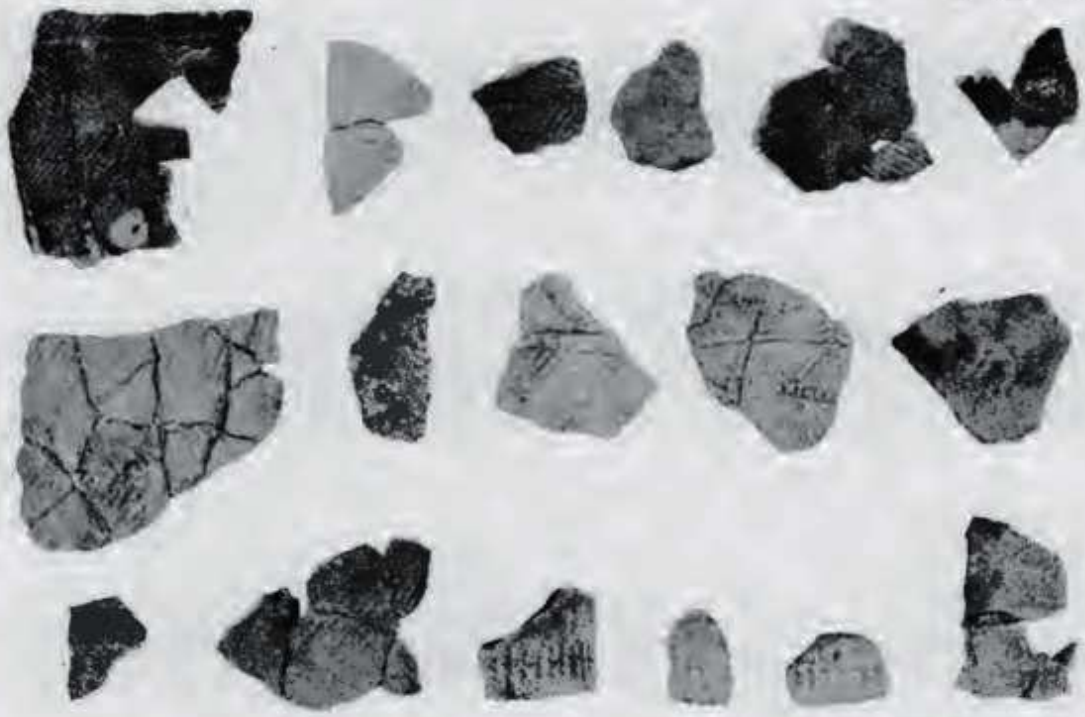
第1号(1・2), 第2号 (3～7) 竪穴住居址状遺構出土土器

A' 第1号竪穴住居址状遺構出土土器

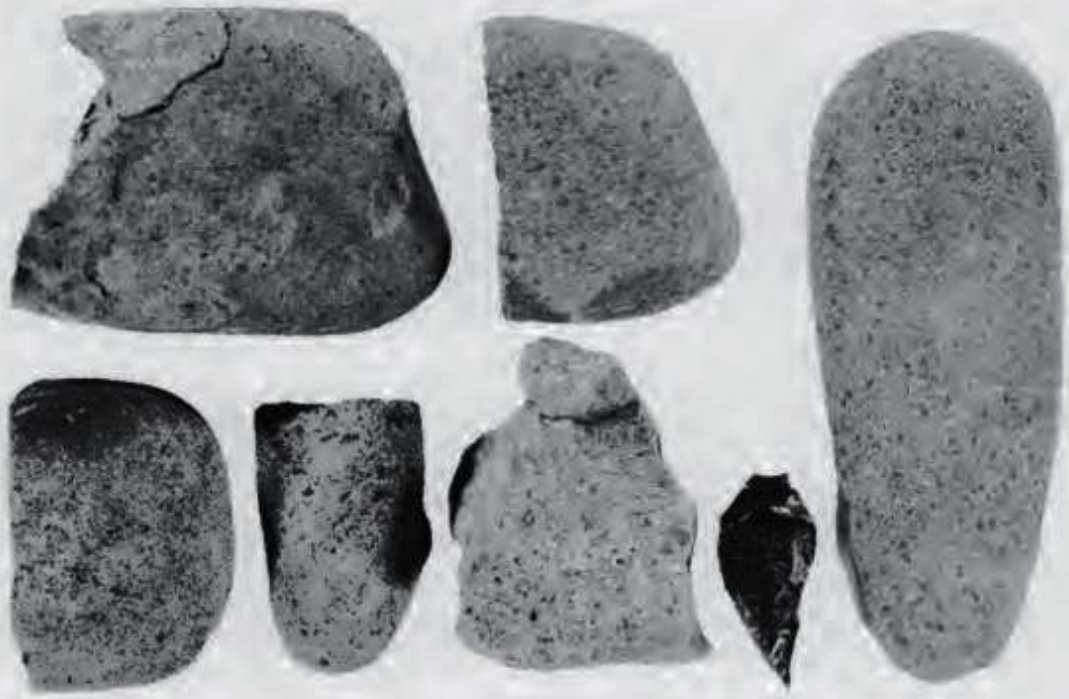
B 第2号竪穴住居址状遺構（南西より）

A　第２号竪穴住居址状遺構遺物出土状態（南西より）

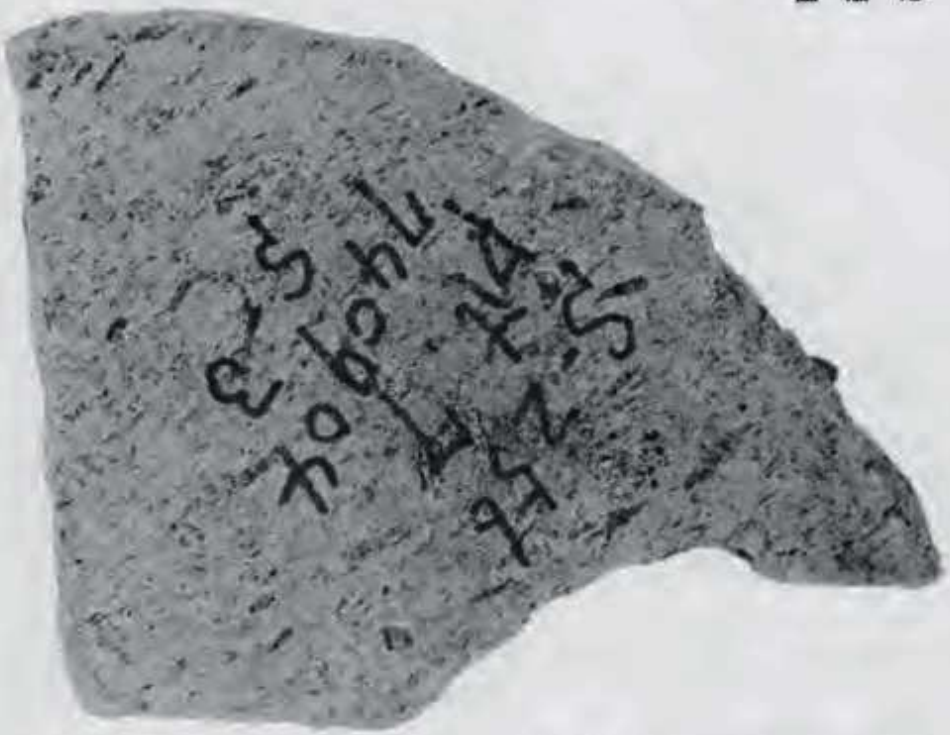
（B）第２号竪穴住居址状遺構出土土器(1)



A 第2号竪穴住居址状遺構出土土器(2)

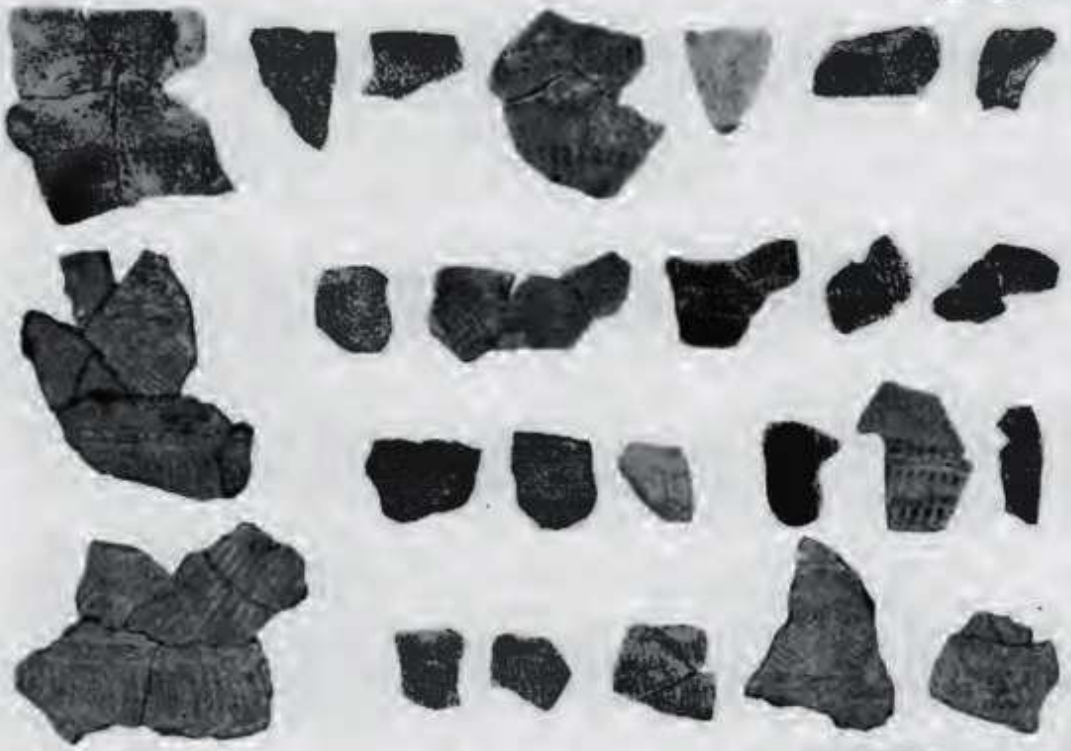


B 第2号竪穴住居址状遺構出土石器(1)

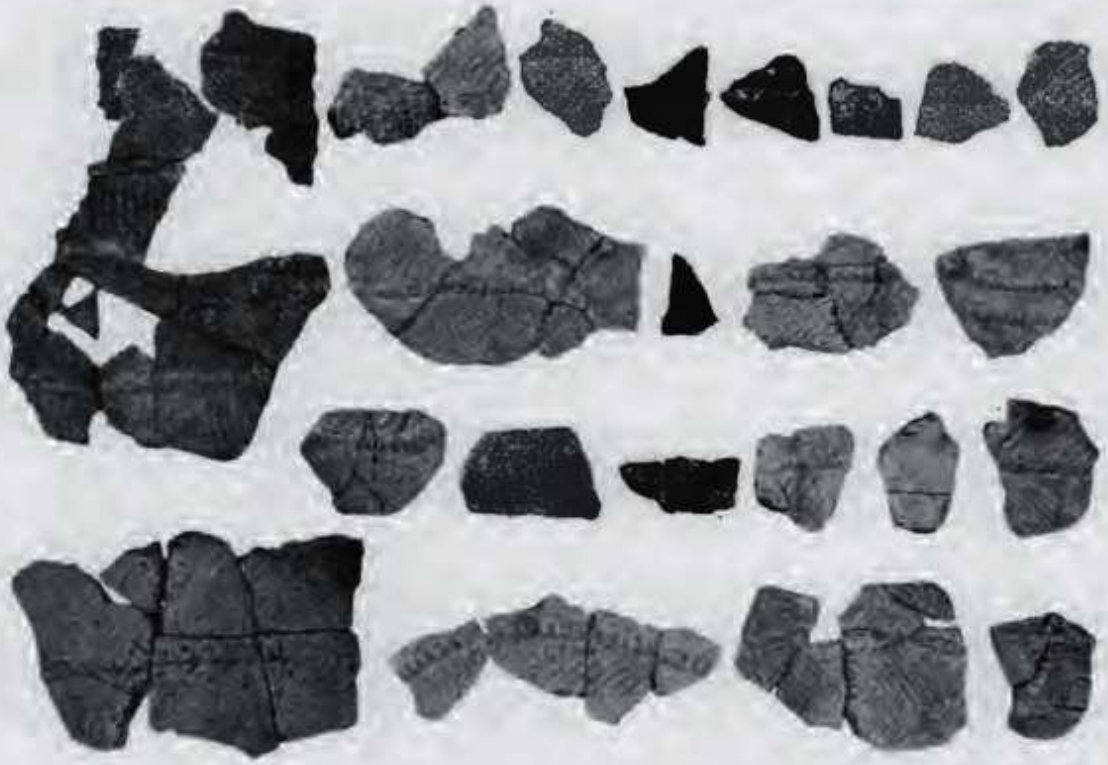


A　第2号竪穴住居址状遺構出土石器(2)

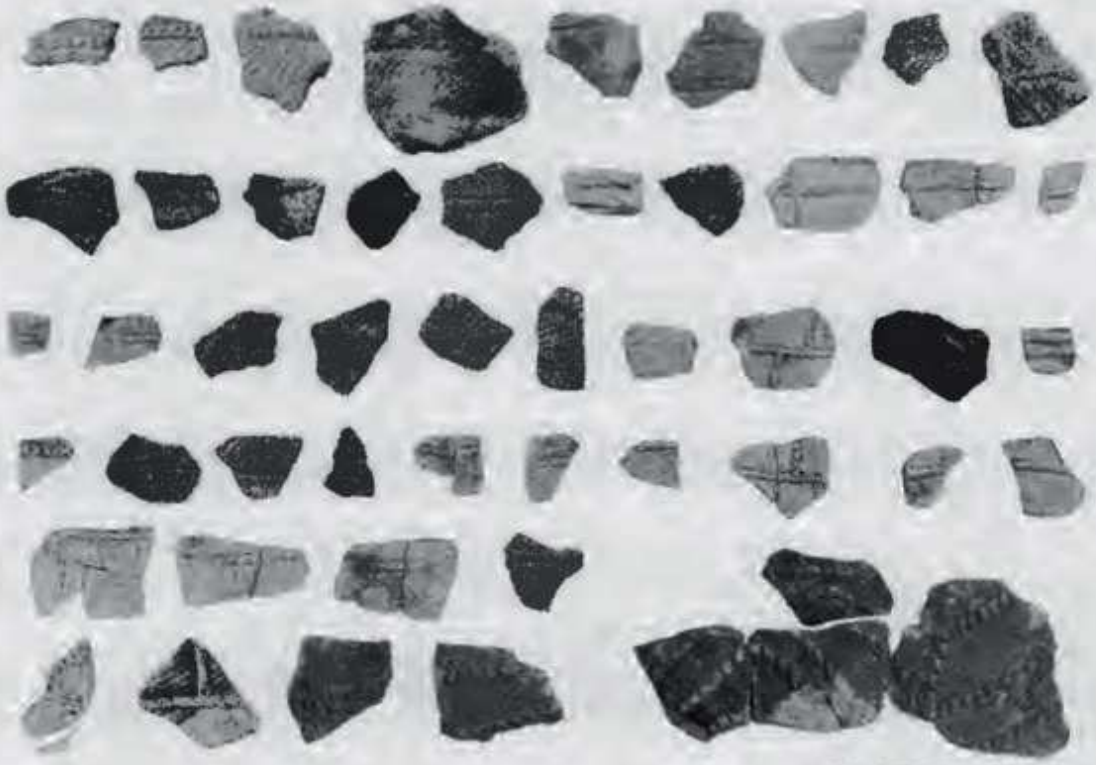
B　S256遺跡発掘区出土土器(1)



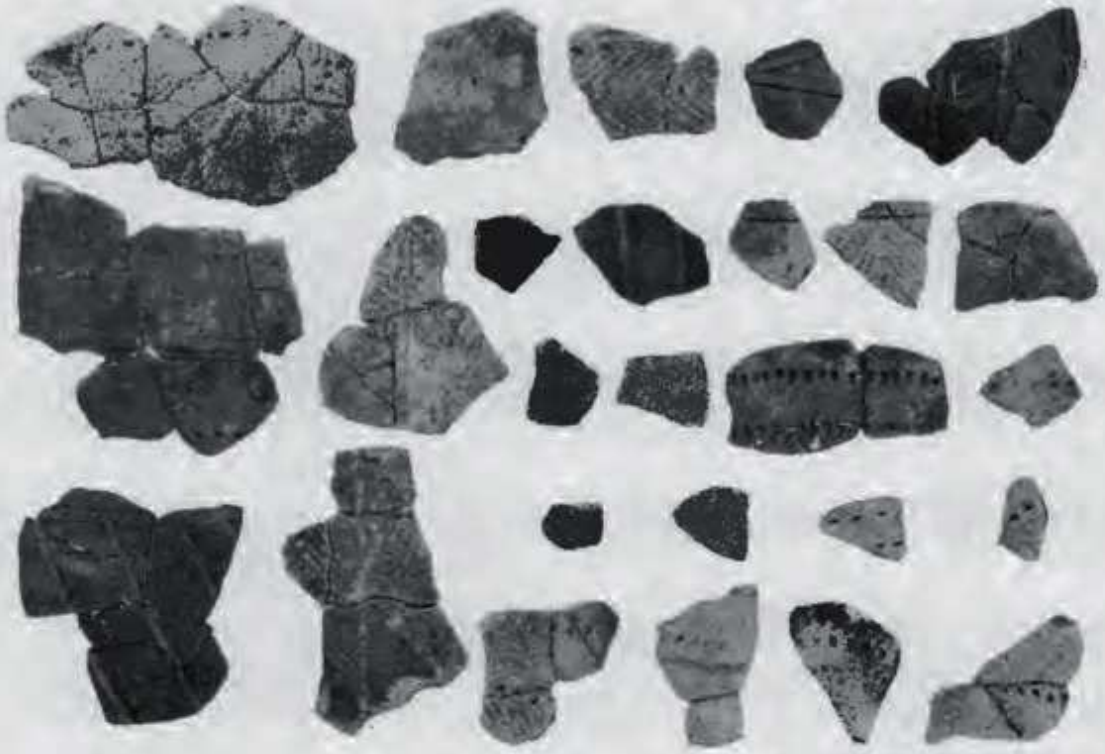
A　S256 遺跡発掘区出土土器(2)



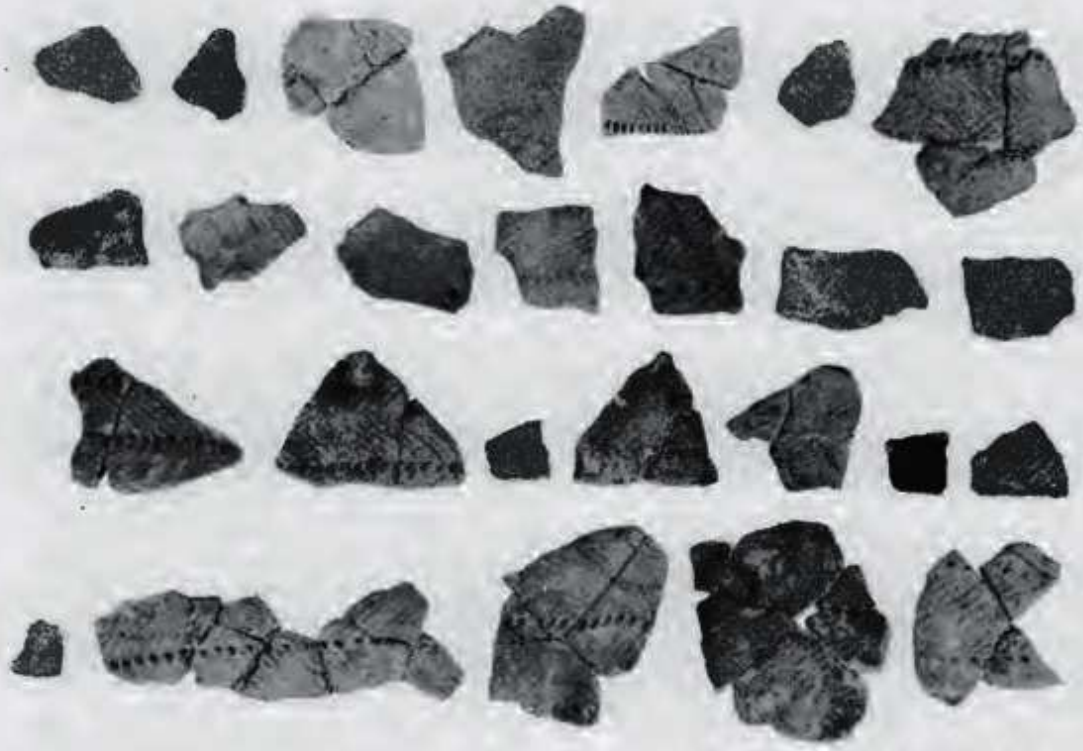
B　S256 遺跡発掘区出土土器(3)



A　S 256 遺跡発掘区出土土器(4)



B　S 256 遺跡発掘区出土土器(5)

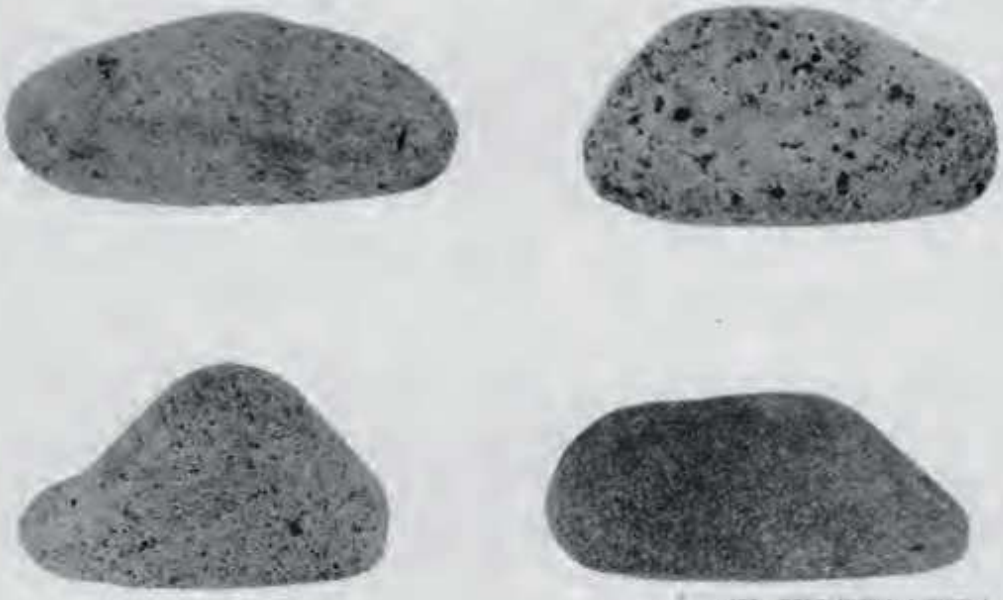


A　S256 遺跡発掘区出土土器(6)

B　S256 遺跡発掘区出土土器(7)

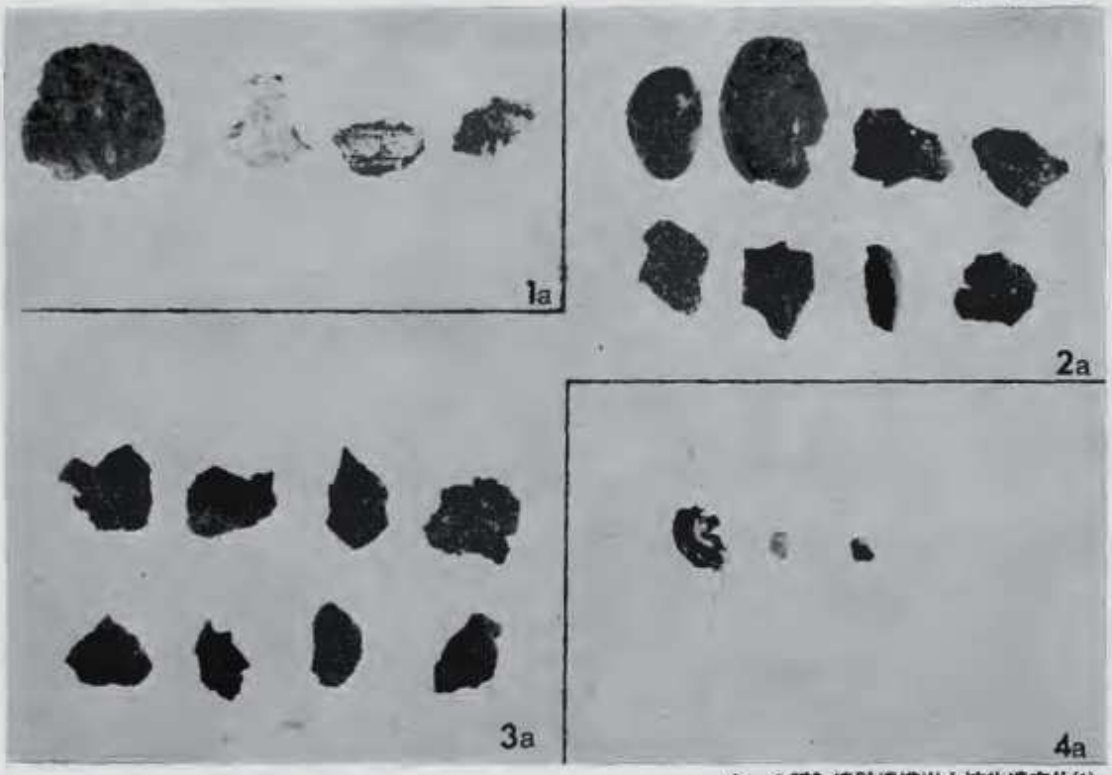
A　S256 遺跡発掘区出土土器(8)

B　S256 遺跡発掘区出土石器(1)



A　S 256 遺跡発掘区出土石器(2)

B　S 256 遺跡発掘区出土石器(3)

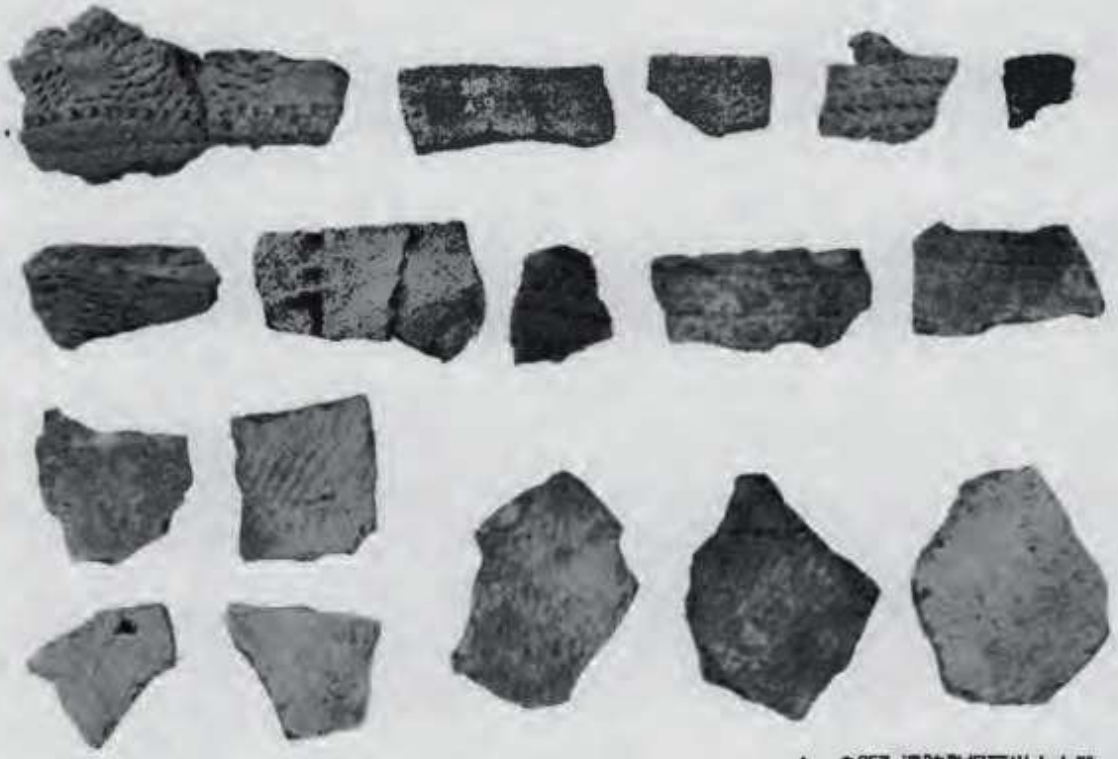


A　S256 遺跡遺構出土植物遺存体(1)

B　S256 遺跡遺構出土植物遺存体(2)

A　S257 遺跡遠景（北より）

B　S257 遺跡第1号ピット（北より）



A　S257 遺跡発掘区出土土器

B　S257 遺跡（上段），S258 遺跡（下段）発掘区出土石器

A　S 253 遺跡遠景（北より）

B　S 253 遺跡発掘区遠景(1)（北東より）

A　S253 遺跡発掘区遠景(2)（北東より）

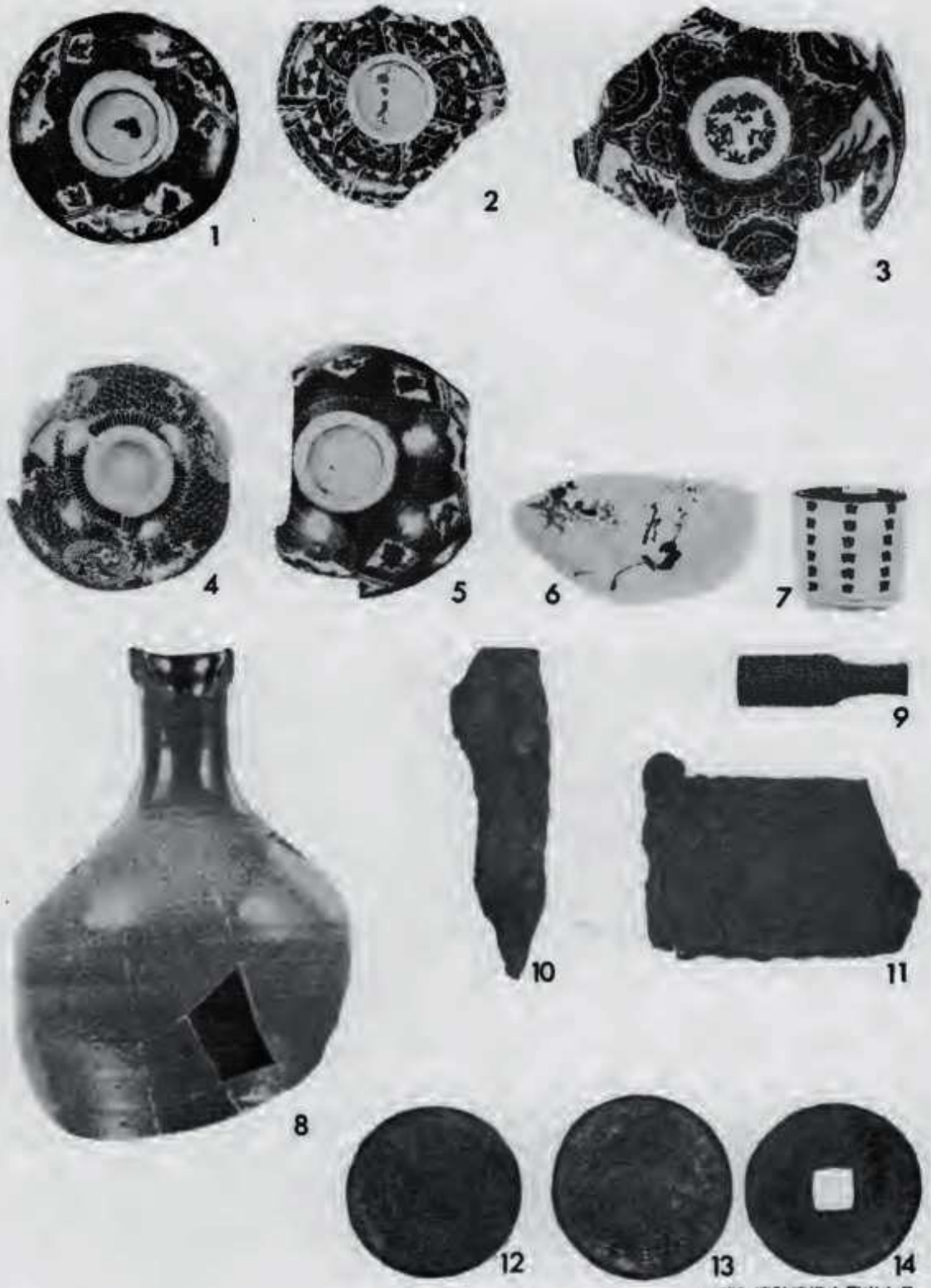
B　遺構近景（南西より）

A　1号掘り込み（南西より）

B　いわゆる風倒木痕の断面（ＦＴ 1)〈北西より）

A いわゆる風倒木痕上面観（ＦＴ 1)(東より)

B いわゆる風倒木痕上面観（ＦＴ 2)(東より)



S 253 遺跡遺構上層出土品

札幌市文化財調査報告書 XI

S 256 遺 跡

S 257 遺 跡

S 253 遺 跡

昭和50年7月15日 印刷
昭和50年7月31日 発行

発行者 札幌市教育委員会
札幌市中央区北1条西2丁目

印刷所 三陽印刷株式会社
札幌市西区手稲東3北2丁目